
STAR FESTIVAL

CENTER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

STAR FESTIVAL

【Nコード】

N3072M

【作者名】

CENTER

【あらすじ】

大鷲夏彦と琴織雨莉は幼馴染。

夏彦が少し天然の雨莉の面倒を見るのが、二人の日常だった。

その仲の良さを友人に冷やかされながら、友達以上恋人未満の関係で日々を過ごしていた。

しかし、修学旅行を目前にしたある日に起こったハプニングによって、二人の関係はグクシャクとしたものになってしまう。

果たして、二人の絆の行く末は――。

友人と行った企画で書いた作品です。

七月一日から七月七日まで、七日連続更新で完結します。

七月一日

STAR FESTIVAL

<七月一日(月)>

「行ってきます」

朝、通学鞆をぶら下げて家を出る。

今日からまた一週間が始まる……ダルイな。

ま、文句言っただってどうせ行かなきゃならないんだけど。

目的地は当然学校だが、それより先に行く場所が一つ。

人にはそれぞれ日課というものがあると思う。

そう大したものじゃなくていい。朝起きたら窓を開けるとか、顔を洗うとか、そういうレベルの話だ。

ほぼ毎日やることだから、そんな大したことはできない。

だから、結構みんな似たようなことをやってると思う。

でも、俺——大鷲夏彦おおわしなつひこの日課は、他の人とは少し違うような気がする。

学校へ行く前に向かうのは、隣の家。

琴織ことおりと書かれた表札のかかった小さな門を抜けて、玄関を開く。

鍵はかかっていない。

俺が顔を出すのが日課になってから、おじさんが出勤したあと開けっ放しにしてくれているからだ。

「おはようございまーす」

「夏彦君、おはよう。あらあら、もうそんな時間なの?」

家に入って声を上げると、廊下の先のリビングからおばさんが顔を出した。

「雨莉あまりのやつは?」

「まだ起きて来ないのよ」

「それじゃ、ちょっと起こしてきますね」

「いつもいつもごめんなさいね」

「はは、もう慣れましたよ」

靴を脱いで家上がり、玄関の近くにある階段を上る。

二階に上がって左手の部屋が、雨莉の部屋だ。

「雨莉ー。朝だぞー」

無駄だと思いながら、一応ノック。

……………返事なし、と。

「入るからな」

ドアを開けて、部屋の中に入る。

女の子の部屋らしく、柔らかい色使いの部屋だ。

壁際に綺麗に整頓された本棚と、教科書が詰まれた勉強机。

そして、ベッドの上で自分の長い黒髪に埋もれているパジャマ姿の女の子が一人。

漫画みたいな系目になって、なぜか目覚まし時計を抱きしめている。

「一応起きたところで力尽きたか」

こいつが、この家の一人娘の琴織雨莉。

俺が三月に生まれたときには、琴織のおじさんとおばさんがこいつを連れて会いに来たというから、筋金入りの幼馴染だ。

見ての通り朝が弱くて、目覚ましで一応起きはするものの、ほぼ百パーセントの確率で部屋を出る前に力尽きている。

「ま、変なところで機能停止するよりは、普通に二度寝してくれる方がいいんだけど」

制服に着替える途中の半裸の状態で寝てるのに遭遇したときはかなり驚いた。

とはいえ、その状態に遭遇した回数が三桁越えた辺りでもう慣れたけどな。

そう考えてみると、俺がこいつを起こすようになってからもう長いのか。

目覚まし使って、自力で起きようとし始めたのが中学入ってすぐだから、もう五年だな。

「つと、そんなどうでもいいこと考えてる場合じゃないか。おーい、雨莉ー、起きろー!」

呼びかけながら、ベッドに膝をついて、向こう側にあるカーテンを開く。

朝の日差しが差し込んでくる窓の向こうには、隣の家、つまり俺の家の窓が見えた。

一メートルも離れてなくて、少し手を伸ばせば簡単に触れることが出来る。

さらに言えば、その窓は俺の部屋の窓。

ちよつと話をしたりするのに使えてなかなか便利だ。

「ほれ、雨莉。そろそろ起きんかね」

大事そうに抱きしめている目覚まし時計を引っこ抜き、軽く頭に一撃。

チーン、といい音がした。

「ふゆっ!?!」

素っ頓狂な声を上げた雨莉の目が糸から皿になって再起動。

頭を押さえて、青みを帯びた黒瞳の端に涙を浮かべてきよろきよろ。

「あ、なー君」

ベッドの脇に立つ俺に気づくと、ほにゃ、とでも擬音をつけたくなるような笑顔を浮かべた。

「おはよー」

「おう、おはよう」

「ねえ、なー君。何だか頭が痛い気がするんだけど、何か知らない?」

「さあ？ 寝ぼけてどつかぶつけたんだろ」

さりげなく目覚ましをベッドに戻し、とぼける。

「それよか、さっさと準備しろよ。朝飯食う時間がなくなるぞ」

「ふえ？ もうそんな時間？ 時計時計……」

ベッドに転がっている目覚まし時計を拾い上げて、文字盤を見る。

「ふあっ！ もう大変な時間になってる！」

「そういうこと。下で待ってるから、早く準備しろよ」

「はい」

雨莉の部屋を出て、一階に向かう。

背中の方で、雨莉がどたばた言わせて準備をしているのが聞こえた。

………

「起こして来たんで、もうすぐ来ると思いますよ」

「ありがとう、夏彦君」

階段を下りてリビングに入ると、おばさんが雨莉の朝食を準備しているところだった。

皿の上に、サンドイッチが三つ。

ハムとレタス、目玉焼き、イチゴジャムだった。

「夏彦君、お茶でも飲む？」

「あ、戴きます」

「ええ、座って待っててね」

おばさんがリビングに併設されているキッチンに向かう。

俺がテーブルについて待っていると、麦茶をいれたグラスを持って戻ってきた。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

グラスを受け取って口に運ぶ。

うん、麦茶の冷たさが気持ち良い。

「すっかり夏の気候ね」

「今日から七月ですから」

「そう言えば、天気予報で、最高気温34度って言ってたわねえ」

「うわ、まじですか……」

おばさんと世間話をしていると、二階から一階に下りてくる足音が聞こえる。

足音は一度リビングの前を通り過ぎて洗面所に入り、しばらくして戻ってきた。

「お、来たか」

「おはよう、雨莉」

「お母さん、おはようございますっ」

現われた雨莉は制服姿で、頭にはカチューシャみたいに頭にのせた長い白リボン。

スカートの裾まであるリボンの先端には、菱形の中心を抜いて縁だけの形にしたような銀色の飾りがついている。

雨莉は慌しく席に座り、通学鞆をテーブルの上に放り出すなり、サンドイッチに手を伸ばした。

「あらまあ、大急ぎね」

「一はつて、はやふたへないほひかないんはほん《だって、早く食べないと時間ないんだもん》」

「いやいや、何言ってるのかわからないから。」

「喋るか食べるかどっちかにしろよ」

「ん……はくはくはくはく」

食べるのか……。

それにしても、雨莉の鞆、随分と軽い音がしたような……。

「なあ、雨莉。ちゃんと時間割したか？」

「んく。うん、昨日の夜にちゃんとしたよ？」

「そうか。多分それは机の上に詰まれてたやつだと思うけど、鞆に入れたのかと聞いている」

さつきちらつと見たときに、今日の一限のリーダーの教科書があったからな。

「えー、ちゃんとしたよー」

「ほう、なら、その鞆の中を見せてもらおうか」

「うん、いいよ」

雨莉は、自信満々に鞆を開き、

「ふゆっ！？ 空っぽだった！」

「ほれ見ろ」

「ふええええええー、どうしようー」

空の鞆とサンドイッチを見比べておろおろする雨莉。

取りに行けよと言いたいところだけど、こいつはちょっと抜けてるというか、何とも要領の悪い奴だからなあ。

取りに行かせたら学園まで全力ダッシュコースになりかねん。

「仕方ないなあ。俺が取ってきてやるよ」

「ぶう、仕方ないもん」

雨莉が不満そうに頬を膨らませて文句を言う。

「で、雨莉さんや、文句を言いつつ差し出すその鞆はなんなのかね」

「ええっと——てへ？」

「笑って誤魔化すんじゃない」

そう言いつつ、空の鞆を受け取る。

断じて悪戯っぽく舌を出した雨莉の笑顔が可愛かったからではない。

こいつの面倒を見るのはいつものことだ。

「ありがと、なー君」

「本当にごめんなさいね。ボケボケな娘で」

恐縮するおばさんに手を振りながら席を立つ。

「いえ、気にしないでください。雨莉の面倒は俺が見ますから」

俺がそう言うと、雨莉がくす、と笑う。

「だって、なー君はわたしのことが好きだもんね」

いつもの笑顔で雨莉が言った言葉に、一瞬心臓が跳ねる。

が、あっけらかんと笑う雨莉の顔を見ると、それはすぐに呆れの感情に取って変わられた。

こいつは今時珍しく、素直すぎるくらいに素直な奴だから、あっさりこんなことを言うんだ。

臆面も無く自分の感情を表に出せる幼い日が終わって、二人で一緒に通学するのも恥ずかしい時期になっても、こいつは変わらずにこんなことを言っていた。

おかげで、こいつと付き合ってるんじゃないかとか、妙な噂を立てられたりもするが、こういう雨莉らしさは失ってもらいたくないとも思う。

だから俺も、何気なく言葉を返す。

「ばーか。お前のボケっぷりは俺以外の奴の手に余るんだよ」

「あ、酷い。わたし、そんなにボケツとしてないのに」

「そういう台詞は、空っぱの鞆で登校しなくなったら言ってくれ」

「もう、なー君！」

背後から聞こえる文句を聞き流して、俺は雨莉の部屋へと向かう。

もう随分長く、俺たちはこういう関係だ。

.....

鞆の中身を取りに行ったあと、リビングには戻らずに玄関先で雨莉を待つ。

まだ朝なのに、夏の日差しが燦燦と照っている。

「あっつ……」

朝からこれが……やってられないな。

ガチャ。

憂鬱な気分で太陽を見上げていると、扉が開き、雨莉が飛び出してくる。

「なー君、お待たせっ」

「おう、行くか」

雨莉に向かって鞆をひょいと投げてやる。

「わ、とど。うん、行こっ」

危なっかしく胸元で受け止めた鞆を手に提げて、雨莉が隣に並ぶ。

ふと、雨莉の顔を見ると、口元に赤いジャムがついていた。

子供か、こいつは。

「雨莉、口にジャムついてるぞ」

「え、ほんと？」

雨莉が手で口元を触る。

が、中々探し当てられていない。

「そっちじゃなくて、この辺だって」

自分の顔を指差して教えてやる。

「えーと、ここ？」

雨莉は俺が教えてやった場所に手をやるが、

「ってやっぱりないー。なー君、騙したなあ！」

「騙してないって」

「じゃあ何でないんだよー」

それは左右が逆だからだ。

「まったく、仕方ないな」

指を伸ばして雨莉の顔についていたジャムを掬い取る。

「仕方ないもん——はむ」

雨莉は、不満そうに呟きながら俺の手を取り、ジャムのついた指を口にくわえた。

暖かい口内に含まれた指先を、雨莉の舌が掠める。

「ちゅ。えへ、甘い」

雨莉は、さっきまで文句を言っていたくせにもう笑っている。

「安上がりな奴め」

「んっ?」

スカートのポケットから取り出したハンカチで指を拭いながら、不思議そうに首を傾げる。

「安上がりって何が?」

「お前だお前。ジャム一口で機嫌が直るんだからな」

「だって、甘いんだもん。」

甘いものを食べると幸せな気分になるんだよ」

それはわからなくもないけど、そこまでのものか？

「つまり、ジャムービンとかだと、かなり幸せなわけだな？」

「うん、そうだよ」

「じゃ、今年の誕生日プレゼントはジャムにするか」

七夕——つまり七月七日は雨莉の誕生日だ。

毎年プレゼントを贈っているんだが、今年はまだ用意していない。

何にするかまだ決まっていななんだよな。

「え、くれるのっ！？ やったー」

「喜んでいらしゃる！？」

からかうつもりで言ったのに、めっちゃ笑顔だし！

思わず驚くと、雨莉も目をぱちくり。

「なー君が驚くの！？」

「いや、冗談のつもりだったんだけど」

「ふえ、じゃあ、くれないの……？」

一転、悲しそうな顔になる。

確かに、からかおうとした俺が悪いんだが、それにしても、なぜ？

「お前、そんなにジャムが好きだったか？」

「え？ どうして？」

「だって、ジャムが欲しいんだろ？」

俺がそう言つと、雨莉は一瞬きょんとして、そして笑い始めた。

「あはは、違うよー。わたしは、ジャムじゃなくても、なー君がくれるなら何でも嬉しいんだよ」

「あ——」

こいつめ、また恥ずかしいことを……。

でも、そういうことが。

ジャムがもらえないからじゃなくて、プレゼントがないと思ってがっかりしてたのか。

「心配するなよ。プレゼントはちゃんとやるから」

「ほんとう？」

「おう、本当だとも」

「くれるんだあ。えへへ、なー君、ありがとっ」

「それはプレゼント受け取るときまで取っとけよ。
ところで雨莉さん、俺たちにこんなにゆっくり喋っている時間はあるのかね？」

「時間？」

雨莉が携帯を取り出して時間を確認する。

「ふわっ、大変！ ちょっと走らないと間に合わないよ！」

「やっぱりか。急ぐぞ、雨莉」

「うんっ」

俺たちは、学校へと向かって走り出した。

通学路を数分走り、時間に余裕ができたところで徒歩に切り替える。

それから、十分ほど歩くと、白い壁の建物が見えてくる。

私立緋扇学園。

俺たちの通っている学園だ。

歴史はかなり浅く、創立からまだ十年しか経っていない。

俺たちは、その九期生にあたる。

二十年前、この世界は大きく変わった。

それが、大国家統合だ。

あらゆる国の国境が廃絶され、統一国際連合国家ユニオンが誕生。

従来の国は、州となり、各州政府の上位に超越決定機関レゾリューションオーガナイゼーションが置かれることになった。

当然、そのときにはあれこれと揉めたらしいけど、俺が物心ついた頃にはもうそういう世界になっていた。

そして、その原因となったのは、慣性制御装置——いわゆるミドウドライブの完成だ。

御堂博士率いるプロジェクトグループが作り出したこの装置は、正確には慣性ではなく、運動の法則を自在に制御する。

速度とエネルギーに関する研究の副産物として偶然できたらしいが、ただの学生に詳しいことは全然わからない。

とにかく、大雑把に言えば、物体を好きな方向に好きな力で運動させられるようになったわけだ。

もっとも、兵器転用された場合の危険性を考えて、一般にはまる

で普及していないんだが。

それが使われている最も有名なものが、地上から宇宙へと伸びる柱——軌道エレベーターだ。

一部の軌道エレベーターは、高度五万キロ以上という位置に到達するが、多くは静止軌道を終点としている。

つまり、全長およそ三万六千メートルということだ。

今や、軌道エレベーターは一昔前の空港と同程度の気楽さで作られ、さらに、軌道エレベーターの途中に作られたステーション同士を繋ぐ軌道列車^{オビタルトレイン}によって網目状に結ばれている。

軌道列車の路線は、空中のステーションから空中を走るヘブンスラインと海中ステーションから海中を抜けるマリンラインが存在し、最も早い路線は時速にして約一万キロで走る。

時速一万キロと言ってもピンと来ないかもしれないが、ようするに地球を一周しても約四時間しかかからない速さだ。

もつとも、高度一万キロの位置を走っているせいで移動円周が長くなり、実際に軌道列車で一周すると十時間ほどかかるのだが。^{ヘブンスライン}

マリンラインの方は路線の確保が難しいのもあり、海中観光や橋に替わる短距離移動手段としての役割が多い。

長距離移動手段として機能するのは、環太平洋路線や太平洋横断路、大西洋横断路くらいだろう。

これら路線の開発が可能になったことで地球はかなり小さくなり、統一国際連合国という発想が生まれた。

軌道列車による、人や物の輸送をスムーズにするというのがユニオン発祥の大きな理由の一つ。

実際に完成する前に、その恩恵を見込んで世界の国境を失くそうとしたのだから、とんでもない話だ。

その辺の計画はミドウドライブあつてのもので、当時の日本国は、中国や韓国の発展によって過去のものになろうとしていた技術大国の名前を取り戻した。

超越決定機関の常任理事州にも数えられ、日本州の世界的地位はかなり高まっている。

とまあ、そんなマクロな話はともかく、その恩恵は身近なところにもある。

この辺りの地方には、緋染め扇という伝統工芸品があるのだが、ある緋染め扇の工場経営者が、信じられないほどの借金をして、ステーションに緋染め扇の店を出店した。

すると、これが外州人に大うけ。

多額の借金をわずか二年で返済し、州内有数の大富豪になった。

そして、その儲けた金によって作られたのが、緋扇学園というわけだ。

それにしても、何で扇屋が学校を作ったんだろうか……。

「なあ、何でだと思う？」

「何だい？ 藪から棒に」

教室に入り、椅子に座りながら呟くと、前の席に座っていた灰色の髪の男子生徒が、椅子をぐるっと回して振り返った。

こいつは木原智之。きはらともゆき

この学園に進学して知り合った友人だ。

シルバーフレームの眼鏡が似合う外見を裏切らずに成績優秀で、雑学や蘊蓄も豊富に持っている。

「うちの理事長って扇屋だろ？ 何で学校なんて作ったんだろうと思っただ」

俺が聞くと、智之は軽く頷き、眼鏡を押し上げた。

「それはあれだよ、理事長は本当は教師になりたかったのさ。でも、家業を継がなければならぬから、それを断念せざるを得なかったんだ。

だから、その代わりに学園を作ったんだよ。つまり、代償行動というやつだね」

「なるほどね」

代償行動ってのは、実現できない目的を別のものに置き換えるこ

とで満足しようとするのだったな。

先生にならない代わりに、学園の経営者になったってことか。

「さすが智之。よく知ってるな」

「入学式で話してただろう。聞いていなかったのか？」

「あんなもん真面目に聞くやつがいたのか……」

「年長者の言葉にはいくつも教訓が隠れているものさ。夏彦も少しは耳を傾けてみたまえ」

「善処するよ」

「やれやれ……」

俺の返事からやる気の無さを読み取った智之が肩を竦める。

そこに、リボンでポニーテールに束ねた赤毛を揺らして、一人の女子生徒が近づいてきた。

生命力に溢れた緑色の瞳が澁刺と輝いている。

「みんな、おっはよー」

「やあ、霧島さん。おはよう」

「おう、尾羽、おはようさん」

こいつもまた、外見を裏切らない活発な挨拶に、挨拶を返す。

きりしまおはね
霧島尾羽、クラスメイトだ。

雨莉を通じて知り合った友人で、家は近くないけど、小学校からずっと同じ学校に通っている。

「羽ちゃん、おはよー」
はね

隣の席から雨莉が会話に入ってくる。

「今日は遅かったじゃん」

尾羽が壁にかかっている時計を見上げる。

ホームルームまで残り三分もない。

間に合いはしたけど、ギリギリだったな。

「出掛けにちょっとゴタゴタしてな」

「ふーん、そなの。ま、間に合ってるからいいけど」

「ごめんね、羽ちゃん」

「いいよ、謝まなくても。特に用があったわけでもないし」

ガラッ。

尾羽の言葉の途中で教室の引き戸が開き、スーツ姿の女性が入っ

てくる。

栗色の髪をショートカットにした若い教師。

うちのクラスの担任、河野先生だ。

教師になってまだ二年目で、担当する教科は古典。

親しみやすいという理由で、生徒からはおおむね高評価を受けている。

河野先生は教卓の後ろに立って、小脇に抱えていた出席簿を置いた。

「はい、みなさん席に着いてください。もうチャイムが鳴りますよ」

先生の言葉を聞いて、教室のあちこちで立ち話をしていた生徒たちが席に戻りはじめる。

「おおっと、あたしも戻らないと。そんじゃ、また後で」

四人の中で、一人だけ離れている席に尾羽が歩いていく。

チャイムが鳴れば、一日の始まりだ。

一限の準備でもするか。

午前中の授業が終わり、昼休みになった。

「雨莉、お昼―」

言わずもがななことを言いながら、尾羽がやってくる。

「うん、お昼だね」

「学食に行くかい？」

「そうだな。二人はどうする？」

教科書を片付けて、智之が立ち上がる。

学園で昼食を食べる方法は三つ。

弁当なんかを持ってくるか、学食で食べるか、購買で買うかだ。

「あたし学食―」

「えっと、わたしは――」

「あんたはどうせ夏彦と一緒にでしょ。ほんと、仲がいいんだから」

「そうかな？ えへへ」

「からかいがないのいやっ……」

嬉しそうに笑う雨莉を見て、尾羽がつまらなそうに呟く。

「夏彦と琴織さんはもうセットなのが自然だからね」

「そうだった。雨莉だけじゃなくて、こっちもこっちなんだっけ」

尾羽がにやにやと笑って俺を見る。

何か邪推されてる気がするな。

「勘違いすんなよ。目を離すと危なっかしいからだ。そんなことより、さっさと学食行こうぜ」

「はいはい。そんじゃ、行きましょ」

.....

.....

.....

俺たちは学食へとやってきた。

教室のある校舎とは別の棟で、体育館ほどではないけど結構広い。

テーブル＋椅子六脚のセットが、並んでいる。

「お、新商品はっけーん」

「あ、ほんとだ」

尾羽と雨莉が食券の販売機のそばに立っているのぼりに目をつけて声を上げた。

「冷やし中華始めました、か」

夏の風物詩みたいなメニューだな。

「そう言えば、去年も七月からやっていた気がするね」

「しかも、夏休み明けにはもうないんだよな」

「てことは、二十日くらいしか食べられないんだね」

「息の短いメニューだね」

「確かに。六月くらいからやってもいいよな」

「でも、それを僕らが言ってもしかたないだろう」

そんな話をしながら、券売機の列に並ぶ。

「雨莉ー、何食べる？」

「んう？ えーと、ざるうどんにしようかな。羽ちゃんは？」

「どうしよっかな。日替わり定食Aセットのつもりだったけど、冷やし中華もありかも」

「そっだな。せっかくだから食べてみるのもいいかもな」

「限定的なものに惹かれるのは人の性なのかもしれないね」

順番が回ってきて、前に立っていた尾羽と智之が食券を買う。

「みんな冷やし中華なの？ わたしもそうしようかなあ」

「日本人的な発想だな」

「ダメ？」

「ダメとは言わんが……尾羽、ちょっと待て」

食券を買って離れようとしていた尾羽を引き止める。

「なによ」

「お前、何買った？」

「A定だけど」

尾羽が見せた食券には、日替わり定食Aセットの文字。

「僕はラーメンにしたよ」

「ふえ！？ 冷やし中華じゃなかったのー！？」

「ありかもしれないと言ったけど、買うとは一言も言っていないし」

驚く雨莉に、尾羽がしれっと言い返す。

「やっぱりか」

「そう言うということは、やはり夏彦は覚えているんだね」

「まあな」

「なー君、何のこと？」

雨莉が不思議そうに首を捻る。

こいつは覚えてないみたいだ。

「お前は綺麗に忘れてるみたいだけど、去年もあつたんだよ、こいつは。」

で、俺たちは揃って冷やし中華を食べたわけ」

「あ……」

話の途中で雨莉が短く声を漏らし、苦い顔になる。

「思い出したか？」

「うん……すつごく不味かったよね」

「そういうことだ」

「でも、もしかしたら美味しくなってるかもしれないよ？」

「それはないと思うけど……」

「どっちでもいいから、さっさと買ってよ。こっちは待ちくたびれてるんですけどー」

引き止めたままの尾羽が口を挟む。

「わ、ちよつと待って。えーと……」

券売機にお金を入れて、タッチパネルの上で指を彷徨わせる。

まだ迷ってるのか……。

「あー、もうまどろっこしい！ さっさと決めるー！」

「う、うんっ——あ」

吼えた尾羽に雨莉が肩を竦め、その瞬間に雨莉の手元でピ、と音がする。

驚いた拍子にボタンに触れてしまったようだ。

「ああー！ー！」

雨莉が何とも悲痛な声を上げるが、券売機は無情に食券を吐き出す。

がつくりしている雨莉に代わって、それを取る。

「……焦熱カレー」

よりによって、なぜこれ。

通称、罰ゲームカレー。

俺は食べたことがないけど、その辛さの恐ろしさは話に聞いている。

毎年、その辛さを甘く見た新入生を焦熱地獄へ叩き堕とす恐怖のメニューだ。

ちなみに、焦熱地獄というのは、八大地獄の六番目だって話を智之から聞いた覚えがある。

「うう……辛いダメなのに……」

「そーいやそうだったな」

「なーくん……」

雨莉が弱弱しい声で俺を呼ぶ。

もう泣きそうだった。

俺は、そんな雨莉の肩に優しく手を乗せて、

「頑張れ」

「裏切られたあ!？」

「尾羽ー、どつか適当に席取っといてくれ。雨莉のは俺が持つていくから」

「はいよー。そんじゃ木原、これよろしく」

食券を智之に預け、尾羽が雨莉を引っ張っていく。

雨莉はじたばたしながら後ろ向きに引きずられていった。

「それじゃ、取りに行こうか」

「待てよ。まだ俺が食券買ってない」

お金を入れて、点灯したタッチパネルのメニューをざっと眺める。

さて、どうするか。食堂に来るまではカツ丼を食べるつもりだったけど……。

「はぁ……仕方ないなあ」

俺は、溜息を吐いて、タッチパネルの画面に触れた。

……

「それじゃあ、頑張るんだよ。きっといいことあるからね」

「はぁ、どうも……」

食堂のおばちゃんが物凄い気の毒そうな顔で灼熱カレーを渡してくれた。

まあ、渡されたこれを見たら、その気持ちもよくわかる。

トレイの上の焦熱カレーは、何と云うか、黒い。

辛い料理って、普通は赤いような気がするんだけど、なぜかどす黒い。

しかも、凄い匂いだ……。

手に持つてるだけなのに、かなり鼻を刺激する。

「これは……想像以上だな……」

「見た目で破壊力が窺えるね……。僕はここまで攻撃的な料理を見たのは初めてだよ」

「そもそも攻撃的な料理って時点で滅多にねーよ……」

智之が引きつった笑みを浮かべているが、多分俺も同じ表情を浮かべているだろう。

突込みにも力が入らなかった。

「ま、取り合えず持つて行くか」

「そうだね」

両手に一つずつトレイを持って、雨莉たちが待っているテーブルに向かう。

雨莉は、激辛カレーの恐怖から逃げるようにテーブルに突っ伏し

ていて、前に座った尾羽が呆れ顔でそれを眺めていた。

「あ、やっと来た」

「悪い。待たせた」

「ひゃあっ」

雨莉の背中に声をかけると、雨莉が飛び起きる。

「全然待つてな——ひっ」

振り向いた雨莉が、焦熱カレーを目にして硬直する。

「む、無理無理無理！ そんなのお口に入らないよお！」

ぶんぶん首を振りながら叫ぶ。

食べるのが嫌とか食べられないを通り越して、口に運ぶことすら不可能らしい。

こいつの拒絶っぷりもある意味凄いな。

俺は、嫌がる雨莉を無視して、テーブルの上にトレイを置いて椅子に座る。

「だから無理だって……あれ？」

目の前に置かれたざるうどんを見て、雨莉が目を瞬く。

「カレーがうどんになった？」

「そんなわけがあるか」

当然、焦熱カレーは俺の目の前だ。

「ま、口に入れないんじゃ、食べられないからな」

「なー君……」

「やっぱり。こうなるんじゃないかと思ってたけど」

「夏彦だからねえ」

外野が色々言っているが、俺の耳には入らない。

俺の意識は、目の前の怪物カレーに持っていかれている。

「……いただきます」

「うう、なー君……ありがとうっ！」

「うわっ」

スプーンを持ったところで、感極まった雨莉が飛びついてきた。

椅子から転げ落ちそうになり、慌ててテーブルの縁をつかむ。

「わ、ごめんっ」

「いいから、早くどけ」

「うんっ」

雨莉が自分の椅子に戻り、俺も椅子に座りなおす。

「ごめんね、なー君。それと、ありがとう」

「気にするな。それより、問題はこいつだ」

改めて、カレーに向かう。

見れば見るほど辛そうだが……

「食べられないことはないだろうっ」

カレーを掬い、口に放り込む！

「っ！……！！」

「おお、ほんとに食べたよ」

「ど、どんな味なのかな」

「どうだい？ やっぱり、見た目ほど辛いのかな」

三人の視線が集まっているのを感じるが……。

「……よくわからん」

「はあ？」

正直な感想を言うと、尾羽が怪訝そうな声を出した。

でも、実際よくわからないんだから、仕方ないだろう。

「何と言つか、口の中を衝撃が駆け抜けていったような感じがした記憶がな……っ」

辛さが……辛さが今になって来た！

これは、辛い！ 何か他に例えるものもないから、辛いとしか言えない——っ。

「げほ、ごぼっ、ごめ、訂正。すっごい辛い！」

「あー、うん。見てりゃわかるわ」

「そうだねえ……確かに辛そうだ」

「なー君、大丈夫？ 大丈夫？」

「見ての通り辛いわ！ ってか、辛い！」

「からい、と、つらい。同じ字ね」

「この辛しんという字は、鋭い刃物の形から来ているんだ。つまり、象形文字だね。

刃物で刺すという意味があって、そこから刺すような痛みを示すんだよ」

「要するに、辛いも辛いも似たようなものってこと？」

「そうなるかな」

こいつら、他人事だと思って暢気なこと言いやがって。

心配してくれるのは雨莉だけかよ。

「おま、ごほ、ごほっ」

くそう、文句を言おうとしても咳しか出ない……。

俺は、智之の蘊蓄を聞きながら、一人、カレーの辛さにもだえるのだった。

夜――。

宿題は終わらせだし、見たいテレビもない。

暇を持て余した俺は、部屋で漫画を読んでいた。

「この漫画はどこへ向かってるんだろうか……」

最初は巨大ロボットのパイロットに選ばれた青年が敵国の兵器と戦いを繰り広げるストーリーだったのが、最近は何故かラブコメに

方向転換してしまっている。

最近ロボットすら出てこないなーと思っていたら、擬人化して萌えキャラになって再登場してきた。

まあ、その突拍子のなさのせいで続きが気になる作品ではあるんだけど……。

トントン。

「ん？」

窓が叩かれる音。

二階にあるこの部屋の窓を叩けるのは一人しかない。雨莉だ。

俺は、椅子から立ち上がると、部屋の窓に近づき、カーテンと窓を開いた。

予想通り、雨莉の部屋の窓が開いていて、窓枠に腕をついた雨莉がひらひらと手を振っている。

「こんばんは、なー君」

「おう、どうしたんだ？」

「あのね、お母さんが美味しいお菓子を買ってきてくれたから、お裾分け」

雨莉が、座っていたベッドに置いていた皿を持って窓越しに差し

出してくる。

皿の上には、小さめのシュークリームが並んでいて、プラスチックのピックが刺さっている。

「メイプルっていうケーキ屋さんって知ってる？」

「あー、尾羽ん家の近くにある？」

「そうそう。あそこの新商品なんだって。どーぞ」

「へえ。それじゃ、遠慮なく」

少し身を乗り出してピックを摘まみ、口に放り込む。

噛むとシュー生地がさくりと砕けて、想像していなかった冷たさが口に広がった。

「うわ冷たっ。アイスか！」

「そうだよ。暑いから気持ちいいよね」

自分も一つ食べて雨莉がにこにここと笑う。

それを見ていると、アイスだと教えてくれなかったことに文句を言おうとしていた気分もどこかに行ってしまった。

「もう一個貰うぞ」

「いいよー」

シューアイスを突き刺して、口に運ぶ。

さつきは驚いたが、確かにわかって食べるとアイスの冷たさが心地良い。

「確かに、冷たくて美味しいな」

「でしょ？ もいっこどーぞー」

「おー、貰おう」

雨莉に勧められるまま、二人でシューアイスをつつく。

「あ、そう言えば」

「ん？」

アイスの数が少なくなった頃、雨莉がふと思い出したように口を開いた。

「もうすぐ修学旅行だね」

「そう言えばそうだな。もう一週間後か」

緋扇学園の二年生——つまり俺たちは、七月六日から二泊三日の修学旅行に行くことになっている。

目的地は、京都柱継ステーション。州内では専ら水宮境すいぐうきょうと呼ばれる巨大な人工島だ。

京都府と福井県にまたがる若狭湾に浮かぶこの島には関西を代表する軌道エレベーター施設で、交通の要所となっている。

ここからならすぐ近く、車で一時間もかからない。

島の敷地のほとんどはリゾート地として作られていて、宿泊施設からショッピングモール、遊園地まで存在する。

修学旅行初日は、移動と水宮境内での自由行動。

二日目は、空と海に別れ、集団で施設見学。

三日目は終日自由行動の後で帰還というスケジュールだ。

「楽しみだねー。あ、そうだ。準備しないと」

「いや、それはまだ気が早いだろ」

まだ一週間近く先の話だ。

準備なんて前日にやっただって十分間に合う。

「そんなことないよ。余裕を持って準備しないと忘れ物とかするんだから。ちゃんとしないとダメだゾ」

ピンと伸ばした人差し指で小突かれた。

「まったく、そんなに子供じゃないんだけどな。」

「わかったよ、準備すればいいんだろ。それじゃ、早速始めるとしますかね」

「あ、待って待って」

窓から乗り出していた体を戻そうとすると、雨莉に引き止められる。

「最後の一個だよ。はい、あーん」

「んむ、さんきゅ」

「じゃあわたしも準備するね。おやすみー」

最後のアイスを俺の口に突っ込んで、雨莉が窓から引っ込む。

「おう、また明日な」

最後に手を振り合って、俺は窓を閉めた。

「仕方ない。準備するか……」

やると言ってしまった以上、何もしないのは気持ちが悪い。

俺は、修学旅行に持っていくための鞆を探し始めた。

> NEXT
DAY

七月二日

STAR FESTIVAL

<七月二日（火）>

朝。いつものように、雨莉を起こしに琴織家にやって来た。

「雨莉、朝だぞー。起きてるかー」

呼びかけながら、部屋の扉を叩く。

しばらく待ってみても、返事は無かった。

「やっぱり起きてないか。入るぞ」

中に入ると、案の定、雨莉は寝ていた。

制服姿でベッドの上にひっくり返っている。

「今日は着替えるところまでは行ったんだな……」

片足だけ靴下を履いているところから見て、その辺りで眠気に負けたらしい。

寝方が悪かったのか、スカートや制服の裾がめくれて、太股やお腹が丸見えになっている。

「ちょっと無防備すぎやしないかね、雨莉さん……」

俺じゃない妙な男が侵入してきたらどうするつもりなんだ。

「ま、入ってくるわけないんだがな」

馬鹿なことを考えてないで、さっさと起こそう。

取り合えず、いつものようにカーテンを開く。

「……んん」

顔に光が当たるのが嫌だったのか、雨莉がむずがるように動く。

その拍子にさらに裾がめくれあがって、胸の下半分くらいまで見えてしまった。

……薄いピンクか……じゃなくて！

「雨莉っ！ おつきろおおおおっ！」

近くにあった掛け布団を掴んで雨莉の上にかぶせ、そのまま勢いよく揺さぶる！

「わわわわっ！ 地震っ！？」

布団の下で慌てた声がして、雨莉が飛び起きる。

「おう、起きたか」

「あ、あれ？ なー君？」

雨莉はきょとした顔で首を傾げたが、揺らしていたのが俺だと気づくと頬を膨らませた。

「もう、今日のなー君は乱暴だよ」

「そりゃお前が悪いんだ」

「えー、どうして？」

「あー、それはほら、起きないからに決まってるだろうが」

あんな無防備な格好をしているから、とは言えず、適当に誤魔化しておく。

「ほれ、さっさと準備しろ。下で待ってるからな」

「むう、はい」

少し不満そうな雨莉の返事を聞いて、俺は雨莉の部屋を出た。

「うーん、今日も暑くなりそうだねー」

通学路を歩きながら、空を見上げた雨莉が言う。

「そうだな。というか、もう既に暑い」

「でも、昼からはもっと暑くなるよ?」

「わかってるけどさ、朝から気が滅入ること言わないでくれよ」

「わ、ごめん」

「許さん。罰として何か楽しい話題を振ること」

「ふえ!? ええと、楽しい話題……話題……うー」

頭を抱えて悩む雨莉。

百面相している雨莉を見ると、ちょっと楽しかったりする。

「夏彦」

「ん?」

横から声をかけられて振り向くと、智之がいた。

いつの間にか、智之の使う通学路との合流点まで来ていたみたいだ。

待ち合わせたりしてはいないけど、今日みたいに偶然会うことはある。

ちなみに、尾羽の家は全然方向が違うから、会つのは学校に着いてからだ。

「おす、智之」

「ああ、おはよう。琴織さんも」

「うーん、楽しい話、楽しい話……」

智之が雨莉に挨拶したが、雨莉には聞こえていないみたいだ。

どれだけ悩んでいるんだ、こいつは。

「彼女、どうしたんだい？」

「いや、ちょっとな。放つといたらそのうち気づくだろ」

「そうかい？ まあ、君が言うならそうなんだろうね」

雨莉は気づいていないが、三人になって通学路を歩く。

智之と雑談しながらしばらく歩いていると、雨莉が急に手を打ち合わせた。

「思いついた！ なー君——ってあれ？ 智之君？」

「やっと気づいたのかよ」

「はは、おはよう、琴織さん。朝から随分と悩んでいたようだね」

「う、うん、おはよう智之君」

気づいていなかったのが恥ずかしかったのか、少し赤くなって挨拶を返す雨莉。

「うー、もう、なー君のせいだあ」

「俺のせいなのか……まあいいけど。で、何を思いついたんだ？」

「うん？ 何の話だい？」

「雨莉が面白い話をしてくれるらしい」

「へえ、そうなのかい？ それは楽しみだね」

「ふえ！？ 違うよ！？ 面白い話と楽しい話題って別物だよね！？」

「ほら、智之も期待してるぞ」

「何でハードル上げるのー！？」

ポカポカと肩の辺りを叩かれてしまった。

全然痛くはないんだけど。

「冗談だよ。だからさっさと楽しい話題を披露してくれ」

「うう、なー君の意地悪……。あのね」

雨莉は、恨みがましい視線を俺に向けながら、話を始めた。

「楽しい話題と言えば、修学旅行！」

「修学旅行ね」

まあ確かに楽しい話題だけど、

「昨日の夜も話しただろ」

「そう、だからだよ」

「はあ？」

「なー君、ちゃんと準備した？」

「そう持っていきたかったのか……」

「二人で分かり合ってないで、僕にも説明してもらえるかい？」

「お、悪い。昨日の夜雨莉と話してたら修学旅行の準備しとけって言われて。気が早いと思うだろ？」

「そうだねえ。直前になって慌てるよりはいいかもしれないよ」

「あれ、そっち派？」

「ほらほらあ」

得意げな顔になる雨莉。

いや待て、まだ勝ち誇るには早いぞ。

「じゃあ智之、お前はいつ準備するんだ？」

「え？ そつだね。僕なら三日前くらいに準備するだろうけど」

「ほら見る。一週間前は早すぎるじゃないか」

「でも、直前もダメって言ったもん」

「実は俺、三日前くらいに準備するつもりだったんだ」

「えー、嘘だよ」

「いやいや、ほんとだって」

「うそ」

「ほんとだ」

「まあまあ、夏彦がいつ準備するつもりだったとしてもいいじゃないか」

雨莉と益もない言い争いになりかけたところに、智之が割って入って来た。

「どうせ、昨日の間に準備してしまったんだろう？」

「まあ、そうだけど」

修学旅行のしおりはもう貰っていたから、昨日の夜にできる準備は全て終えてしまった。

「なー君、準備したの？」

「してたらなんだよ……」

結局言われたままに準備したことが気恥ずかしくて、ぶっきらぼうな返事をしてしまったが、雨莉は気にした様子もなくにっこりと笑った。

「それならいいんだよ。ちゃんとできてるね」

「う……まあな」

雨莉がよく口にするフレーズで褒められる。

何となく、子ども扱いされてるみたいで恥ずかしい。

「そういうお前は準備したのかよ」

「うん、したよ」

「そうか。でも、どうせ何か抜けてるんだろうな」

「あ、酷いなあ。忘れてないよ」

「どうだか」

時間割しても、空の鞆を平気で持つていこうとするやつだからな。
イマイチ信用ならない。

「俺が確認してやろうか？」

「え、ええ！？　だ、だめだよ！」

何気なく言った言葉だったのだが、凄く驚かれた。

慌てたように首を振られる。

「何だよ？　別に見られたらいけないものが入ってるわけでもないだろ」

雨莉は微妙に抜けてはいるが真面目な奴だ。

宿題をしたノートを持ってくるのを忘れることはあっても、宿題をすること自体は忘れないというか、そんなタイプだ。

こいつが準備したのなら、余分なものや、ましてや校則違反になるような物はいれないはずだ。

と思ったのだが、

「は、入ってるよ……」

「え、マジで！？」

恥ずかしそうに上目遣いで白状した言葉が意外で、思わず大きな声を上げてしまった。

雨莉は、恥ずかしそうに頬を赤らめ、ほとんど聞き取れないような小さな声で続ける。

「その……ぱんつ、とか……」

「うあ……」

変な声が出た。

そうだよな。二泊三日なんだから、当然下着も入ってるよな。

「……………」

「えーとだな……」

気まずい沈黙。

助けを求めて智之に視線を送るが、智之は聞こえなかったのか聞こえないふりをしたのか、何食わぬ顔で足を進めている。

孤立無援。自力でどうにかするしかないのか。

「穿いてないパンツなんて、ただの布切れじゃないか」

何か言わないと、と思って出てきたのはこんな言葉だった。

自分で言っておいてなんだが、何言ってるんだ、俺。

雨莉はじろりと俺を睨み、

「なー君のお、ばかあっ」

ですよー！

チャイムが鳴って、ホームルームが始まる。

「みなさん、おはようございます」

「おはようございまーす」

教壇に立った河野先生の挨拶に、教室から挨拶が返る。

河野先生は出欠の確認をした後、幾つかの連絡事項を伝えた。

「それから、修学旅行についての連絡です。

二日目の行き先の希望を出してない人と、変更したい人は今日中に先生のところまで言いに来てくださいね」

「なー君、なー君」

隣の席から雨莉がこっそり話しかけてきた。

「わたしたち、空でいいんだよね？」

「おう。いいよな？」

前の智之に話を向けると、智之が視線を寄越して頷く。

遠いから確認できないが、尾羽も変えるとは言わないだろう。

俺たち四人は、二日目の集団見学で中軌道ステーションに行くことを決めていた。

ちなみに、行き先は、宇宙開発機構という組織の運営している博物館だ。

マリンラインの方は海中に作られた研究施設に行くことになっている。

どちらにしても、社会見学ってやつだ。

見学した後の宿泊先もラインによって異なるため、俺たちのように仲の良いもの同士が固まっていることが多かった。

「それでは、ホームルームを終わります。今日も一日、頑張りましょうね」

河野先生がそう言ったとき、ちょうどよくチャイムが鳴る。

先生は足早に教室を出て行き、代わりに一時限目の教師が入ってきた。

昼休み。

今日は尾羽が弁当を持ってきていたから、俺たちは教室で昼食を食べることにした。

別に学食で弁当を食べてはいけなんなんて決まりはないけど、あまりやっている人はいないからだ。

智之が自分の机の前後をひっくり返して俺の机とくっつけ、そこに雨莉と尾羽が椅子だけ持ってくる。

尾羽が弁当を広げて、俺たちは購買で買ってきたパンを机の上に置いた。

「それじゃー、いただきます」

「いただきます」

何となく雨莉の声に唱和して、俺は手元のカレーパンの包みを開いた。

智之はサンドイッチ、雨莉はクリームパンを選んでいる。

「そっぴゃあ、あたしらが修学旅行で行くころ、水宮境で七夕祭りってイベントやってるみたいなんだけど」

と、卵焼きを齧っていた尾羽が口火を切る。

また修学旅行の話題か……。

朝のホームルームでも話題が出たからか、教室のあちこちからも修学旅行について話しているのが聞こえる。

まあ、仕方ないか。俺だって楽しみだしな。

「でも、どんなイベントかわかんないんだよね。智之、あんた何か知らない？」

「いや、さすがにそんなことまではわからないよ」

首を横に振る智之。

そうだろうな。ステーションのイベントの内容なんてのは、雑学とは方向性が違う。

「えー、智之つてば使えないー」

「あ、わたし、知ってるかも」

口を尖らせて文句を言う尾羽の前で、雨莉がぽんと手を打った。

「マジで？」

「うん。なー君も知ってるよね？」

「え、俺も？」

そんなものについて調べたことはないんだけど。

悩んでいると、雨莉が不審そうに俺の顔を覗き込んできた。

「もしかして、忘れてる？ 昔一緒に行ったのに」

「昔……？ ああ！」

記憶を辿ると、薄っすらと覚えがある。

雨莉の言う通り、俺は水宮境の七夕祭りに行ったことがあった。

俺と雨莉の両親も一緒に見に行ったはずだ。

「そう言えば、行ったなあ」

「あー、やっぱり忘れてたんだ」

「だってお前、あれ何年前だと思ってるんだよ」

「えーと、小学校のときだったから……十年くらい？」

「普通忘れるだろ、そんな昔のこと」

「そうかなあ。わたしは結構覚えてるよ？」

「そんなの、覚えてない夏彦の頭が悪いんでしょ。それよか雨莉、どんな祭りが教えてよ」

「僕は十年も前と今が同じイベントかどうかが気になるね」

「変わらないんじゃないかな。お祭りって言っても、色んな出店が出てただけで、そんなに特別なことはなかったと思うよ」

「なるほどね。それなら今も昔と変わらないことをしている可能性はあるね」

「えー、何それつまんない。もっと何かしろっての」

「ええと、わたしに言われても……」

雨莉が話しているのを聞いているうちに、少しは思い出した。

確かに、出店が色々出ていたのを巡った気がする。

お小遣いを貰って、雨莉と二人で遊んだんだよなあ。

たこ焼きとか綿菓子食べたり――

「あー!」

「どうしたんだい？ 夏彦」

「あ、いや、なんでもない」

本当はなんでもなくないんだが、雨莉の前では言えないから誤魔化した。

今の話で思いついたけど、今年の誕生日プレゼントはリボンの飾りにしよう。

雨莉のトレードマークでもある長いリボン。

その両端についている琴座の飾りは、七夕祭りのときに俺が買ってあげたものだ。

毎日のように見ているものだから、流石にそれはよく覚えている。

元はキーホルダーのようなものだった気がするけど、多分おばさんがりボンにつけたんだろう。

前のを外すのはなんとなく寂しいから、別のところにつけられるものがあるか。

とは言え、ちょうどいいものがステーションで手に入るかはわからないから、先に買っておいた方がいいかもしれないな。

「なー君、どうしたのかな？」

「何か考え込んでいるようだね」

「これは、後で聞きださないかね」

プレゼントについて考えるのに没頭していた俺は、三人が訝しげな視線で見ているのにしばらく気づかず、後で無駄に追及される羽目になってしまった。

秘密は守れたけど……疲れた。

「雨莉、準備できたー？」

「あ、ちよつと待って」

放課後になった途端、尾羽が雨莉に声をかけた。

雨莉は急いで荷物をまとめて、席を立つ。

「お待たせ、羽ちゃん」

「そんじゃ、行こつか」

「二人でどこか行くのか？」

「うん、メイプルに行くんだよ」

昨日雨莉がくれたお菓子を買った店だな。

「なー君も一緒に行く？」

「いや、遠慮しとく」

甘いものは嫌いじゃないけど、わざわざ遠回りして買いに行くほどでもない。

俺が断ると、雨莉は残念そうにしゅんとなった。

「そつかあ。じゃあ、一緒に帰れないね」

「家に帰ったら会えるだろ」

「うん。それもそうだね」

一言であっさり納得して笑顔になる。

切り替えの早い奴だ。

「それじゃあなー君、お土産買って帰るからね。智之君、バイバイ」

「うん、また明日」

智之に手を振って、雨莉と尾羽は教室を出て行った。

二人の姿が消えた後、智之が鞆を手に立ち上がる。

「僕らも帰るかい？」

「そうするか」

教科書やノートを片付け、智之と一緒に教室を出た。

.....

歩道を歩く俺たちのそばを、一台の車が通過していった。

俺たちが通学路に使ってる道は中央線もない小さな道だから、通る車の数はそんなに多くない。

けど、尾羽の家の方は国道沿いだから結構車が通るんだよな。

雨莉のやつ、大丈夫かなあ？

しっかりしているくせに抜けているあいつのことだ、何か想像もつかないボケをかましそうで怖い。

いつだったか、対向車線の信号が青なのを見て横断歩道を渡って行こうとしたことがある。

あのときは、俺が引つ張り戻したから事なきを得たんだが。

あー、もう！ あいつが目の届かないところにいると、気になってしょうがない。

やっぱり着いていけばよかったか……

「夏彦。夏彦！」

「うおっ！？」

いきなり智之に大声で呼びかけられた。

「何だよ。大きな声出して」

「何って、さっきから呼んでいるのに、君が気がつかなかったんじゃないか」

「マジで？」

呼ばれてたのか。全然気づいてなかった。

「そりゃ悪かったな」

「いや、構わないけれどね。琴織さんのことを考えていたんだろう？」

「なぜわかる？」

口調だけ聞けば疑問系だが、そのニュアンスは質問と言うよりも確認のそれだった。

帰り道で考えることなんていくらでもあるのに、ピンポイントで当てられるとある意味不気味だ。

「ああ、僕も琴織さんのことを考えていたからね」

「え？」

思いもかけない言葉に、俺はまじまじと智之の顔を見返してしまっ

「お前が、雨莉のことを？ 何で？」

雨莉のお世話役を自負している俺が気にするならともかく、何で智之が？

「君と二人で帰る、と言うよりも、君と琴織さんが一緒じゃないのは珍しいからね。不自然さを感じるほどだ。だからだよ」

「ああ、そういうことか」

確かに、雨莉と一緒に帰らないのは珍しいな。

たいていは一緒にいるわけだし。

でも、俺も雨莉も放課後に用があるわけでもないし、家が隣なんだからそれは当たり前だろう。

「そういうことだとも。安心したかい？」

「安心も何も、今の話のどこに不安になる要素があっただよ……」

「そうかい？ 嫉妬でもしたんじゃないかと思ったんだけどね」

「はあ……お前までそういうことを言うのか。」

俺があいつのことを考えているとしたら、それはあいつの面倒を見るのが俺の仕事だからだよ」

思わず溜息。

雨莉との距離が近いから、この手の勘違いはもううんざりするほどされてきた。

智之は俺たちと親しいんだから、俺と雨莉が付き合ってるみたいな勘違いはしないと思ったんだがな。

そんな非難を込めてじろりとねめつけてやると、智之は苦笑いする。

「もう何度も聞いたよ。いや、君がこの手の詮索に辟易しているのは知ってるけれどね。」

でもね、僕から見てもそう見えるくらい、君たちは仲がいいんだよ」

「そりゃ、仲が良いのは事実だけどな。でも、そういうのとは違うよ」

俺と雨莉の関係は、よくからかわれるような男女のそれじゃない。

好きか嫌いかと言えば当然好きだけど、それは、幼い頃の単純な気持ちの延長線上にあるわけで、恋とか愛なんて名前のつく感情として感じたことはない。

「雨莉だって、そういう関係になることは嫌がってるしな。そんな風には見られてないよ」

「随分とはつきり断言するんだね。もしかして——」

「もしかして？」

「実は告白して玉砕したことでもあるのかい？」

「はっ」

俺が雨莉に告白して振られたって？

「それは本気で言ってるのかね？ 智之さんや」

「そうだねえ。まあ、半々フイフイフイフイつてところかな」

「半分本気だったのか……。違う違う、そうじゃなくて……」

あれ？

そうじゃなくて、何だ？

俺がこんな風に思う理由があったような気がするんだけど……

何だったっけ……？

「そうじゃなくて、何だい？」

「あー、何か理由があったと思うんだが、思い出せん」

「そうか……」

慰めるようにぼんぼんと肩を叩かれる。

「何だよ？」

「よほど忘れたい出来事だったんだね……」

「違うわっ！」

拳を作って振り上げる。

殴るフリをすると、智之は降参とばかりに両手を上げた。

「あつはははは。いやすまない、冗談だよ。許してくれ」

「ダメだ許さん。お前も罰ゲームだ。何か面白い話をする事」

「おっとこれは無茶振りが来た。そうだねえ、じゃあ、時期に合わせて天の川の話でもしようか」

朝は雨莉を散々悩ませた罰だったが、智之はそれほど悩みもしないで話題を決めたらしい。

そつが無いな……つまらんやつめ。

「夏彦、天の川の正体が何か知っているかい？」

「馬鹿にするなよ。星の集まりだろ」

智之ほど物知りじゃないけど、それくらいは知っている。

「それじゃ、どうしてそこだけ星が集まっているのかは知っている？」

天の川の部分に星が密集してる理由……そんなのがあるのか？

考えたこともなかったな……。

「いや、知らない」

「それはよかった。どうやらつまらない話にはならないようだね」

智之は眼鏡を押し上げ、こほん、と咳払いをしてから話を始める。

「天の川はね、僕たちの住んでいる太陽系を含む銀河——天の川銀河を中から見たものなんだよ。」

銀河というのは星の集まりだから、そこに星が密集しているように見えるんだ」

「ああ、なるほど」

空の一部分に星が集まってるわけじゃなくて、星が集まっているところを見ているのか。

まあ、一箇所にあるように見える星でも実際の距離は随分と違うんだろうけど。」

「ちなみに、太陽系は銀河の端のほうに位置しているから、外方向を見ている冬よりも銀河系の中心方向を見る夏の天の川の方が綺麗に見えるらしいよ」

「へええー」

俺は感嘆の声を上げるしかなかった。

さすが智之。雑学博士だ。

「罰ゲームはクリアできたでしょうか？」

「むむ、仕方ない。許してつかわす」

「は、ありがたき幸せ」

妙なノリでゑたところで、分かれ道。

「それじゃ、僕はここで」

「おう。また明日な」

「ああ、また」

智之と別れ、俺は一人、家路についた。

「はい、なー君。約束のお土産だよ」

部屋の窓を叩く音に窓を開くと、雨莉がにこにこ笑いながら小さなサイコロ形の箱を渡してきた。

箱は綺麗にラッピングされていて、包み紙はカナダの州旗に似た楓の葉っぱにMAPLEのロゴ。

旗と違うのは、楓の葉が緑色なところか。

尾羽と行ったメイプルで買ってきてくれたようだ。

「わざわざ買ってきたのか」

「うん。だって約束したもん」

「そうか、サンキュ」

手を伸ばして、箱を受け取る。

こういうことは何度もあったから、素直に受け取るのが一番喜ばれるのはわかっている。

代金なんかを払おうとすれば、雨莉の心遣いを無にすることになってしまう。

とは言え、ただ貰うだけだとこっちも申し訳ないからな。

「せっかくだ。一緒に食おうぜ」

「いいの？」

「もち。こういうのは一人で食べるよりも二人で食べる方が美味いからな。

ちよつと待ってろ、今開けるから」

店名の入ったシールを剥がして包装を解くと、中から立方体のプラスチックケースが出てくる。

ケースの底に木編みの籠が置いてあって、その上に焦げ茶色の菓子載っている。

スーパーやコンビニに置いてある物とは違う、お洒落な感じだ。

「これは、チョコレートか？」

「そうだよ。名づけて、クリスタルショコラ！ わたしがつけたわけじゃないんだけどね」

「何だか必殺技みたいだな……」

やたらとかつこいい名前のチョコレートは、細い八面体の形で、表面にココアパウダーが塗してある。

たぶん、この形がクリスタルなんだろうな。

蓋を開けて一つ摘まんでみると、意外に硬質の感触が指に伝わった。

「ほれ、雨莉」

「じゃあ、貰うね」

箱を持った手を伸ばして、雨莉にチョコレートを取らせる。

「んじゃ、いただきますか」

「うん」

チョコレートを口に入れて、舌の上を転がす。

砂糖の混ざっていないココアパウダーの少し苦い味。

その後で、ほのかな甘みがする。

でもこれ、チョコの甘さじゃないような……

「んー？」

舌が感じる硬い感触も、チョコレートらしくない。

軽く噛んでみると、パキ、と音を立てて何かが砕けた。

これは……飴か？

そして、その中からクリーム状のチョコレートが出てくる。

洋酒の香り。ブランデーか何かが入ってるみたいだ。

チョコを飲み込み、箱からもう一つ取り出す。

この固い感触、やっぱり飴だな。

「チョコを飴で包んでたのか。不思議な感じだけど、美味しいな」

「うん。ちょっとびっくりするけど、美味しいねー」

カリリ、と飴を砕きながら、台詞通りのびっくり顔で雨莉。

「何だその反応。店で食べたんじゃないのか？」

「ううん。お店で食べたのはホットケーキ。

イトインで注文したら、その場で焼いてくれるんだよ」

「ほう、そんなサービスがあったのか」

「うん。それでね、ホットケーキにかけるシロップがすごく美味しかったんだよ」

そんな風に語りながら、雨莉の視線は俺の持っている箱にちらちら。

「ほら、食べるよ」

「えへへ、ありがと」

照れ笑いした雨莉がチョコレートを摘まむ。

「ま、メイプルって言うくらいだから、特製のシロップなのかも、なつと」

持っていたチョコを親指で弾き上げ、落ちてきたところを口でキヤツチする。

上を向いていた視線を窓の向こうに戻すと、俺の真似をして、雨莉がチョコを飛ばしていた。

「あつ」

力加減をミスったらしく、チョコは雨莉の頭上を飛び越えてしまふ。

雨莉は背中を反らしてその軌跡を追いかけて、後ろを向きすぎてベッドに倒れた。

転がってうつ伏せになり、飛んでいったチョコを探している。

「わー！ ベッドにチョコがあー!？」

「おいおい、大丈夫かあー？」

「うん、粉だから何とかー」

雨莉の姿が視界から消え、しばらくごそそと音がした後戻ってくる。

「取れたか？」

「うーん、一応？」

「そら災難だったな」

「ほんとだよー。なー君、もう一回!」

「まだやるのか……」

雨莉にチョコを渡してやる。

何気なくやっただけなのに、ゲームみたいになってしまった。

「なー君なー君。何かコツみたいなのないの？」

「コツう？ そうだな…… コツじゃないけど、指で飛ばすのは難易度が高い気がする。」

手の平に載せて投げるとかの方が簡単だと思うぞ？」

「手の平……」

雨莉は、チョコを手の平で転がす。

「そうそう。そのままひょいっと」

「ひょいって言われても……なー君、お手本見せてよー」

「ええ？」

「お願いっ。一回でいいから！」

拝まんばかりの勢いで頼まれる。

まあ、手にチョコを乗せてるから拝めないんだが。

「やれやれ、仕方ないな」

「あ、また言う。仕方ないもん」

「ほう？ 雨莉さんや、今回は完全にお前のわがままだと思っんだが、それでも仕方ないのかね？」

いつもは何だかんだ言っても、俺が自分から引き受けに行ってるから、仕方ないと言われるのもまあわかるが、今回はそうではないはずだ。

「う……仕方なくはない、こともなく、ない、かも？」

「どっちだよ！ ったく、一回だけだぞ」

「わーい。ありがと、なー君」

無邪気に笑う雨莉。まったく、仕方のないヤツだ。

「じゃ、やるぞ」

手の平にチョコを置いて構えると、雨莉の熱心な視線を感じる。

腕を上げながら、手首を使って角度を調整しながら投げる！

山なりに飛んだチョコは、狙い通りに俺の口の中に入った。

「これでいいだろ。次は雨莉だ」

「う、うん」

雨莉は、手を構え、腕を二、三回上下させて感覚を確かめてから、チョコを宙に放った。

投げられたチョコは放物線を描いて雨莉の上に落下し、

「あいたっ」

雨莉の額にコツンと当たった。

顔の上を転がって落っこちたところを、危うく雨莉がキャッチする。

「うー、失敗したあ。パクっ」

悔しそうに呻いて、結局普通に食べてしまう。

その顔には、ココアパウダーで一本の線が描かれてしまっていた。

「雨莉、顔にココアで模様できてるぞ」

「ふゆっ！ どどここ！？」

慌てて顔をぺたぺた触る。

チヨコを転がしていた手でやるものだから、なおさらチヨコ化粧が派手になっていく。

「くくっ。鏡見て来い、鏡」

「うう、そうするー」

笑いを噛み殺しながら言っていると、雨莉はベッドの上からいなくなる。

そしてその後、

「ふわあああ！？ 何これえー！？」

なんて悲痛な叫びが聞こえてくるのだった。

.....

しばらくして、顔を洗ってココアパウダーを落とした雨莉が戻っ

てくる。

「うう、お待たせ」

「おう、お帰り。お前にあの技は向いてなかったみたいだな」

「もうやらないもーんだ」

頬を膨らませてそっぽを向く。子供か。

とか思っていると、こっちに向き直ったにはもう笑っていた。

「そうそう、これ忘れてたんだよ」

雨莉の手でひらひらと振られてるのは、カラフルな色使いの……
チラシ？

「何だそれ？」

「メイプルに置いてあったから貰ってきたんだよ」

「へえ。で、結局何のチラシなんだ？」

「あ、そうだった。はい」

窓越しに紙を受け取る。

視線の角度を合わせると、立体紙に印刷された^{3Dペーパー}星空が浮かび上が
って見える。

星空の下——見え方としては手前側——には色取り取りの短冊が吊るされた笹。

一番目立つ部分に、ポップな字体で「水宮境 七夕祭り」と書いてある。

「七夕祭りの広告か。確かにここは近場だから、宣伝くらいするよな」

ステーションなんだから、全世界規模で人が訪れるわけだけど、宣伝をした方が客入りがいいに決まってる。

そもそも、欧米圏の人たちに七夕って習慣があるかどうかかわからないしな。

世界的に日本語ブームで、ローマ字の日本語が山のように英和辞書に乗ってる時代だけど、TANABATAなんてのはなかった気がする。

TANABOTAなら載ってるんだけどな……。

そんなしょうもないことを考えながら、ひっくり返して裏面を見る。

裏は普通の紙で、開催期間やアクセス。イベント内容が書いてあった。

「開催期間は七月一日から七日か」

もうやってるんだな。

やってる場所は、水宮境、低軌道ステーションと中軌道ステーション、それに海中ステーション。

ちなみに、低軌道ステーションはだいたい高度四百キロほどの場所にあつて、小規模な観光施設になっている。

「ちよつと宇宙行こう」みたいなノリで行く人が多く、ヘブンズラインの州内線の発着点でもある。

中軌道ステーションは、高度一万キロという高さにある空中島で州間ヘブンズラインの発着駅。

京都柱継^{すいへんぎつ}ステーションは、相模灘にある東京柱継ステーションと並ぶバブ駅で、かなりの数の路線と接続している。

外州から来る人が最も多い場所であり、そういう人をターゲットにした土産物屋や宿泊施設が多い。

うちの理事長が扇屋を出したのも、このステーションだ。

終点である静止軌道ステーションは、下二つのステーションとは違い、宇宙開発や研究に関わる施設が多いのが特徴だ。

環境を地上と同じように整えている他のステーションと違い、微重力状態にある施設も多い。

海中ステーションは文字通り海中の施設で、規模としては一番小さい。

水中展望室などの海ならではの施設のほか、二本のマリンラインが出ていて、海洋研究所と釜山の柱継ステーションに接続されている。

閑話休題。

内容をざっと見た感じだと、昼休みに話したようなので大体正しいみたいだ。

普段は水宮境に入っていない出店が出店したり、セールが行われていたり。

見世物系のイベントはないみたいだな。

唯一イベントっぽいのは、ステーション内にある笹に願い事を書いた短冊を吊るすサービスくらいだ。

「七夕だから笹に願い事とは、ベタだなあ」

「それがいいんだよ。喜ばれるから、今もやってるんだと思うな」

「今も？」

「そうだよ？ 一緒に行ったときにわたしたちも書いたよね」

「えーと、そうだった？」

言われてみるとそんなことがあったような気もするけど、昼休みに言われるまで行ったことも忘れてたくらいだ。

どうも定かではない。

「もしかして、忘れてる？」

雨莉がジト目で見つめてくる。

う、何だか妙な罪悪感が……

でも、覚えてないものは覚えてないんだよ。

「はつきりとは覚えてないな」

「じゃあ、何をお願いしたのかも忘れちゃったの？」

「すまん……」

「そっか………なーんて」

俺が謝ると、雨莉は一瞬がっかりしたような顔を見せたが、すぐに表情を切り替えて笑顔になる。

「なー君、本当は覚えてるんでしょ？ でも、まだ言えないだけだよね」

「え………？」

何でもお見通しなんだゾ、なんて言いたげな、お姉さんぶった雨莉の言葉。

いや、まじで覚えてないんだけど……

まだ言えないって、どういうことだ？

十年も前のお願いが、今の時点でまだなんて、時系列がおかしい
だろ。

俺は忘れてるけど、雨莉は雨莉で何か覚え違いしてるんじゃない
のか？

そう片付けるのが自然だと思うけど、でも、何か引つかる。

「わたしはもう、わたしの心配事はなくなっただけだと思っただけだな」

雨莉が何か言っていたが、疑問がぐるぐると渦巻いている俺の頭
には、ちっとも入って来なかった。

>NEXT DAY

七月三日

STAR FESTIVAL

<七月三日(水)>

夢を見ている。

夢だとわかる夢。確か、こついう夢は明晰夢って言らしい。

十年以上昔の光景。

うちの近所にある公園で、幼い日の俺と雨莉が遊んでいる。

今の俺の意識はあるのに、子供の俺の体を動かすことはできなくて、主観で客観的に自分を見ているという何とも奇妙な気分だ。

「それ、よつと!」

子供の俺が、公園にある砂の山に登って行く。

「あーちゃん」

「うんー、今行くねー」

砂山の上で呼ぶ俺に応えて手を振るのは、あーちゃん——幼い雨莉だ。

このころはまだ、リボンに飾りがついていない。

「早く早くー！」

「はいはい、そんなにいそがせないでよー」

急かす俺を窘めながら、雨莉が砂山を登り始める。

俺たちは同じ年なのに、その様子はやんちゃな子供とすっかりもののお姉さんという感じに見える。

これは、夢だからと勝手に作ったイメージなんかじゃなくて、この頃の俺たちの関係そのものだ。

当時の雨莉は、お姉さん振って何かと俺の世話を焼いていて、俺もそれに甘えていた。

「あっ」

強い風が吹き、昔の俺の頭から帽子を吹き飛ばす。

幼い俺は、慌てて砂山を飛び降りて帽子を追いかけた。

けれど、空を舞った帽子は、公園の端の柵と、隣接していた家の生垣を越えて、知らない家の庭に入ってしまった。

「あ……おれのぼっし……」

泣き出しそうに、顔をくしゃりと歪める。

今の俺からすれば、そのくらいのことです、って気分だけど、子供心には大変な事件だったんだろう。

しかも、あの帽子は当時流行ってた特撮ヒーローが作中で被ってたやつで、親に散々ねだって買ってもらったんだった。

「なー君、ぼうしは？」

少し遅れて雨莉が到着する。

俺は、無言で隣の家を指差した。

「入っちゃったの？」

「……うん」

「そっか。うーん……」

俺が頷くと、雨莉はきよろきよると周りを見回し、

「あ、なー君。あそこから入れるよ！」

生垣の切れ目を指差してそう言った。

切れ目は小さくて、大人は通れそうにないけど、子供なら通ることができそうだった。

そこを潜って庭に入って、帽子を取ってくればいい。

それだけなのに、なぜか小さい俺はそこで尻込みしてしまった。

いやまあ、理由はわかっている。

子供の性格は、大まかに分けると、物怖じしないか、警戒心こわがが強い
かの両極端だ。

その後者に属していた俺としては、他所の家なんていうのは魔王
の城みたいなものだったんだ。

「あーちゃん……」

情けない声で名前を呼ばれた雨莉は、苦笑気味に微笑み、

「もう――」

そこで目が覚めた。

「……懐かしい夢だったな」

あの頃の雨莉と俺。今の俺たちの関係からすれば、立場がまるで
逆だ。

けど、これは別に雨莉が頼りなくなっただけだしなくなっただけ
かそういうわけじゃないんだよな。

あの頃の雨莉も、今と同じでどこか抜けていた。

今日見た夢の続きでも、雨莉は俺の帽子を取りに行ってくれたけど、
その家の生垣にリボンを引っ掛けて抜けれなくなってたし。

言いたくはないが、昔の俺があまりにも情けなかったってことだ
ろっ。

「うーん……黒歴史だ……」

雨莉に頼り切っていた昔の自分を思い出すと、かなり恥ずかしい。

「いやいや、気にすることないよな」

今は俺が成長して、もう立場が変わってるんだ。

俺がちゃんとしてるってことを、雨莉に見せ付けてやらないとな。

「よっし、雨莉でも起こしに行くか!」

俺は気合を入れて、支度を始めた。

「おはようございまーす。今、雨莉の部屋に来ていまーす」

俺は、こっそりと雨莉の部屋を訪れていた。

気分はたまにテレビとかでみるあれ、寝起きドッキリ。

声を潜め、抜き足差し足で雨莉の部屋に侵入する。

「さて、雨莉の様子は……………よく寝てるな」

雨莉は今日もお休み中だった。

今日は一度も起き出さずに、二度寝に移行してしまったらしく、枕に頭を乗せて普通に寝ている。

たたまれている掛け布団に起きようとした形跡があるな。

「さーて、どうやって起こしてやろうかね」

いつもならカーテンを開くところだが、今日は省略。

起こす気になっているのに、先に起きられては興ざめだ。

そんな俺の気も知らず、雨莉は気持ち良さそうに寝息を立てている。

こいつを問答無用で有無を言わせずに起こすには……………よし、あれで行くか。

俺は、いつもより少しばかり過激な手段を脳裏に描き、雨莉へと手を伸ばした。

途中で智之と合流し、三人で通学路を歩く。

「そういうわけで、今朝は頑張って起こしてみた」

「どういうわけかは全然わからないけど、あの恐ろしい起こし方にもなー君なりの理由があったことはわかったよ」

朝のことを思い出したのか、涙目の雨莉がぶるぶると震える。

うーん、ちょっと気合が入りすぎたか。

「随分と琴織さんを怖がらせたようだけど、一体どうやって起こしたんだい？」

「どうって、こう、首と膝の下に腕を通して持ち上げて」

「ふむ、お姫様抱っこをして？」

「落とす」

「あー……それは怖いね」

「目は一発で醒めるんだけどなあ」

ちなみに、雨莉は落ちてる途中で目を覚まして、パニックって床に

まで落ちた。

「うう、そのまま抱えておいて欲しかったよ……」

「それじゃお前、起きないだろうが」

「それでも、もうちょっとやり方があったと思うなあ」

「そうか……それじゃ、次は投げっぱなしジャーマンとかにするか」

「投げる方法じゃないよ!」

「何を言っているんだい、夏彦」

「そうだよ、智之君。なー君に言っておいて」

「そんなことしたら部屋のどこかが壊れるじゃないか」

「そうそう——って違うよ! まずわたしが壊れるよ!？」

「はは、冗談だって。今度は揺すったりして起こしてやるよ」

マジで泣きが入りそうになってきたから、そろそろからかうのはやめてやる。

それにしても、

「お前、よく投げっぱなしジャーマンとか知ってたな」

「あ、うん。テレビが何かで聞いたことあるよ。投げる技なんだよ

ね？」

「多分な。まあ、実は俺も詳しくは知らないんだが——智之？」

「ああ、ジャーマンスープレックスだね。プロレスの投げ技兼固め技だよ。

固めずに投げるのが、文字通り投げっぱなしと呼ばれる技。どうするのかと言うとね——」

こうして、俺たちは智之のプロレス技講座を聞きながら学園へと向かうのだった。

午前中の授業が終わり、昼休み。

学食で食事を終えた俺たち四人は、教室へ戻ってきた。

「えーと……」

自分の席に戻るなり、雨莉は鞆から次の授業の教科書を取り出し始める。

「何がり勉強ちゃんしてんの？ まだ二十分はあんのに」

「羽ちゃん、忘れちゃったの？ 次の授業テストだよ？」

「……………テスト？」

たっぷり間を空けて、尾羽が首を傾げる。

「うん、テスト。百人一首の」

次の授業は河野先生の古典の授業だ。

最近の授業で百人一首をやっていたが、解説が終わったからテストをすることになっている。

小テストみたいなもので、一回十首ずつ。

範囲の歌は全部出題されるから、覚えておけばどうにかなるテストだ。

「ひやくにんいつしゅ……あぁっ！ やっぱ、忘れてた！」

「やっぱり……。六割以下は罰プリントだけど、大丈夫？」

「全然大丈夫じゃないに決まってんでしょ！ サンキュ、雨莉！」

尾羽は慌しく自分の席に駆け戻り、教科書を引っ張り出した。

前の授業の最後にやった五首テストはペナルティー無しだったが、今度は本番。

罰プリントやらされたのが嫌だったと見える。

「あの様子だと、覚えていなかったようだね」

「みたいだな」

「暢気なこと言ってえ。なー君は大丈夫なの？」

「んー、まあ一応チラツとは見ておいたけど」

「もう、そんなにいい加減にしてちゃダメ。ちゃんとしないとダメだゾ」

お姉さん振った言い方をする雨莉。

こういう態度をされると、昔のことを思い出してどうも弱いんだよな……

「面倒だなあ」

「もう、なー君のために言ってるんだからね」

「はいはい、わかりましたよ」

俺も教科書を取り出して、開く。

雨莉は「うんうん」とか満足そうに頷くと、自分の勉強に戻っていった。

ま、俺も罰プリントなんてやりたくはないし、復習しとくか。

「確か、六個目からだったな」

「そうだよ。鵲の、から」

前の席で振り向いた智之が教科書も見ないで言う。

まあ、こいつなら百首全部覚えてても不思議じゃないんだが。

「かささぎ……えー……鵲の、渡せる橋におく霜の、白きを見れば夜がふけにけり」

「残念。夜ぞふけにける」

「げ、間違ってたか」

教科書で確認すると、智之の言う通り『夜ぞふけにける』だった。

惜しいな……。

「鵲の渡せる橋におく霜の、白きを見れば夜ぞふけにける、か」

「宮中の御階に白い霜が降りている、もう夜もだいぶ更けたことだなあ。意味としてはこんな感じだね」

「それはそう書いてるけど。でも、宮中の橋ってどこから出てきたんだ？」

「ああ、それはだね。鵲の橋というのは七夕の伝説に出てくる橋なんだけど、知ってるかい？」

「織姫と彦星を逢わせるために鳥が天の川に橋をかけるって話を聞いたことあるな」

天の川によって隔てられた織姫と牽牛は一年に一度、七夕の夜にだけ逢うことができる。

その夜には、鳥が翼を並べて橋を架けてくれるという、伝説。

「それだよ。その鳥が鵲なんだ。」

それでだね、宮中を天上に見立てて、その御殿の階段——つまり階^{はし}を同じ音にかけて橋になぞらえてるんだよ」

「みはし、って橋じゃなくて階段のことだったのか……」

「そうなるね。ついでに言うと、おく霜は空の星のことを霜に例えているんだ。」

そっちはある漢詩を元にしてね」

智之の説明は止まることを知らないかのように続く。

ほんとに事典みたいなやつだな。

「楓橋夜泊……『月落ち烏啼いて霜天に満つ』って聞いたことないかな」

「待て待て、それはテストに必要なものか？」

「いや、ないね」

「だったらストップだ。今は必要なことを覚えさせてくれ」

すっかり聞き入っていると試験範囲を覚える時間が無くなりそうだ。

俺が止めると、智之は大げさに肩を竦めた。

「意欲が足りないねえ。もっと深く多面的に物事を見られるようになりたまえよ」

「しかし智之さんや、時間が限られているんだから効率的に行った方が良いとは思わんかね？」

「おっと、これは見解の相違だね。これ以上効率を下げるのも悪いし、僕は黙っておくよ」

「悪いな。後で相手してやるから我慢してくれ」

「人を寂しんぼみたいに言わないでくれるかい」

そんなことを言いながら智之が前に向き直る。

さて、集中集中——。

.....

.....

.....

キンコンカンコン

今も昔も変わらないチャイムの音で、午後の授業が始まる。

「今日は前の時間に言ったように小テストをします。配られたら裏向きにして待っておいで下さいね」

河野先生が各列にテスト用紙を配り、前から順番に送られてくる。

「はい、夏彦」

「おう」

智之からプリントを受け取り、一枚とって後ろに回す。

「行き渡りましたね。足りない人はいませんか？」

河野先生が教室を見渡すが、声を上げる人はいない。

「それでは、時間は十分間です。始めてください」

河野先生の号令でテスト開始。

テスト用紙を裏返す。

前回の授業でやったテストとは問題数が違うだけで、形式は同じ。

一首につき二箇所ずつの空欄に適切な言葉を埋めるだけの簡単な物だ。

けれど、選択肢はないから勉強していないと答えられないだろう。

ある意味、勉強してきたかどうか非常にわかりやすいテストだ。

うん、わかるぞ。

昼休みの残り時間を勉強に費やした成果か、空欄を埋める言葉が頭に浮かぶ。

俺はシャーペンを手に取り、解答欄に文字を書き連ねていった。

.....

十分のテストが終わり、そのまま採点。

不正対策のために近くの席の人と交換し、教科書と照らし合わせて採点する。

俺は隣の雨莉と答案を交換していた。

「はい、なー君」

雨莉から採点を済ませた答案を受け取る。

赤ペンの丸が並んだテストの端っこに、20の文字。

ただ覚えるだけの小テストだけど、満点を取れたのは素直に嬉しい。

「完璧だね。ちゃんとできてるよ」

「どーも。そう言う雨莉は残念だけどな」

採点を終えたテストを雨莉に渡す。

結果は十二点。ぎりぎりペナルティーだ。

「勉強しなきゃって言ってたくせに、どうしたんだよ？」

「うう……範囲間違えたの。最初から十首覚えてて」

「……なるほど」

前の授業で五首のテストをしたから今回は六〜十五首目が範囲だったのに、一首目から十首覚えてたのか。

通りで最初の五問は完璧なのに後半がぼろぼろだったわけだ。

「一番後ろの席の人、テストを回収してください。十二点以下の人、罰プリントを取りに来てくださいね」

「はあ、行ってきます」

肩を落しながら、雨莉が教卓に歩いていく。

あ、尾羽に捕まった。

「ちょっと雨莉。何であんた落ちてんの？」

「範囲間違っちゃって……」

「何やってんだか。ちゃんと旦那に確認しなよ」

「なー君の勉強の邪魔になったらいけないと思ったんだもん……」

誰が旦那だ。

雨莉も当たり前みたいに応えてんじゃない。

そんなことを考えている間に、プリントを取った雨莉が戻ってくる。

手元を覗いて見ると、白紙に罫線が引かれているだけのプリントだった。

「罰プリントを持って行った人は、一首につき五回ずつ書いて私に提出してください。今日中に提出してくださいね」

そういう罰か。

十首×五回で全部で五十回。

シンプルだけど、面倒だな。合格してよかった。

「それでは、授業を始めます」

こうして悲喜こもごもの小テストは終わり、授業が始まった。

放課後。

俺は、罰プリントを書く雨莉に付き合っ、教室に残っていた。

最初は他にも何人かいた居残り学生も、一人減り二人減り。

今はもう二人きりになってしまっている。

「あー、疲れたあー」

シャーペンを投げ出して両手を天井に突き上げる。

適当にざーっと書いてしまえばいいのに、きちんと書いてるから時間がかかるんだよな。

「終わったか？」

「うん。ごめんね、待たせちゃって」

「俺が勝手に待ってたんだから気にすんなよ。さっさと出して帰ろ
うぜ」

「うん。それじゃあ、出してくるからもうちょっと待っていてくれる
？」

「俺も行くよ。一緒に職員室に行ってそのまま帰る方が早いだろ」

「あ、そっか」

頷いた雨莉が、筆箱や教科書を鞆に仕舞い始める。

俺も、鞆を手に取って席を立った。

.....

俺と雨莉は職員室に向かい、河野先生にプリントを提出した。

「いいですよ。次は引つかからないようにしてくださいね」

「はい。失礼しました」

「あ、ちょっと待ってください」

「はい？」

「申し訳ないんだけど、この箱を教室まで持って行ってもらえませんか？」

河野先生が、職員室の床に置いてある段ボール箱を指差す。

中身はわからないが、一抱えほどの大きさがあつて、結構重そうだ。

「これ、何が入ってるんですか？」

「水宮境のパンフレットです。当日に配るつもりだったんですけど、他の先生方はもう配ってるみたいなので。」

それを聞いて配って欲しいと言ってきた人がいたんです。先に予習をしておきたかったみたいです」

「それは、いるでしょうねえ」

水宮境は、軌道エレベーターの拠点であると同時に、敷地内に遊園地やら海水浴場まで抱える一大リゾート地だ。

その一つ一つの規模もかなりのものだし、どうやって回るか先に考えておきたい人もいるだろう。

「それで、運んでもらえますか？」

「はい、いいですよ」

「わかりました」

「ありがとうございます。明日のHRで配りますから、邪魔にならないところに置いておいてください」

「はい」

二人して引き受ける。

そもそも、教師からの頼まれごとを断れる人ってそんなにいないだろう。

「じゃあ俺が箱を持つから、雨莉は俺の鞆を持ってくれ」

「え、わたしも一緒に持つよ？」

「これくらいなら一人で大丈夫だ」

「でも、二人で持った方が軽いよ」

一人で持つか二人で持つか言い争うが、結局押し切られてしまった。

鞆をダンボールの上に積み、箱の横にしゃがむ。

「仕方ないなあ。じゃ、そっちを持ってくれ」

「ぶー、仕方ないもん」

膨れながら、雨莉がダンボールの反対側を持つ。

「持ち上げるぞ」

「いいよー。せーのっ」

雨莉の掛け声にあわせて、箱を持ち上げる。

……結構重いな。

「それじゃ、出ばーっ」

「あ、おい、後ろ！」

「きゃっ」

「おおっと」

歩き出すなり、雨莉が通路を歩いていた男性教師にぶつかる。

「す、すみません」

「気をつけるんだぞ」

雨莉が謝ると、先生はあっさりと歩き去っていった。

このままだと危なっかしいな。

「雨莉、方向変えるぞ。俺が後ろ向きに歩く」

「あ、わかったよ」

「俺も一応後ろ見るけど、ちゃんとナビしてくれよ」

「うんっ、任せて」

頼もしい返事を聞きながら、その場で百八十度回転。

後ろ歩きで職員室を出発した。

.....

ダンボールを抱えて廊下を歩く。

途中で何度か転びそうになったが、特に問題なく教室まで運ぶことができた。

放課後で人がいなくて助かったな。

後は、これを適当なところに置いておけばいいだろう。

と、そこで油断したのがまずかった。

普段は意識するまでもなく越えられる教室の引き戸のレール。

だが、荷物に視界を遮られていた雨莉が、その小さな出っ張りに
躓いてしまう。

「ふゃっ」

つんのめり、前に向かって倒れてくる雨莉。

「危ない！」

条件反射で体が動く。

邪魔な荷物を横に放り投げて、倒れてくる雨莉を正面から受け止
めようとする。

肩を掴んで支えるつもりだったが、荷物を捨てていたせいで動作
が遅れ、体半分横を向いている状態で受け止めることになった。

「おわあっ！」

「きゃあああっ！」

中途半端な姿勢では体重を支えきれず、俺たちは床に倒れこんだ。

.....

「ん.....んん」

モロに後頭部を打った……。

一瞬意識を失っていた気すらする。

って言うか、視界が真っ暗だ！

何か体も重いぞ！

口も上手く動かなくて、「いてー」と言っただつもりが変なうめき声になってたし！

もしかして、相当ヤバイ状態になってるんじゃない……。

いや待て落ち着け。とにかく現状を把握しよう。

まず、後頭部が痛い。

これは倒れたときにぶつけたからだろう。

次、体が重い。

けれど、あまり嫌な感じはしない。

なぜか安心する温かさと柔らかさを感じるせいかもしれない。

そして、最後、口が動かない。

喋れないだけじゃなくて、息も出来ない。

まるで何かに口をふさがれてるみたいだ。

仕方なく鼻で息をすると、心地よさを感じるようなよく知っている香りがした。

一体、何が起こっているんだ？

ようやく、視界が真っ暗なのは倒れたときから無意識に目を瞑ったままだったからだと気がついた俺は、ゆっくりと閉じた目を開いた。

「……んっ!？」

目を開けた途端、ドアップで雨莉の顔が目飛び込んでくる。

おそらく、俺たちが別の人間である以上、これ以上は近づきようのない距離の近さ。

俺たちは折り重なって倒れていたようで、雨莉の体が俺の上に載っていた。

雨莉の体は完全に密着していて、顔までくっついている。

驚いて発した声は、ぴったりと塞がれている唇のせいで、まともな言葉にならなかった……って待て！

これは、あれか？

もしかして、俺の唇を塞いでいたものの正体は、雨莉の唇で、つまりこれは、いわゆる一つの――

$$\begin{array}{c} \neg \\ h \\ h \\ \vdots \\ \neg \end{array}$$

その単語にたどり着いてパニックに陥る俺の目の前で、雨莉のまぶたが震える。

待ってくれ、まだ目を開けるな！

そんな俺の願いも虚しく、雨莉の目がゆっくりと開き、

これ以上ない至近距離で、ばっちり目が合った。

ぼんやりした瞳が、瞬きするたびにに少しづつはつきりしていく。

「ん……？　んんん！！？」
ふえええええええええ

えええ！！！」

状況を把握した雨莉が、真つ赤になって体を起こす。

俺も負けず劣らず真っ赤になっていることだろう。

「な、ななななな、なんでな！君がわたしと、そのき、ききききき、魚が喜ぶことを！？」

「鯖きすかよ！？　　ってうわあ口に出したら一緒だ！」

微妙にイントネーションが違っただけどさ！

「ふわ、わあああ、どうしよう!？ ごめんね!？ わたしファーストキスだよ! ごめんなさい!」

「初めて!? 俺もだけどこめんなさい!」

混乱のあまり、お互いにわけのわからないことを口走る。

体を起こしても、未だに馬乗り状態の雨莉がごめんなさいと頭を下げ、また近づく顔の距離。

「ち、近い近い!」

「わわわわわわわわわわわわわわわわあ~~~~~!!」

どう考えてもキスするような距離ではなかったが、過剰反応でばつと離れる。

雨莉は目をぐるぐる回していて、今にも倒れそうな勢いだった。

「お、おおおお落ち着こう! まずは落ち着こうぜ!」

「そ、そそそそうだね! 落ち着く、落ち着く、おちつけ~~~~~
!」

「全然落ち着いてない! ほらあれだ、こういつときは深呼吸しよう! まずは気道確保して——」

マウストウマウス
「人工呼吸!?!」

「まちがった!?!」

キスを意識しすぎだろう俺!

二人して散々騒ぎ、二人して息を切らせる。

「はあ、はあ、すーーーーはあああああ」

「すーーーー、はあーーーー」

あれ、深呼吸できてる。

……

深呼吸したおかげか、とりあえず落ちつくことに成功した俺たちは、とりあえず散らばってしまったパンフレットを集めた。

「なー君、こっちは終わったよ」

「おう、こっちもこれで最後だ」

拾ったパンフレットの束を教卓の上に積む。

「う……」

「はう……」

わざわざ別の方向を向いて拾っていた雨莉と顔を合わせた途端、かつと頬が熱くなる。

雨莉も、頬を染めて俯いてしまった。

「え、えーと……」

何か言わないと。

そう思っても、こんな状況で何を言えればいいんだ？

俺が悩んでいると、雨莉の方が先に口を開いた。

「い、今は、うん、今は無し！　今のキスは、間違いだから、ノーカウントだよ！」

「あ、ああ……」

ノーカンか……。

雨莉がそう言ってくれたことにほっとする反面、微妙に釈然としない気持ちもある。

確かに、望んだ結果ではないんだけど、間違いとか言われると何か寂しいような。

いや、何考えてるんだ。

女の子のファーストキスを奪ったのに、許してくれるんだぞ。

そんなこと考えてる余裕なんてないだろう。

「そうだな。あれは事故だし、忘れよう」

「うん……」

照れながら頷く雨莉。

忘れようって言って簡単に忘れられることでもないけど、そうでもしないとどうしようもない。

俺たちは、ぎくしゃくと帰り支度を整え、プリントを提出した後、家路についた。

.....

.....

.....

「ふうーーーーー.....」

何時間にも感じた帰り道も終わって家の前にたどり着き、思わず長い息を吐いた。

俺は今日ほど雨莉の家が隣にあることを恨んだことはないぞ。

いくらなかったことにしようとしても、あれだけインパクトのあったことを意識しないというのが無理な話だ。

帰り道で会話は全く無し。

それどころか、目も合わせられなかった。

それなのに家が隣だから帰り道は延々と一緒。

何の拷問だよ。

とりあえず、家に帰って頭を冷やそう……。

俺は自分の家に向かい、背中越しに雨莉に手を振った。

「じゃあな、雨莉」

「あ……待って、なー君」

「な、何だよ？」

呼び止められて振り返ると、雨莉は、もじもじと指を絡めながら、ちらちらと上目遣いに俺の様子を窺う。

「う、うん、よしっ。ん——」

思い切ったように小さな掛け声を上げると、顎を少し上げて目を閉じた。

「なあっ」

考えないようにしようとしていたさっきのキスが蘇り、一瞬で頭を埋め尽くす。

何なんだ！？ 誘われてるのか！？

「な、何してるんだ……？」

何とか言葉を搾り出すと、雨莉は片目だけ開き、

「お、お別れのキス……………なんちゃって」

「……………こ、こ、こ」

「……………鶏？」

「この状況でそんな冗談やってんじゃねえ—————!!」

「だ、だってだって、冗談にしたらさっきのも笑って流せるかもって思ったんだもん——っ」

「無理に決まってるだろうが！ この馬鹿—————!!」

「きやうん！ ごめんなさあああああい！」

首をすくめた雨莉が、玄関に駆け込んでいく。

まったく、あいつは……

「はあ……………」

俺は、重い足を引きずって家に帰るのだった。

「うん？」

風呂から上がって部屋でくつろいでいると、窓から音がする。

「雨莉か……？」

こんな遅くに、珍しいな。

窓に歩み寄り、カーテンを開く。

だが、その先には雨莉の姿はなかった。

「風が何かか……」

窓が揺れた音をノックと間違えたんだろう。

こういう勘違いは割とよくある。

「ま、あんなことがあったわけだし、来ないだろうとは思ってたけど――」

思わず一人ごち、すっかりあんなことを思い出してしまっ

うわぁー、頑張っと思って出さないようにしてたのに……！

まあ、そんなことを頑張っと思ってる時点で意識しまくりな
んだけどな！

「キス……か」

口付け。唇を重ねること。

この日本州では主に恋人同士の行為。

俺と雨莉は恋人じゃない。

でも、あのとき、感じた気持ちは――

「うがーーーーー!!」

俺は、頭をかきむしりながらベッドに飛び込んだ。

ダメだ。今日はもうどうしたって意識しまくるに決まってる。

もう寝よう。

明日になったら、頭も冷えて冷静になってるだろう。

俺は布団に潜り込んで電気を消す。

だが結局、それから中々眠ることはできないのだった。

> NEXT DAY

七月四日

STAR FESTIVAL

<七月四日(木)>

「……はぁー」

朝。琴織さんちの雨莉さんの部屋の前で深呼吸。

一晩も経つと流石に少し落ち着いた………と思いたい。

単なる事故を長々と引きずるのも馬鹿げた話だ。

いつも通りいつも通り、と。

「朝だぞー。起きてるかー」

ドアをノック。

………返事はない。

まあ期待してなかったけどな。

「入るからな」

一声かけて、部屋の中に入る。

「すー……すー……」

「やっぱり寝てるよ」

部屋の主はベッドの上で眠っていた。

体が窓の方を向いていて、胸元に何かを抱きかかえて丸くなっている。

「雨莉ー、起きろよー」

呼びかけながら、カーテンを開こうとしてベッドに膝をかける。

ギシ、とベッドが軋み、その拍子に雨莉がころりと転がった。

「——っ」

図らずも、雨莉の上にのしかかるような体勢になってしまった。

安らかな寝顔で、無防備に寝息を立てる雨莉。

その唇に、目がひきつけられる。

昨日、この唇にキスしたんだよな——

「って、何を考えてんだ！」

忘れることにしたんだろうが！

無理やり視線を引き剥がし、別のところに向ける。

「ん？　なんだ、これ？」

雨莉が大事そうに抱えて寝ていたのは、お菓子か何かが入っていきそうなスチール缶の箱だった。

箱の全面に、色とりどりの折り紙がべたべたと貼り付けてある。

バランスや色の取り合わせなんて皆無で、小さな子供の作品みたいだ。

何が入ってるんだろうか。

興味を覚えて手を伸ばす。

「……うん」

「うおっ」

ちょうど箱に触れたとき、雨莉が薄っすらと目を開いた。

俺は、慌てて雨莉の上から飛び退く。

箱に伸ばしていた手で、誤魔化すようにカーテンを引いた。

シャアッ。

高い青空が現われ、太陽の光が差し込んでくる。

「ふぁ——まぶし〜」

目を擦りながら雨莉が起き上がる。

その拍子に、膝の上から箱が転がり落ちた。

ガランガランと大きな音。

石でも入ってんのか？

「ふわわっ！」

慌てた仕草で箱を拾い上げる。

その動作で完全に目を覚ましたか、箱を抱えて俺を見上げた。

「あ、おはよう。なー君」

いつもと変わらない雨莉だった。

仮に逆の立場だったとしたら、俺はこんな風に普通の反応ができる自信がない。

自分の言った通り、ノーカウントなかつたこと^{ノーカウント}にして整理してしまったんだろ
うか。

「なー君？」

「お、おう、おはよ」

「うん、おはよう。なー君、今日はお寝ぼけさん？」

「ね、寝ぼけてたのはそっちの方じゃありませんかね！」

「そうかなあ？」

「そうなんだ。さっさと準備して降りて来いよ」

俺はそう言つと、逃げるように雨莉の部屋を出る。

……あ、あの箱が何か聞くの忘れた。

朝のホームルームの時間。

昨日の放課後に運ばされた、水宮境のパンフレットが配られた。

智之から回ってきたそれを一冊取って、残りを後ろに回す。

水宮境にある全ての施設を紹介しているパンフレットは、結構分厚くて重かった。

これがもつと薄っぺらで軽かったら、あんなことは起きなかったのに――

それを思い出して、思わず隣の席を窺うと、

「あ……」

「う……」

パンフレットを手に、こちらを窺っていた雨莉と目が合った。

やっぱり雨莉も、あのキスのことを思い出していたんだろうか。

どんなアクションを起こせば良いのかわからないまま、何となく見詰め合うような形になる。

ふつ、と、唐突に、

花が開くように唇を綻ばせて、雨莉が微笑った。

どこも気負ったところのない、いつもと変わらない笑顔だった。

なんとなく、ほっとした。

ああ、それでいいのか。

そんな気分で、俺も雨莉に笑みを返す。

けれど俺は、雨莉ほどは上手く笑えなかった。そんな気がした。

「いいかあ、このメフィストフェレスという悪魔はだな――」

授業中。

教師の話は微妙に脱線しているようだった。

緋扇うちの授業はそんなにレベルは高くないが、聞かなくてもわかるほど簡単ではない。

ちつとも授業には集中できていない今日は、関係ない話をしてくれると非常にありがたかった。

原因はわかりきっている。

横目で元凶あまりの方を盗み見る。

雨莉は、生真面目な顔で授業を聞いていた（余談なのに）。

ノートに板書を書き取ったシャーペンの先で下唇に触れる。

たかがそれだけのことで、こじつけのように関連付けそうになり、俺は視線を引き剥がした。

琴織雨莉。素直で少し天然な俺の幼馴染。

正直、雨莉は昨日のアクシデントをもっと引きずると思っていた。

顔を合わせたら照れまくって、それで、俺が「仕方ないな」って言うって。

そうやってる間に、日常に戻って行く。

だって、それがいつも通りだろ？

それなのに、雨莉は思った以上にいつも通りで。

いつも通りに乗れなかった俺ばかり意識している。

あれだけのインパクトがあつたのに、

どうして、雨莉は簡単に、いつも通りを取り戻せたんだろう。

もしかして、俺が思うほど、雨莉にとっては意識するほどのことでもなかったんだろうか。

「……なんだってんだよ」

俺は、自分自身にもよくわからない感情を、小さい呟きにして吐き出した。

昼休みだ。

「昼休みだ」

「昼休みだね」

「ご飯だっ！ お腹すいたぁー」

「羽ちゃん。自分の椅子くらい運ぼうよ」

いつもの面子が集まって来て、昼食になった。

今日は全員が購買で買ってきたものだ。

俺が惣菜パン。智之がおにぎり。尾羽が菓子パン。雨莉がサンドイッチ。

見事にばらけたものだ。

「それじゃあ、いただきます」

雨莉の挨拶で、めいめい食べ始める。

「あ、そうそう。これなんだけどさ」

「おうわっ」

尾羽が取り出したのは例のパンフレット。

あーびっくりした。不意打ちは止めてくれ。

「……なによ？」

「どしたの？」

尾羽と雨莉が不思議そうな顔をする。

……誰のせいだと思ってるんだ。

「何でもねーよ。で、それがどうしたよ」

「別にどうってほどの話でもないけどさあ、せっかく貰ったんだから予定立てようよ。予定」

「そうだね、何せあそこは広いから。総面積約百万平方メートル、一昔前風に言くと東京ドーム二十個分くらいの面積だよ」

「あー、ほんとだ。二・四×四キロメートルって書いてる」

「それは、確かに広いな」

三日目の自由行動の予定は決めたけど、一日目は特に決めてなかった。

軌道列車を使える三日目と違って、一日目は水宮境の中でしか移動できないからな。

でも、そんなに広いのなら、やっぱりきちんと決めた方がいいかもしれない。

「だから、どこに行くのかくらいは決めておいたほうが無難かもしれないね」

「そうだな。じゃあ、どこに行く?」

「そんなの決まってるでしょ！ 遊園地よ！」

尾羽が宣言して、パンフレットを開く。

既に折り目がつけられていたページは、水宮境パークの案内図だった。

水宮境の敷地の約三割を使う遊園地だ。

水宮境にある施設は、諸外州からの旅行者の評価を意識していて、どれも一級品。

その例に漏れず、水宮境パークも州内有数のテーマパークに数えられる。

予定を立てるとか言いながら、自分の主張を推しに來ただけじゃないのか、こいつは。

「わあゝ、楽しそうだね」

「ああ、いいんじゃないかい。遊園地なんて随分と久しぶりだよ」

「で、夏彦は？」

あつという間に二人が賛成。

窺うような視線が俺に向けられる。

これは反対できるような雰囲気じゃないな。まあ別に、全然嫌じゃないんだけど。

巨大ショッピングエリアで買い物につき合わされるよりはよっぽどいいだろう。

「俺もそれでいいぜ」

「そんじゃ、決定ね。いやー楽しみだわ」

「で、水宮境パークって何があるんだっけ？」

「ジェットコースター、ホラーハウス、コーヒーカップ、一通りの物は揃ってるね」

顔を突き合わせて、一冊のパンフレットをめくっていく。

「見て見てなー君。州内最大級の巨大観覧車だって」

「軌道エレベーターのそばで観覧車って言われてもなあ……」

どっちかと言えば、当然そっちの方が高いわけで。

「でも、天ノ橋立が見えるんだよ？」

「軌道エレベーターなら気比松原も見えるけどね」

「て言うか、日本地図が見えるっしょ」

「いっぱい見えればいいってもんじゃないんだよ、多分」

「チラリズムってやつね」

「絶対違うだろ……」

むしろなんだろう、詫び寂びの世界？

確かに、観覧車のゴンドラの狭さはどこか茶室に通じるものがないか。

「ま、何が見えるにしても、乗りたいなら乗ればいいじゃない」

「うん、そうする。楽しみだな」

観覧車に何をそんなに惹かれるのか、満面の笑みの雨莉。

その唇の端に、タマゴサンドの具がくっついている。

パンフ見ながら食べるからだ……。

「雨莉、口に卵ついてんぞ」

「あ、ほんとだ。お子ちゃまねえ」

「ええー、やだあ」

尾羽にからかわれた雨莉が手で口を擦る。

だが、綺麗にはならず、

「……さらにパン屑くっつけてどうすんだ」

「ふえーん、なー君取ってえ」

「う……」

雨莉が顔を突き出してきて、思わずたじろぐ。

いや、これはいい機会じゃないか。

こんなこと、よくあることなんだし、俺だっていつも通りにしないといけないんだから。

「まったく、仕方ないな」

「仕方なくないもーん」

「どの口が言ってたんだ。ほら動くなよ」

慎重に手を伸ばして、なるべく雨莉に触れないように卵を取る。

ちよつと柔らかい感触に触れた気がするけど、気のせいだ！ 気のせい！

「取れたぞ」

「ありがと、なー君」

お礼を言った雨莉が、自然に俺の手を取る。

「あ、ちょ——」

「ぱく——ん、ちゅる」

俺が止める間もなく、雨莉の口に指が銜えられる。

指に絡まる舌のざらついた感触が、やたら生々しく感じられた。

「のわっ」

椅子から立ち上がりながら後ろに身を引く。

蹴っ飛ばした椅子がひっくり返って、大きな音を立てた。

「なー君？」

何か変なことしたかなあ、という感じで不思議そうな顔をする雨莉。

わかってる。変なのは俺だ。

結局、いつも通りにすることはできなかった。

ほんとに、どうしちゃったんだろうなあ。

何でもないよと愛想笑いで手を振って、拾った椅子に座る俺を、尾羽がじっと見つめていた。

「ちょっと、夏彦」

「尾羽？」

午後の休み時間、トイレから出たところで廊下の壁にもたれていた尾羽に捕まった。

偶然出会ったわけではなく、そこで待ち構えていたらしい。

濡れた手をぶらぶらさせながら出てきた男子生徒がぎょっとした顔で制服のポケットからハンカチを取り出しているのが面白かった。

「何か用か？」

「まーね」

尾羽が壁から背中を離す。

俺たちは、並んで歩き始めた。

「で、何だよ」

「ん、何と云うかねー」

尾羽は「あー」とか「うー」とか唸った後、ぐちゃぐちゃっと髪をかき混ぜた。

「はつきり言わせてもらっけど——あんた、雨莉のこと好きでしょ」

「んなつ」

身構える暇もなかった。

尾羽の言葉が、短剣に似た鋭さで貫いてくる。

「な、何言ってるんだよ。そんなんじゃないって、前から言ってるだろ」

「とぼけんじゃないわよ」

一歩先に踏み出した尾羽が振り返る。

長い尻尾がくるりと円を描いた。

ぶつからないように立ち止まると、真剣な光を湛えた翡翠の瞳が、俺の瞳を覗き込んでくる。

何度か似たようなことを言われたときとはまるで違う。

そこには、俺のことをからかおうとする気持ちは一片も存在していなかった。

「あんなに意識しまくつといて誤魔化せるつもり？」

「……そんな風に見えたか？」

「見えたから言ってるんでしょうが」

呆れたように呟かれてしまった。

そうか。そんなにわかりやすかったのか。

「でも、なんだってわざわざこんなところまで言いに来るんだよ」

「何があつたのか知らないけどさ、やっと気付いたみたいだから一言言つといてやろうと思って。」

さすがに雨莉の前ではこんなこと話すわけにはいかないしねー」

「気付いたって、それ——」

前から俺が雨莉のことを好きだったって、そう言いたいのか？

今日みたいにわかりやすく、そんな風に見えていたのか？

キンコンカンコン

味気ない電子音が響く。

「あ、チャイムだ。やばっ」

「っておいっ！」

人を散々混乱させておいて、尾羽はあっさり教室に走っていく。

俺は、次の授業に来ていた教師に肩を叩かれるまで、廊下に立ち尽くしていた。

授業が終わり、放課後が来る。

俺は、雨莉と二人で帰っていた。

尾羽が智之をどっかに引っ張って行ってしまったせいで、学園を出たところから二人きり。

あいつ、何考えてるんだ。

「——ってことなんだけど……ねー、なー君？ 聞いている？」

「あー聞いている聞いている」

何かを話しかけてきた雨莉に適当に相槌を打つ。

でも、何を話していたのかなんてちっとも聞いていなかった。

昼に尾羽に言われた言葉が、ぐるぐると頭の中を回っている。

あれを、俺はどう受け止めればいいんだろう。

尾羽は、俺が雨莉を意識していると言っていた。

そりゃ、あんなことがあったら意識するだろう。するなって言う方が無理な話だ。

けれど、それは認めるにしても、だからって俺が雨莉のことを好きだということにはならないはずだ。

尾羽はまるで、俺が前から雨莉のことが好きで、やっと気がついたみたいな言い方をしていたけれど、それは違うと思う。

雨莉とは長い付き合いだ。

中学高校と、学年が上がるにつれて、俺たちの関係をそういうものにしようとする人は多くなって、

でも、大きくなって知った、愛だとか恋だとか。

改まってそういう気持ちを、雨莉に感じたことはなかった。

でも——あるいは、なのに——と思うのは、昨日の間違い^{アクシデント}があったから。

記憶に鮮明に焼きついた、雨莉の唇の感触。

その柔らかさと温もりが、俺の胸の裡をかき乱した。

俺たち二人の距離がゼロになったあの瞬間確かに、感じた歓喜があった。

湧き上がった感情は、昨日までの俺がまるで意識していなかったもので。

それは、要するに、好きという感情なのか。

その気持ちが、恋、なんだろうか。

でも——

でも、それはさ、なんだか虚しいじゃないか。

俺たちが過ごしてきた長い日々。

その中でずっと育まれてきた絆は、その年月の分だけの重みを持つているはずだ。

なのにそれが、いくら衝撃的だったって、たかがキスくらいで、簡単に別のものに変わってしまうんだなんて。

たった一度の触れ合いを経ただけで、雨莉の心も肉体も欲し^{すべてを}いと思う。

そんな、浅ましい欲求に、塗り替えられてしまっただなんて。

キスとかセックスとか、そういう男女のあれこれを、やりたくないだなんて言わない。

けれど、やっぱり、それは恋愛の先にあるものであって欲しいんだ。

偶発的に交わした唇の、その甘い悦びを知って、だから恋するなんてそんなちぐはぐ——俺は、だからそれを否定するんだ。

「なーくうん？　ねー、なー君ってばあ」

考えに没頭して放ったらかしにしていたらしい。

雨莉が、俺の周りを回りながら、構って欲しそうに飛び跳ねてい

る。

「転ぶなよ」

「あ、やっと気付いてくれた。大丈夫だよ」

「ついでの言うが、信号が赤だ」

「それも気付いてるよーっだ」

トン、トン、と後ろ向きにステップを踏んで、信号の前で止まる。

「わ、とととと」

つもりだったんだろうが、勢いがつき過ぎていて体が泳ぐ。

「ほら見ろよっ」

手を伸ばして腕を捕まえ、引き戻す。

「わぶっ」

今度は逆に勢い余って、雨莉がぶつかってきた。

胸に飛び込んできた雨莉を、反射的に抱きとめる。

「ぶは。なー君、ありがとっ」

「え……あ、ああ」

顔を上げた雨莉にお礼を言われたが、一瞬、その意味がわからなかった。

そうだよな。別に、雨莉を抱きしめてるわけじゃなくて、助けただけだ。

「大丈夫か？」

「うん」

「そうか」

腕の中にいる、温かい身体に意識を持っていかれて、つい生返事を返した。

何をやってるんだと、頭の中の冷静な部分が言う。

もう無事に助けたんだから、後は肩でも搦んではがしてやって、「危なかったな」とでも言えればいい。

そう考えているはずなのに、腕だけが別人のものになったみたい
に雨莉を抱きしめ続けている。

「あの、なー君？」

抱きしめたままの俺に、さすがに雨莉も不思議そうな声を出す。

身体の触れ合う至近距離で、言葉を紡ぐ柔らかそうな桜色の唇に
視線が惹きつけられて、

「キス、したいな」

気がついたときには、そんな言葉を口に出した後だった。

ほとんど無意識に言ってしまった台詞に、一瞬にして後悔が押し寄せる。

雨莉が聞き逃してくれたら、と祈るが、目を丸くして言葉もないほど驚いている雨莉を見るにそんなことはないだろう。

「あ、いや、今は――」

しどろもどろに言葉を搜しながら、今更になって雨莉を解放する。

雨莉はふらつと一歩下がり、俺の顔を見上げた。

「なー君、今の……どうして？」

「え？」

「だからね、どうしてその、キスって言ったのか教えて欲しいなって」

雨莉の視線と言葉が俺を貫く。

真っ直ぐな瞳に込められた感情は何だ？

そこに期待を見せるのは、俺の願望だろうか。

「ねえ、なー君」

「それは……」

急かさないでくれ。

俺だって混乱してる。

多分理由はとてもシンプルなもので、したかったからだ。

腕の中に捕らえた雨莉を離し難くって、欲しいと思った。

でも、問題はそれがなぜかって話で。

好きだから。一番理由らしい理由だ。

でも、それだけは違っただって、さっき決めたばかりだろう。

じゃあ何だ、馬鹿正直に、お前が欲しかったから、とでも言うのか？

それだって言えるはずがない。解釈によっては告白みたいにも聞こえる。

そっというのは、鬼門なんだ。

何か、とにかくこの場を誤魔化せるような、適当な理由を考えないと。

「なー君、答えてよ……」

「あ、それは……その、確かめたかったからだ」

「確かめる？ 何を？」

「俺のこと、かな。衝撃的な事件があつて、今、俺の心が揺らいでるから。それを、確かめようとしたんだ」

「……なー君の言ってること、わからないよ」

「ごめん……」

こんなわけのわからないことを言つて。

でも、この場を収めるための言い訳はこんなものしか思いつかなかつたんだ。

全くの嘘でもないしな。現に俺は、自分の気持ちは何なのか混乱してる真つ最中なんだし。

もちろん、キスなんて方法を取るつもりはなかった。

そんなことしたつて、余計混乱だけだつてわかり切つてる。

「わからないけど、でもわたし、そんな理由でキスしたくないよ」

雨莉の瞳が揺れる。

今度は、簡単に読み取れた。

そこに映るのは、悲しみだ。

そんな顔をさせたくなかった。

でも、何も定まらないまま、成り行きで俺たちの関係を動かすわけにはいかない。

そんなことをして、最期に傷つくのは、きっと雨莉だから。

「キスはね、なー君。好きな人同士がするものなんだゾ」

こんなときにも、雨莉はお姉さんぶった口調と仕草で、作った微笑みの影に、悲しみを隠してしまう。

俺のせいだとわかっていても、俺には言葉もなくて。

「だから、そんな理由は、間違いだよ」

そう言い切り、雨莉は俺に背中を向けた。

そして、居たたまれないように、走り去ってしまう。

俺は、それを追いかけることもできずに、見送るだけだった。

改めて考えてみるまでもなく、俺が悪い。

雨莉の気持ちも考えずにあんなことを言ってしまった。

俺の中では明確な理由と言葉による差があったって、雨莉にはわからないんだ。

雨莉からすれば、わけもわからないままキスを求められたようなものだろう。

キスは好きな人同士がするもの。

俺だって、そう思ってるんだよ、雨莉。

だから、受け入れられても困ったし、拒まれてよかったんだけど

……

「間違いだよ、か」

昨日も雨莉はそう言った。

けれど、その意味は大きく異なる。

昨日のは間違いアクシデントだったけど、今は俺の間違いミスだ。

これは、雨莉に嫌われてしまったかもな。

そう思ったとき、俺の胸にズキンと痛みが走る。

雨莉を傷つけておいて、至極当然の台詞に胸を抉られる。

そんな、どうしようもなく自分本位な俺自身に、何よりも腹が立つ。

「……帰る」

俺は、重い足を引きずって、家路についた。

> NEXT
DAY

七月五日

STAR FESTIVAL

<七月五日（金）>

謝ろう。

一晩かけて（昨日からわかっていただけ）そう決めた。

この気持ちに答えを出すことはまだできなくても、それは俺の課題だ。

それに巻き込んで、キスしたいとか、いきなりとんでもないことを言ってしまったということに謝らないといけない。

「それで元通りになれるといいんだけど……」

まあ、そう簡単には行かないだろうな。

とにかく、ウダウダ考えてないで今は行動しよう。どうせ、このままでもいいはずがないんだから。

………

そう意気込んで、雨莉の家に向かったのだが、

「え、雨莉のやつ、もう学校行ったんですか？」

「そうなのよ。朝から用があるんですって」

「……そうだったんですか」

聞いてないぞ……。

「夏彦君に悪いから起こしてって言って、それを夏彦君に言ってないんじゃないかねえ。」

「ごめんなさい、夏彦君」

「あ、いえ、別に大した手間でもありませんから。じゃあ、俺はこれで」

「はい、行つてらっしゃい」

おばさんに見送られて、雨莉の家を出る。

まいったな……。

用があるって言ってたらしいけど、多分口実だろうな。

何せ、昨日の今日だし、

「避けられてるんだよなあ……」

自分で言つて少し凹む。

どうも、俺の考えはまだ少し甘すぎたみたいだ。

いや、凹んでる場合じゃない。何とか関係修復を図らないと。

「よし、それなら学園でだ」

俺は気合を入れなおして、通学路を歩き始める。

通学のために雨莉がいないのは、随分と久しぶりだった。

「おはよー」

教室に入ってすぐ、雨莉の席を見る。

……いないか。

教室をぐるっと見回してみても、雨莉の姿はなかった。

待ってたら来るか？

でも、人のいるところでは話にくいしなあ……。

「おはよ、夏彦」

とりあえず席に荷物を置いていると、尾羽が歩いてくる。

「おう、おはよう」

「雨莉は？」

「今日は別行動だ」

そう答えると、尾羽は目をパチクリ。

「珍しいこともあるもんね」

そうだな。

俺もそう思うよ。

「で、何で？」

「俺も知らん。迎えに行ったらもういなかった」

「ふーん、何やってんだろ。ま、いつか」

尾羽が自分の席に戻っていき、代わりに智之が振り返る。

「琴織さんはいないようだね」

「聞こえてただろ。その通りだよ」

「霧島さんじゃないけど、珍しいね」

「まあな。俺もちよつと違和感があるくらいだ」

「はは、そうかい。まあ確かに、君たちはセットでいる印象が強いからね」

「そうだなあ」

だから、早く雨莉と話さないとな。

.....

ホームルームが始まるギリギリになって、雨莉は教室に戻ってきた。

「雨莉」

「おはよう、なー君」

先手を取られて挨拶された。

にっこりと笑顔で。

けれどそれがいつも通りではないと見抜けるくらいには、俺たちの付き合いは長かった。

雨莉は、キスをしてしまった次の日よりもずっと、今日の方が様子がおかしかった。

それだけ大変なことをしたんだと改めて思い知らされて、気が重くなる。

「あのさ、雨莉」

「なー君、朝の挨拶は？」

「……おはよう」

「うん、おはよう」

「それで雨莉、話があるんだけど」

「あ、なー君、もう先生が来ちゃうよ」

話を切り出そうとすると、雨莉は目をそらして前を向いてしまう。

こりゃ、避けられてるの確定だな。

ガラガラ。

「みなさん、おはようございます。そろそろ席に着いて下さいね」

本当に来るし……。

仕方ない、また後で話すか。

キンコンカーンコン

チャイムが鳴って、ホームルームが始まる。

「欠席の人は、いませんね」

空席のない教室を見回して、河野先生が出席簿に書き込む。

そして、

「皆さんっ、本当にごめんなさいっ！」

勢いよく、教卓に額をぶつけそうな勢いで頭を下げた。

何事！？

たぶんこの瞬間、クラスメイトの全員が同じことを思っていただろう。

「先生、どうしたんですか？」

クラスの一人に聞かれて、先生はやっと顔を上げた。

「先生のミスで、修学旅行二日目の中軌道ステーションと海中ステーションに行く人数を逆にしてしまったんです……」。

もう変更ができないので、中軌道ステーションコースの方から海中ステーションコースに二人、移動してもらわないといけないんです……」

にわかに教室が騒がしくなる。

クラスの半分くらいの生徒は、近くの生徒と顔を合わせて何か言っている。

関係なさそうな顔をしてるのは海中ステーションのコースを希望した人だろう。

俺は中軌道ステーションを選んだから、慌てる側だ。

手を伸ばして、智之の肩を叩く。

「なあ智之、面倒なことになってるみたいだぜ」

「そうだねえ。移動するのが二人ってことは、二十二人と二十人。ちょうど半分ずつくらいにわかれていたのが不幸中の幸いだね」

「……そんなこと計算してたのか」

「簡単な連立方程式だよ。中軌道ステーションをX人、海中ステーションをY人として」

「 $X + Y = 42$ 、中軌道ステーションの方が二人多いから…… $X - Y = 2$ か」

「そういうことだよ。まあ、ちょうど半分だったら逆になっても問題なかったんだろうけど」

「そんな計算はともかく、誰かが移動しないとイケないってのが問題だよな」

智之と話していると、教卓で河野先生が話を続けていた。

「それで、誰か、変わってもいいという人はいませんか？」

困りきった顔でそんなことを言うが、誰も名乗り出ようとはしない。

気軽に変更しますってものじゃないしなあ。

二人くらい、自分じゃなくても誰かが名乗り出るだろうみたいな
雰囲気はひしひしと感じられる。

まあ、俺もその一人なんだが……。

「誰もいなかったら、その、じゃんけんかくじ引きで……」

いいにくそうに河野先生が言う。

教室のあちこちで不満の声が上がり、「お前が行けよ」「いやそ
ちが」みたいな言葉の応酬が起きる。

いよいよ收拾がつかなくなってきた、そのとき、

「あの、はいっ」

隣の席で、一本の手が上がった。

雨莉？

「わたし、変わります」

おいおい、何考えてるんだよ。

班みたいなものはないけど、いつもの四人で回ることしてたのに
……。

智之や尾羽も訝しげな視線を雨莉に向けている。

「琴織さん、ありがとうございます……！」

だが、口を挟む間もなく、救世主を迎えたような表情の先生によって受け入れられてしまった。

「それで、もう一人、誰かいませんか？」

河野先生が聞くが、雨莉に続こうという流れはない。

当然だな。

でも、雨莉は移動してしまったわけだし……俺も行くか？

どうせ雨莉が抜けた時点でいつものグループは崩れてるんだし、雨莉を一人にするわけにもいかない。

でもなあ、今のままだと気まずそうなんだよなあ。

さて、どうするか……。

いやでも、関係修復するのに、変に間を空ける方が面倒かもしれないし。

よし、決めた。俺が――

「羽ちゃんっ。お願い、一緒に来てくれない？」

って、ええ！？

手を上げようとしたのに、雨莉の声に割り込まれる。

しかも、その相手は尾羽だ。

いつもなら、俺に頼んでくれるのに……やっぱり避けられてるんだなあ……。

「……私？」

意外そうに、尾羽が自分の顔を指差す。

雨莉が頷くと、尾羽は俺に視線を寄越した。

（いいの？）

口パクでそう聞かれる。

いいか悪いかと聞かれると、悪いんだけど、雨莉がそう望むのならそうしてやる方がいいのか？

うーん……。

「霧島さん、どうですか？」

「えーと、ちょ、ちょっと待ってください？」

先生に返事をした尾羽がまた振り返る。

（まどろっこいなあ！ 早く決めてよ！）

うわ、怒ってる。

ええと、ああもう、わかったよ！

謝ろうって決めてるんだし、雨莉との関係修復を今日中にしてしまえば問題ないだろ！

やけっぱちにそう決めて、俺は尾羽に頷いて見せた。

尾羽は肩を竦め、

「わかりました。あたしも海中ステーションに移ります」

そう言った。

「うう、決まってよかったあ……。二人とも、ありがとうございませ〜。」

こっそり内申上げておきますね〜」

涙を流さんばかりに河野先生に感謝され、ホームルームは終了した。

あと先生、全然こっそりになってませんから。

一時限目の授業が終わって休み時間になった。

雨莉をどつか引つ張って行って謝ろうと思っていたんだけど、

「雨莉ー、あんた何考えてんの!」

「僕も驚かされたよ。急に変わるなんて言い出すから」

この二人が速攻で集まってきたから、そうもいかなかった。

「勝手に決めてごめんね。でも、わたし、変わってもいいかなって思ったから」

その理由は聞かない方がいいんだろうな。俺の精神衛生上。

「まあ、変わってしまったものはしかたないよ。それより、予定のことを考えようか」

「二日目が別になると、宿泊施設が別になるからな。自由行動みづかめの行動開始前に集合しないと」

「えーと、どこを変えなきゃいけないの?」

「京都から東京までは中軌道ラインでそのまま行くつもりだったから、二人に上がって来てもらわないといけないね。移動時間は一時間くらいかな」

「うわー、めんどくさ」

「ごめんねえ、羽ちゃん」

「おい尾羽。自分で行くって言ったんだから、今更文句言うなよ」

「あれは雨莉が頼むから仕方なくだって。

だいたい、何で今日に限って夏彦じゃないわけ？」

う……痛いところを衝くな。

雨莉、理由はどうするつもりなんだ？

「それは……その……何となく？」

苦しすぎる理由だった。

本人が自信なさそうなのが致命的だ。

「何となく……？」

「まあまあ、霧島さん。何となくで夏彦じゃなくて霧島さんだったのは、それだけ琴織さんとの仲が深いってことだろう？
いいことじゃないか」

「そ……お？ まあ、いいけど……」

智之のフォローのおかげで一応引き下がってくれたけど、明らかに納得はしてない様子だ。

「ほら、それより予定のこと考えようぜ。移動に一時間かかったら、後の予定も全部ズレるんだからさ」

「低軌道ステーションに集合するとか、東京までは別行動する方法

もあるけど……。

うん、僕が予定を組みなおしてみるよ。夜にメールするから、見もらえるかな」

「いいのか？」

「いいも何も、最初に予定を立てたのは僕だろう？」

「……そっぴやそうだったな」

みんなで希望だけ出して、智之に予定を作ってもらったんだっけ。州外に出るといふ人も結構いるが、俺たちは州内を北上しつつ要所所で遊ぶってルートになっていた。

「それじゃ、頼むな」

「よろしくー」

「よろしくね」

「ああ、任せよう」

キンコンカーンコン。

「おっと、次の授業が始まるね」

「やばっ」

タイミングよくチャイムが鳴り、智之たちは席に帰って行った。

この休み時間はこれで潰れたけど、次の休み時間こそは雨莉と話をしよう。

.....

そう、思っていたんだけど.....。

次の休み時間は.....。

「雨莉」

「ちょっとトイレに行ってくるねー」

「.....おう」

それは仕方ないよな。

.....

その次の休み時間も.....。

「なあ、雨莉」

「あつ、何だか次の授業は移動教室だった気がしてきたよっ」

「それは確実に気のせいだ..... ってもういねえっ!？」

と、こんな感じに逃げられ続け、とうとう昼休みになるまで話もできなかった。

でも、それもここまでだ。

この長い休みを逃げ切れれると思ったら大間違いだぜ。

さて、どうやって雨莉を捕獲してやろうか。

闘志を燃やして拳を握り締めていると、智之が話しかけてきた。

「どうしたんだい、夏彦」

「何がだ？」

「いや、何だか、手段と目的が入れ替わってるような顔しているからね」

「……どんな顔だよ」

「そついつときの顔さ。初めて見るわけじゃない」

「うぐ……」

やばい。確かに、入れ替わってた。

雨莉を捕まえるゲームじゃないんだよな……。

知り合って一年ちよつとの智之にも見抜かれるとか、どんだけだよ……。

気をつけないといけないな。

「目的を思い出したかい？」

「おかげさまでな。ま、とりあえず飯にしようぜ。雨莉を呼んでくれよ」

「僕がかい？ 別に構わないけれど」

少し不思議そうな顔をしながら、智之が雨莉の席に向かう。

「琴織さん、今日のお昼はどうするつもりだい？」

「あ、智之君……」

ん？ 今、こっちを見たか？

「ごめんね、今日は一緒に食べられないの」

「何で！？」

思わず口を挟んでしまった。

そこまで徹底して避けるのかよ！

「えーっと、その、図書室に行きたいから」

「飯喰ってからでいいだろ」

「い、今すぐ読みたい本があるんだもん！ あれだよ、昨日の夜読んでた本の下巻が家になかったんだよ」

妙に早口で雨莉が言い訳する。

絶対嘘だ。

「何をそんなに読みたいんだよ?」

「それはその、ほら、あれ、えーつと、ファウスト!」

「へえ、ドイツの文豪ゲーテの代表作であるところの戯曲だね。うん、あれはいいものだよ」

「いやいや……」

誤魔化すにしても、なぜにそれ……。

「昨日の授業でちらつとでてきたね。それで興味を持ったのかい?」

「そ、そうそう、そうなの」

「それはいいことだね。それなら早く行きたまえ。第二部を読むには、昼休みは短すぎるよ。時よ止まれといいなくなるね」

「そうだね。うん、行ってくるよ」

明らかにほっとした顔で頷き、雨莉が教室を出て行く。

「あ、雨莉」

「おっと、夏彦。君は少し待ちたまえよ」

追いかけようとしたところで、智之に袖を掴んで止められる。

「おい、智之。どういっつもりだ？」

引き止められたのでわかる。

智之は、明らかに雨莉のことをフォローしていた。

「どういっつもり、と聞かれると、まるで僕が悪いことをしているようだねえ。」

僕としては、良かれと思ってこうしたつもりなんだけど」

「何がいいんだ」

「まあ聞きたまえよ。昨日は君の様子がおかしくて、今日は琴織さんに避けられている。」

どう考えても、君が何かやらかしたんだろう？」

「う……お前も気づいてたのか」

「あれで気づいてなかったら鈍感にもほどがあるよ」

バレバレだったってことか。

「わかってるなら行かせてくれてもよかっただろ。俺はあいつに謝らないといけないんだ」

「でもねえ夏彦。彼女が君を避けるなんて、これは相当だよ？
謝るだけでどうにかなるのかい？」

「それは……わからないけど」

むしろあんまり自信はない。

「でも、それしか思いつかなかったんだよ」

「それだよ」

「は？」

「君に思いつかなかったことでも、二人でなら思いつくかもしれないだろう？　僕に話してみたまえよ」

「お前にか……」

どうするかな……。

智之なら誰かに言いふらしたりなんて心配はしなくていいけど、そもそも話すこと自体がめちゃくちゃ恥ずかしい。

とは言え、俺が頭を悩ませたって、これ以上何かを思いつきそうもないし。

「わかった、話すよ。でも、場所は変えさせてくれ」

教室で話せるような内容じゃないんだ。

「ああ、それじゃあ中庭にでも行こうか。」

そういうわけだから、悪いけど僕たちは抜けるよ」

「はいはい、りょーかい」

ふと気がつくと、尾羽がすぐ近くに立っていた。

いつの間に……。

「あたしは雨莉でも探してみるわ。夏彦、さっさと仲直りしてよね」

「お前も気づいてたのか？」

「あれで気づかない方が無理だって」

「そうか……」

そういうことで、俺と智之は購買に寄って昼食を買い込んでから中庭へと移動した。

……

「まあ、こういうことがあったんだよ」

「なるほどねえ。そんなことになっていたんだ」

学園の中庭は石や木を適当に配置した（ように見える）小さな庭園で、校舎の裏手に位置している。

遊ぶには狭いし、ベンチなどがあるわけでもないの、あまり人が寄り付くことはない。

こつそり話をするのにはちょうどいい場所だ。

俺は、適当な石に座って、買ってきたパンを食べながら、二日前の事故からの出来事を智之に話した。

「それにしても君——」

智之は、パンの空き袋をビニール袋にしまいながら、割とばっさりと感想を言った。

「馬鹿じゃないの？」

「自分でもわかってるから、言わないでくれ……」

ほんとに、昨日の俺はどうにかしてたんだ。

「それで、智之。こんな話までさせたんだ、何か良い策を思いついてくれたんだろうな」

そう聞くと、智之はなぜか苦笑いで頭をかく。

「いやあ、ははは」

「ははは、じゃねーよ。何だ、あんな恥ずかしい話をさせておいて、俺は話し損か!？」

「まさかそんな話だとは夢にも思わなかったからねえ」

「それはまあ、そうだろうとは思っけどさ……」

「うわぁ、マジかよ。」

時間の無駄じゃねえか。

「でも、夏彦。話を聞いていて一つ思ったんだけど」

「ん？ 何だよ？」

「君、やっぱり琴織さんのことが好きなんじゃないのかい？ もちろん、恋愛的な意味で」

「それは……」

つい最近までなら、すぐにそうじゃないと言えていた。

けれど、今の俺はそれをそう断言できなかった。

「そう、なのか？」

「僕に聞かれてもわからないけど……」。

でも、普通はキスしたいと思うのは好きな相手にだろう？」

「……それは、そうだよな」

確かに智之の言う通りだし、

俺自身、今、「雨莉のことを好きだ」という言葉をきっぱりと否定できはしない。

「でもさ、智之。今の問題は、俺が雨莉を好きかどうかじゃないん

だよ。

俺は今までずっと、あいつのことをそういう意味で好きだと思ったことはなかったんだぜ？

それでも、俺たちは本当に仲が良かったんだ。それが、キスしてしまったからって、変わっていいと思うか？」

「あのキスを契機に、とは考えられないのかい？」

「キスがきっかけで好きになったんだとしたら、俺は自分が許せないよ」

「意外にロマンチストと言うか、純情だね、君は。恋愛が精神のみによって成り立たないのは明らかだろう」

「けどさ、智之。肉体関係に必ずしも愛が必要か？」

「ふむ、それもまた真だね。

しかし夏彦。やっぱり問題は、君が彼女を好きかどうかだよ。

君は琴織さんを好きかもしれないと感じた。けれど、そう感じたきっかけが、キスだった。

だから君は、その感情が肉体的な——そう、単純な肉欲から来る錯覚だとも感じている」

「そういうこと、なんだろうな」

一応、智之に話をした成果はあったかもしれない。

イマイチ形を成していなかった俺の気持ちを、理路整然と説明してくれた。

言われてみればなるほど、俺はそんな風に悩んでいたのかという気分だ。

「けれど、その狭間での君の揺らぎが、結果として琴織さんを傷つけてしまっている」

「その通りだよ……でも」

「わかってるよ。君が琴織さんのことを想うからこそその悩みなんだってことは。」

まあ、夏彦が余計なことを言わなければ、君が悩んでいるだけで済んだんだけどね」

「ぐ……仰る通りで……」

「だから夏彦。とりあえずは琴織さんに謝るにせよ、君が自分の気持ちに決着をつけない限り、この問題は解決しないよ」

「そう、だな。サンキュ、智之。少しは整理ができた」

「僕もただの役立たずにならずにすんでほっとしてるよ」

そのためにどうすればいいのかはまだわからないけど、どうにかすべきことだけはわかったから。

とにかく、さっさとこれを、俺の問題にしておもう。

雨莉を巻き込んで、しかも傷つけるわけには行かない。

「でも結局、今できることは雨莉に謝るだけなんだよな……」

「あはは……それは確かに。健闘を祈るよ」

「おう、精々祈っておいてくれ」

「それじゃ、教室に帰ろうか」

「いや、俺は雨莉を探してみるよ。まだ少し時間あるから」

「わかった。僕は教室に戻ってるよ」

「雨莉がいたらメールでもしてくれ」

「うん、了解」

俺たちは石から腰を上げ、ズボンについた砂を払い落として校舎へと戻った。

結局、この昼休み……いや、放課後までずっと、俺は雨莉を捕まえることはできなかった。

携帯の着信音で、はっと我に返った。

映像ディスプレイを展開すると、智之からのメールが届いている。開いてみると、スケジューラ用のファイルが添付されていた。

アプリを起動して開いてみると、修学旅行三日目のタイムスケジュールだった。

結局、中軌道ステーションに集合する案で調節したらしい。

あちこちで数分ずつ時間を短縮し、一時間のロスを取り戻すようになっているようだった。

「ま、智之が組んだのなら大丈夫だろ」

スケジュールを上書きしてアプリを閉じてから、智之に了解のメールを送る。

画面端のデジタル時計を見ると、午後九時を示していた。

「もうこんな時間か……」

自分の気持ちを考えていると、何も答えが出ないまま、時間だけが過ぎてしまった。

雨莉には休み時間には逃げ切れ、放課後は尾羽とどこかに出かけてしまっただけで謝ることはできていない。

それどころか、朝に挨拶した以外、ろくに会話すらできてない気が……。

「今から話すか」

俺が帰ってきたときにはまだいなかったけど、この時間ならもう

帰ってるだろう。

俺は、寝転がっていたベッドから起き上がり、窓辺へ。

カーテンを開くと、雨莉の部屋の窓が見える。

「あれ……まだいないのか？」

部屋の窓にはしっかりとカーテンがかかっている。

それでも、電気をつけていたら少しは光が漏れているんだけど、今は真っ暗だ。

一応窓を開け、雨莉の部屋の窓を叩いてみる。

だが、しばらく待ってみても窓が開くことはなかった。

「つかしいな……」

いくらなんでも、もう帰ってると思うんだけど。

でも、実際にいないだから仕方ない。

俺は、すごすごと部屋に戻るのだった。

<Side AMARI>

「はあ」

勉強机の電気スタンドのぼんやりとした光が、小さく部屋を照らしている。

なー君の部屋の窓が閉まった音を聞いて、わたしは詰めていた息を吐き出した。

「うう、なー君ごめんなさい……」

つい居留守を使ってしまった。

悪い子になっちゃったよ……。

今日一日、なー君は何か話したそうだったのに、それからも全部逃げてしまったし。

放課後には羽ちゃんに、

『あいつ、謝りたがってたよ。話くらい聞いてやんなよ』

と言われてしまった。

なー君が謝りたいのは、たぶん昨日のこと。

突然キスしたいって言われたこと。

今日のなー君、ずっと困った顔をしてたから、本当は聞いてあげ

なくちゃいけなかったんだけど……。

「でも……怖いんだもん……」

ずっとそうだと思ってたことが、そうじゃないかもって思ったら、

なー君が何を言うのか、怖くてたまらなくなった。

一つだけ鍵のかかる、勉強机の一番上の引き出し。

わたしは、鍵を開けて、中から箱を取り出す。

クッキーの空き缶に色紙を張って作った、わたしの宝箱。

小さい頃からずっと持っているこの箱には、遠足で拾った面白い形の石とか、きらきらのシールとか、価値はないけどとっても大切なものが入ってる。

その一番奥に入っているものを、そつと指で撫でた。

「なー君、どうして？」

キスしたいって言われたとき、告白されるのかと思ってドキドキした。

もしされたときの返事は、もう決まっていた。

でも、なー君は確かめたいからって、そう言ったの。

何を、どうして、今確かめる必要があるの？

なー君はきつとまだだと思ってて、だから言ってくれないだけだ
と
思
っ
て
た
の
に
。

もしかして、本当はもう変わっちゃったの？

「確かめなくちゃ、いけないのかな……」

>NEXT
DAY

七月六日

STAR FESTIVAL

<七月六日(土)>

ピピピピピピピピピピピピ！

「……うあ」

けたたましい電子音で目が覚めた。

寝ぼけ眼で枕元を探し、探し当てた目覚まし時計の頭を叩いて沈黙させる。

デジタル表示された時間は、いつもと同じ。

「……しまった。こんなに早く起きなくて良かったんだっけ」

水宮境までは、学園からバスで一時間程度で着く。

しおりでは、水宮境には正午頃に着く予定になっていた。

つまり、学園を出発するのは午前十一時頃だ。

それに合わせて、集合時刻も普段よりは少し遅くなっている。

「うーん、後一時間は寝れるな」

もう少し寝よう……。

俺は、もう一度布団に潜り込んで目を閉じた。

……

……

……

「はあ、はあ、はあっ」

俺は通学路を全力で走っていた。

短距離走並みの回転数に、あっという間に脚が悲鳴を上げるが、それに鞭打って走る。

「ああくそっ、何でこんなに重いんだ」

邪魔でしかない荷物に思わず悪態を吐く。

目覚ましもかけないで二度寝してしまい、目が覚めたときには既にギリギリの時間。

とつくに準備できていた旅行鞆を引っつかんで家を飛び出した。

「何もこんな日に寝坊しなくても良いだろうがっ」

俺が寝坊すると自動的に雨莉も遅刻するから、いつもは寝坊しないように気をつけてるのに。

まあ、どちらかと言えば、今日の変則的な登校時間のせいで寝坊しているわけだが。

走りながら腕時計を叩くと、現在時刻が無慈悲に告げられる。

数年前に起こった、機械に何でもかんでも喋らせるブームの名残だった。

学園までの距離と残り時間を考え、さらにギアを上げる。

「雨莉が、先に行ってたのはラッキーだったなっ」

一応家に寄ってみたが、雨莉はもう学園に行った後だった。

おばさんの話では、俺を待ってたけど、いつまでも俺が来ないから先に行ったらしい。

もう避けるのは止めてくれたんだろうか。

それなら朝の間に話ができたらよかったのに、どうして寝坊するかな、俺。

「今になって気にしても、どうしようもないんだけどな」

とにかく、避けられてないなら話はできるだろう。

今日中に謝ることができたらいいな。

そんなことを考えていると、ようやく学園が見えてくる。

俺は最後の力を振り絞って、学園の中へと駆け込んだ。

ギリギリで教室に飛び込み、休む間もなくホームルーム、校長からの話を経て、バスに乗り込んだ。

目的地が近場だからかバスガイドは乗ってなくて、運転手が短い挨拶をした後、すぐに発進した。

「はあゝ疲れたゝ」

「君もよくよく間が悪いねえ。何もこんな日に寝坊することないだろ」

シートに深々と沈み込んでいると、隣に座っていた智之が苦笑する。

座席は二人がけで、前の席には雨莉と尾羽が座っている。

座席数には余裕があつて、補助席を使わなくても全員が座ることができていた。

「やっぱりいつもの習慣を崩すとろくなことがないよ。せつかく雨莉に謝るチャンスだったのに……」

「まだ話していなかったのかい？」

智之が器用に小声で驚く。

バスの走行音で聞こえないとは思ったが、念のために声を潜めて顔を近づける。

「放課後逃げられたから、夜に話そうと思ってただけだな」

「忘れてたのかい？」

「違うわ！ 部屋に行ったんだけどいなかったんだよ」

俺がそう言うと、智之は目を丸くする。

「部屋に行ったのかい？ 大胆だね」

「窓ごしに話そうとしただけだ。すぐそこだって知ってるだろうが」

「だから、そこから侵入したのかと思ったよ」

「強盗かなんかかよ……。窓で行き来してたのはガキのころだけだ」

「昔はしていたんだ……」

「幼馴染なんだからそんなもんだろ？」

「やれやれ、君の幼馴染観には疑問を抱かざるを得ないね」

呆れたように肩をすくめられた。

「……何かおかしいのか？」

「スタンダードとは言い難い……いや、君たちの場合はそれでいいのかもしれないね。

結局のところ、人と人の関係に定型なんてものは存在しないんだからね」

「妙に深い話になったな……」

「そうだねえ。何の話だったかな？」

「俺が雨莉に——」

「わたしに？」

「うおおー!？」

頭上から声をかぶせられた。

思わず大きな声を上げてしまい、目の前の智之が耳を押さえる。

顔を上げると、座席の上に雨莉の顔があった。

「どうしたの？」

「い、いや、何でもない」

驚いたのとは別の理由で跳ね上がった心臓を意識する。

返事をした声がひっくり返らなかったことに内心ほっとした。

「で、何か用か？」

「あのね、飴食べるかなーって思って」

ひょいとかかげた手には、ピンク色の飴が二つ。

よく見ると、雨莉の頬が少し膨らんでいた。

「せっかくだから戴くよ。夏彦、君は？」

「そうだな、俺も貰うよ」

「うん。はい、智之君」

頷いた雨莉は、まずは智之に飴を渡した。

「えっと、それから、なー君も」

そう言って、おずおずと飴を持った手を伸ばす。

俺との距離に迷うような、ゆっくりとした動きだった。

やっぱり、以前と同じようにはいかないか。

手の平に落とされた飴は、酸っぱい梅の味だった。

午前十一時五十七分。

水宮境大橋を渡って、バスは無事に水宮境に到着した。

広大な敷地のど真ん中で威容を誇っている巨大な柱が軌道エレベーターだ。

柱というより高層ビルと言う方がイメージとしては近いかもしれない。

空の果てまで伸びるこの柱は、人工島を貫いて海中まで伸びていることから、ペネトレイトピラーとも呼ばれている。

駐車場で引率の先生たちから諸注意を受け、解散になる。

これから午後六時までの間は自由行動だ。

「さあって、いよいよ遊園地に」

「行く前に食事にしようか」

今にも走っていきそうな尾羽を智之が引きとめる。

パンフレットによると、水宮境パークの中にはファストフードを提供する屋台しか存在しない。

水宮境パークは大規模な割りに入場料はなく、気軽に出入りできるからだ。

すっかりした食事がとりたければレストラン街に行けということらしい。

「そうだな。俺、朝飯も食ってないから腹減ったよ」

「うっわー、何その普通のテンション。引くわー」

「いやいや、尾羽さん。低いならともかく、何で普通に引かれるんですかね？」

「修学旅行なんだから、テンション上げるのが普通ってモンでしょ。きゃっほーって叫ぶくらいの甲斐性はないわけ？」

「あつてたまるか！」

「あーあ、つまんないの。ねえ雨莉」

「……………」

尾羽が話を振るが、雨莉の反応はない。

「雨莉？」

「……ふえ？ あれ、何？」

尾羽がもう一度呼びかけると、ようやく雨莉が気づいた。

きよとんとした顔で、目を瞬かせる。

「何って言うか、話聞いてた？」

「あ、ごめん。ちょっと考え事してて。何のお話だったの？」

「遊園地に行く前に昼食を食べようかって話をしていたんだよ」

尾羽より先に智之が答える。

「あ、そうなんだ。うん、わかったよ」

「雨莉……」

笑顔で雨莉が頷き、味方を作れなかった尾羽ががつくりと項垂れていた。

「わわ、どうしたの羽ちゃん？」

「この裏切り者め」

「えええ……！？」

とにかく、遊園地に行く前に昼食を食べることになった。

……

「さっさと食べて、さっさと行くんだからね！」

尾羽のそんな主張によって、強制的に店が決定された。

中華とかイタリアンとかの専門店が軒を連ねる中で、明らかに浮いている一軒のレストラン。

水宮境内では珍しい、早さと安さに重点を置いている店だ。

学食と同じように、食券を買ってカウンターで料理を受け取るスタイルのようだった。

やっぱり普通のレストランに行く人の方が多いのか、同じ制服を着ている人はいない。

けれど、外州からの観光客か、多国籍の人たちで結構混み合っていた。

取りあえず食券の列に並び、数ヶ国語で書かれているメニューから食券を買ったのだが、

尾羽が「早くできるものにしてよ」と注文をつけるせいで、全員がうどんを選ぶことになってしまった。

「夏彦。料理は僕が貰ってくるから、君は席を取っておいてくれるかい？」

「おう、了解」

「そんじゃ、雨莉の分はあたしが取ってくるわ。雨莉も席取りよろしく」

「うん、よろしくね」

俺と雨莉から食券を受け取り、智之と尾羽がカウンターへ歩いていく。

「さて、どこにするか」

「あ、なー君、あそこが空いてるよ」

雨莉が指差した方を見ると、四人がけのテーブルが一つ空いていた。

「あそこでするか。急ごう」

「うんっ」

急ぎ足で椅子の間を抜け、空いているテーブルに向かう。

テーブルの各辺に一つずつの椅子が置いてあり、俺がその一つに座ると、教室で食べるときと同じように右隣に雨莉が座った。

あれ……もしかして、二人きりか？

間抜けな話だが、今になって気がついた。

気がつくのと、途端に緊張してくる。

どうしよう、今ここで謝ろうか……。

そんなことを考えながら、雨莉の様子を窺ってみる。

と、ぱっちり目が合った。

「ふぁ！」

声を上げて目を伏せたのは、雨莉の方。

だがおずおずと、目を上げる。

視線が絡み合った。

雨莉はもう、目をそらさない。

物言いたげな瞳が、正面から見つめてくる。

何か、言わないと――

「あのさ」

「あのっ」

搾り出した声は、見事に重なった。

俺は思わず口をつぐみ、

だが、雨莉は言葉を続けた。

「なー君っ、その、ききたいことがあるんだけどー！」

必死の形相でそれだけ言い切り、こちらを窺う。

「な、何だ？」

「あ、のね……」

緊張に掠れた声。

テーブルの下で、スカートをぎゅっと握り締めたのがわかる。

何を言うつもりなのか――

ごくりと唾を飲む。

「なー君、」

雨莉が口を開き、

「お待たせー」

「わっひゃあああ!!」

「うわああっ!!」

二人して椅子から飛び上がる。

「……何、どしたの？」

どんぶりの載ったトレイをテーブルに置きながら、尾羽が疑問符を浮かべる。

その後ろには、智之の姿もあった。

「な、何でもないよ！　ねえなー君」

「お、おう、そうだな。何でもない何でもない。」

あ、ここ水はセルフサービスなんだな！　取ってくるよ！」

慌てて場を取り繕い、俺は席を立った。

あーびつくりした……。

にしても雨莉のやつ、一体何を聞こうとしてたんだろうな。

昼食を終えた後、俺たちは水宮境パークへと足を運んだ。

複数の入場ゲート（駅の改札みたいなアレ）が並んだ巨大な入り口があるが、この遊園地に入るのに入場料は必要ない。

このゲートは入場者と退場者の数を確認するための物らしい。

入り口の横にある窓口ではフリーパスなどを売っているけど、それはスルー。

集合時間までの五時間余りの時間では、絶対に元が取れないからだ。

ちなみに、閉園時間は午後九時。

六時集合だとナイトイベントがひとつも見れないと尾羽が文句を言っていた。

ゲートを通って中に入ると、まずは噴水広場に出る。

ここからでも、パークの中央にある大観覧車が見えた。

その周りを走っているのは、チューブ状のコースで園内をぐるっと回る長いジェットコースター。

確か、ロングバレルコースターって名前だ。

ここからは見えないけれど、他にもたくさんのアトラクションがあるはずだ。

「ほら、何してんの。急ぐよ」

「そんなに急がなくても、アトラクションは逃げないよ」

「逃げなくても遅れんの。ハリアップ！」

「やれやれ……忙しいヤツだ」

俺たちが最初に向かったのは、噴水広場から北東に向かったところにある建物だった。

外観は半球の形をした白いドームで、直径は五十メートルくらい。

パンフレットには、スターライトドームと書かれている。

ここは、プラネタリウムだ。

入り口に立てられた看板には、七夕特別プログラム上映中とあり、上映時間が書いてある。

俺たちが最初にここに来たのは、たまたま上映時間にぴったりだったからだ。

入り口で入場券を購入して中へ入る。

建物に入ると、まずは短い通路があつて、その奥に扉があつた。

扉の前の受付で係員に入場券を渡し、代わりにイヤホンを受け取った。

無線式の小さなもので、小さくJAPANと書いてある。

日本製、ではなく、日本語用という意味だろう。

場内のアナウンスは、全てこれから流れるようになっている。

扉を抜けると、光量が一気に減る。

夏の日差しとの差が激しく、何も見えなくなった。

「うわ、暗いな……」

「じっとしてるのが得策だと思うけど」

「わわ、あいたっ」

「ちょっと雨莉、大丈——きゃっ」

ドタンバタンと音がする。

よく見えないけど、こけたみたいだ。

「ほらね」

隣に立っている智之のシルエットが肩をすくめる。

「なるほどな」

俺も、女子二人の教訓に従って立ち止まることにした。

十秒もすると目が慣れてきて、部屋の中が見えてくる。

丸い部屋の中央に投影用の装置があり、座席ずつ配置されていた。

自由席らしいから、適当な椅子を選んで並んで座る。

椅子はクッションが効いていてかなり座り心地がよかった。

ちょうど開演時間だったようで、俺たちが席に着くの見計らったように完全に電気が消えた。

完全に遮光されたドームの中が、完全な闇に包まれる。

夜の、いや、宇宙の黒に。

そして、光が、灯った。

天球のスクリーンに、星たちが輝き、幻想的なBGMが流れ始めた。

「ようこそ皆様。これから、天空を彩る星の世界をご案内いたします。」

ですが、その前に、皆様に注意事項をご説明いたします」

受付で受け取ったイヤホンをつけると、アナウンスが聞こえる。

携帯の電源はオフにと言う注意が、この星空の中では中途半端に現実的で、少し面白かった。

注意が終わると、アナウンスは星空の解説を始めた。

空を横切る光の帯である天の川。

天の川の上に一際明るく輝く星が、琴座の一等星であるベガ。

ベガと天の川を挟んで逆側に輝く星が、鷲座の一等星であるアルタイル。

天の川の中で目立っている星が、白鳥座の一等星のデネブ。

プラネタリウムは、夜空を忠実に再現するが、空そのものではない。

星を線が繋いで星座を作り、翼を広げた鳥や豎琴の絵が浮かび上がる。

最後に、三つの星を繋いだ、夏の大三角を紹介して、話は次に移った。

上映のメインである七夕伝説。

織姫星と牽牛星ベガ アルタイルの話だ。

天帝の娘である織姫は機織の名人であり、働き者の娘だった。

そして、牛飼いの若者である牽牛。彼もまた、働き者だった。

二人は愛し合い、天帝がこの二人の結婚を許したことで二人はめでたく夫婦になった。

しかし、結ばれた二人は、夫婦生活が楽しかったために仕事をしなくなってしまう。

これに怒った天帝は、二人を天の川によって引き離してしまった。

ただし、一年に一日、七月七日にだけは二人は逢うことが許される。

二人は、一生懸命仕事をして、たった一日だけ会える日を待つのだった。

.....

.....

.....

およそ三十分間の上映が終わり、俺たちはプラネタリウムを出た。

熱気と日差しが一気に押し寄せてきて、一瞬くらっとなる。

「で、次はどうする？」

「そんなのジェットコースターに決まってんでしょ」

尾羽に聞いてみたら断言された。

「そんな決まりはねえよ……」

「羽ちゃん、あんまり怖いのはやめようね」

「冗談！ 絶叫マシンはスリルを楽しむためにあるんでしょう？
ほーら行くよ」

「ふえええ~~~~~離してええええ~~~~」

雨莉の襟を捕まえて、尾羽がずんずんと歩き出す。

「……仕方ないな。行くか」

「そうだね」

俺と智之は、顔を見合わせて、その後を追いかけて歩き始めた。

.....

「結婚したら働かなくなるってなんなの？ ばっかみたい」

「うーん、そうだね、幸せになるためにはちゃんとしないと」

先を歩いている二人がそんな話をしているのが聞こえる。

どうも、さっきのプラネタリウムの話をしているようだ。

俺は可哀想な話だと思ったけど、二人は織姫彦星夫婦に否定的らしい。

雨莉もそういう意見なのは何となく意外だ。

言ってることは正論だけど、それ以前に可哀想だと言うと思ってただけだ。

「なあ、智之はどう思う？ さっきの七夕の話」

「そうだね……よくあるタイプの七夕伝説だったよ」

「ん？」

何か聞きたかったこととずれた答えが返って来たな。

「確かに、さっき見たのがポピュラーなものだけど、七夕伝説自体はもっと色々なバリエーションがあるんだよ」

「へえ、そうなのか？」

「ああ、例えば、『天河配』という話があつてね。

これは白鳥処女説話や羽衣伝説に似ているんだけど、天女が人間に羽衣を隠されて天に帰れなくなつたために妻になるってパターンで――」

そんな智之の蘊蓄を聞きながら、俺たちは次のアトラクションへと歩いていくのだった。

それから、大変だった。

いや、楽しかったんだけど、でもやっぱり大変だった。

最初のジェットコースター（ロングバレルじゃなくて、なんたらループコースターとかいう絶叫仕様）で悲鳴を上げ、

ホラーハウスであまりの完成度にビビりまくり、

コーヒーカップで超高速回転を味わい（遊園地の乗り物で、一番酔うのはコーヒーカップだ）、

世界一周旅行というアトラクションで - 20 と 50 の気温を味わい、

メリーゴーランドで智之と白馬に二人乗りさせられ（じゃんけん

で負けた）、

ミラーハウスで遭難した雨莉を搜索して、

そんなことをしている間に時間は過ぎ、集合時間まであと少しになった。

「時間的に、あと一つか二つだね」

腕時計を見て、智之が言う。

「もう？」

尾羽が不満そうな声を上げるが、時間が来るのはどうしようもない。

「そんじゃ、急いで次に行こ」

「あ、羽ちゃん。わたし、観覧車に乗りたくないな」

「えー、観覧車になんか乗ったら時間来ちゃうじゃん。
次は、ハイパーソニックコースターよ！」

またジェットコースターかよ。

この遊園地、ジェットコースターだけでいくつあるんだ……。

「えー、やだよお。怖いんだもん」

「だからそれがいいいでしょ」

「まあまあ、それなら別々に行けばいいんじゃないかい？」

「ああ、そっか」

智之が口を挟み、尾羽が今思いついたとばかりに手を打つ。

「それじゃあ、わたしは観覧車に行くよ」

「あたしはハイパーソニックコースターよ。時間があつたらロングバレルにも乗ろっかな。

あんたたちはどうすんの？」

「僕は霧島さんと一緒に行くよ」

間髪いれずに答え、智之は俺の肩に手を置いた。

顔を近づけて、俺だけに聞こえるように囁く。

「夏彦は、わかるだろう？」

「……そっいうことか」

俺と雨莉を二人にする機会を作ってくれたんだろう。

「俺は雨莉と行くよ」

「なー君、一緒に乗ってくれる？」

「雨莉が嫌じゃないならな」

「ぜんぜんっ、嫌じゃないよ」

雨莉がぶんぶんと首を横に振る。

「そっか」

「頑張りたまえよ、夏彦」

智之が、肩から離れた手で握り拳を作る。

「おう、サンキュ」

俺も手を出し、拳を軽くぶつけ合う。

男同士の友情を確かめ合う俺たちを、雨莉と尾羽が不思議そうに見ていた。

.....

直径二百メートル。二十分かけて一周する大観覧車。

観覧車のゴンドラがゆっくりと上がっていく。

窓からは透明な光が差し込んでくる。

少し薄暗くなってきたけど、夏の日はまだ落ちてはいなかった。

漫画とかだとかこういうシチュエーションでは夕焼けなんだけどな。

「って、どんなシチュだよ」

「うん？」

思わず口に出してセルフ突っ込み。対面の席で、雨莉が首をかしげた。

「いや、何でもない」

いかな、変なことを考えたせいで余計緊張したぞ。

二人きりの状況でたださえ緊張してるってのに。

これはホントに夕焼けじゃなくてよかった。

夕焼けの観覧車なんて、いかにも告白しますよって感じで――

「だから考えんなってのに！」

「ふわ！ どうしたの？」

「あ、いや、何でもない何でもない」

また自分に突っ込みを入れてしまった。

慌てて誤魔化す。

そんなことをしている間に、ゴンドラは三分の一ほど回ってしまっていた。

だというのに、肝心な話は全くできていない。

こんなんじゃないダメだ。

よし、謝るぞ！

俺は決意を固め、勢いよく頭を下げた。

「雨莉っ、ごめん！」

「ふえ！？ なになに、どうしたの！？」

頭上から慌てふためいた雨莉の声が降ってくる。

「あ、もしかして……。なー君、頭を上げてよ」

雨莉に言われて顔を上げると、雨莉は明らかにほっとした顔になった。

「もう、そんなに気にしなくてもよかったのに」

「え？」

あれ？ そんなにあっさり？

「なー君だつて寝坊することくらいあるよ。わたしなんて、全然起きれないし」

「そっちかーーーーー！」

がつくりと頂垂れる。

覚悟を決めて謝ったのに、朝寝坊してしまったことだと勘違いされていた。

そうじゃないんだよ、雨莉……。

「でも、朝はびっくりしたよ。なー君が来てくれなかったのって、もしかして初めてじゃない？」

「そう言えば……確かにそうかもしれないな」

俺が風邪をひいたりして行けなかったことはあるけど、寝坊っていうのは初めてだったかもしれない。

「もう随分長くなったよね。なー君が、わたしのこととか、ちゃんとしてくれるようになって」

穏やかな笑みを浮かべて、懐かしむように雨莉が語る。

そこに侵しがたいものを感じて、俺は雨莉の勘違いを訂正するために口を挟むのを諦めた。

「昔はわたしがいっぱいお世話してあげたのにな」

「そんな時代もあったなあ」

ずっと昔の話。

俺はその年の子供らしく、向こう見ずで我がままで。

それでいて、問題が起きたときにはそれを解決する手段は持ち合わせていなかった。

雨莉は、いつもそんな俺を後ろから見守ってくれていて、困ったときには先に立って導いてくれた。

まあ、結局どうしようもないことも多かったけど……。

そんな雨莉の優しさに甘えきっていた日々。

俺はその日々を、「あーちゃん」という呼び方と一緒に捨てて、今の関係へと変えた。

……あれ？　今思えば、何でそんな風に変えたんだ？

子ども扱いされるのが恥ずかしくなったとか、そんな理由だったっけ。

とにかく、そのときから俺たちの関係は変わって、俺が雨莉の面倒を見るようになったんだ。

今ではもう、そうしないと落ち着かないほどに、それが馴染んでいる。

「なあ、雨莉」

「なあに？」

「明日、ヘブンスラインのほうに来ないか？ 智之と交代するとかさ」

「できるの？ そんなこと」

「いや、言ってみたただけだよ。」

お前が目の届くところにいないと不安なんだよなあ」

それは、何気なく言った言葉だった。

だから、思わなかった。

「そ、それってっ」

雨莉が、その言葉にそんなに食いついてくるなんて。

勢い込んだ雨莉は、座席から腰を浮かすほどの勢いで。

胸の前でぎゅっと手を握り締め、深呼吸のように、一度長い息を吐いた。

「なー君、そんなにわたしが心配？」

「ま、まあ、そうだな」

上気した頬。

揺れる眼差しに押されるように答えた。

ゴンドラが観覧車の頂点に差しかかる。

「そう、だよ。だって――」

雨莉は、一つ頷き、一言一言を噛み締めるように、ゆっくりとその言葉を口にした。

「なー君は、わたしのことが好きだもんね？」

「――っ！」

言葉もなく、息を呑んだ。

その言葉自体は、聞きなれたものと言ってもいい。

それこそ、何度も聞いたことのある言葉だ。

けれど、今まで一度だって、こんなに真剣に問いかけられたことはなかった。

頂点を越えたゴンドラは、ゆっくりと下降し始める。

まだ十分間、逃げ場はない。

いや、あったとしても、逃げることなんてできなかっただろう。

俺は今ここで、答えなければならぬ。

だが、何を――俺に何と言えるのだろう。

俺はまだ、自分自身の気持ちに答えを見つけていない。

だから、今俺は、雨莉に好きだと言つことはできない。

「……違つよ。お前の面倒を見るのは、俺の役目だからだ」

結局俺にできたのは、いつものように答えることだけだった。

「……………」

「……………」

俺も雨莉も無言のまま、長い、長い沈黙が続く。

ゆつくりと、ゴンドラは地面に向かって行く。

そのわずかな揺れと音だけが、俺たち二人の間に満ちていた。

そして、地上へと帰る、その直前。

「……………そっか」

雨莉は、一言だけ、呟いた。

そう言った雨莉の表情は笑顔だったけど、

それは、どう見ても、失敗した作り笑顔だった。

……………

智之たちと合流し、集合場所に向かう。

水宮境のホテルに移動して、夕食の後で自由時間になる。

その間一度も、雨莉と話をすることはできなかった。

明日、俺のそばに雨莉はいない。

俺は自分の心に答えを出せないまま、天と海に隔てられてしまうように、ただ雨莉との距離が遠くなったのを感じていた。

>THE STAR FESTIVAL

七月七日

STAR FESTIVAL

<七月七日(日)>

修学旅行二日目。

俺たちは、軌道エレベーターの本体——ペネトレイターの中にいた。

軌道エレベーターの地上拠点と呼ばれる場所だ。

宇宙への玄関口となるこの場所だが、見た目は普通の駅に良く似ている。

入り口から入ると、搭乗券の販売機が並んだエントランスがあり、その奥に自動改札口がある。

その向こうに広がるのは、軌道ステーション行きバーティカルトレインの垂直列車のプラットホームだ。

速度の異なる三種類の垂直列車が停まる三つのホームが敷地一杯に横向きに走り、一番手前以外のホームには歩道橋で路線の上を通過して行ける。

垂直列車は環状線になっていて、改札口から見て右の壁沿いに下りて来て、左の壁沿いに上って行く。

そして、三つのホームの奥には、少人数用の垂直列車がずらりと並んでいる。

こちらはスキーのリフトのような感じで、観覧車のゴンドラのような客席が、到着位置から発進位置にスライドする間の約十秒間に乗客は乗り降りする。

待機位置と乗降口の間にいる場合は扉が閉まらないというシステムで、安全対策も施されていて、

多少遅れても数百キロという距離を移動している間にコンピューター制御できっちり修正されるようになっていて。

そんな話を智之から聞きながら、最も早い垂直列車が来るＣホームで到着を待つ。

適当に列を作っている学生たちの中に、雨莉の姿はない。

雨莉と尾羽を含むマリンライン組みは、地下一階にある海中ステーション行きの垂直列車のホームにいるはずだ。

雨莉とは今朝から、正確には昨日の夜から会っていない。

男子部屋と女子部屋に別れていたからとか、理由はつけられるけど、実際のところ避けられてるんだろう。

昨日はとりあえず話はできるくらいだったのに……鬱だ……。

まあ、観覧車のときの話が拙かったんだろうけどさ。

「じゃあ、何って言えば良かったんだよ……」

「その場における君の選択は間違っていなかったと思うけどねえ」

独り言に智之が返事を寄越す。

智之には昨日の夜、何があったかを話してある。

何かアドバイスがあればと思って相談したんだけど、特に良いアイデアは出てこなかった。

「そこで好きと答えて、琴織さんに告白されでもしたらさらに大変なことになっていたからね」

「いや、それはないと思うけどな」

「ふむ……どうしても、君は嫌われていることにしたいらしいね」

「いや、まあ……」

理由はよくわからないんだけど、そんな気がするんだよね。

なぜか、仮にあいつに告白した場合、上手くいくという気がしない。

「何でだろうな？」

「僕に聞かれてもね……」。

ま、もう起こったことを気にしても意味は無いからね。今日はどの道会えないんだから、気分転換でもしたまえよ」

「はあ、そうだな……」

そう答えたとき、ピラーの壁沿いに垂直列車が下りて来た。

壁を下り切ったところで直角に曲がり、ホームに停まる。

腕時計を見れば、午前八時五十七分零秒ジャスト。

この電波時計と同じ正確さで、三分後に出発するんだろう。

扉と安全柵が開き、降りてきた人でホームがごちゃごちゃになる。

人並みをかき分けながら列車のドアに乗り込んだとき、智之の声がした。

「夏彦が、自分のココロを見つけないと——」

俺に聞かせたかったわけじゃなくて、ただ呟いただけだったんだろう。

最後の方は掠れて聞こえなかった。

「……それも、わかってるよ」

俺の返事も、智之には聞こえなかっただろう。

わかってはいるんだ。

智之の言葉は正しい。

けれど、正しいとわかっていても、それがイコールで解決に結びつくわけじゃない。

解決するにはココロってやつは厄介で。

どんな本にも答えは載っていないし、こうだからこうなんて法則もない。

どうすればいいんだろう。

立ち止まっても、手を引いてくれる雨莉あーちゃんはいないから。

「何とかしないと……」

結局は、俺が何とかするしかない。

自分に言い聞かせるように呟いて、俺は列車に乗り込んだ。

窓の外で少しずつ遠くなる景色を見たり、智之と話したりしていると、あっという間に一時間の旅路が終わり、俺たちは中軌道ステーションに到着した。

垂直列車から降りると、列車は新しい乗客を乗せて静止軌道ステーションへと上がって行った。

ホームは地上拠点のものとほとんど同じで、ここが高度一万メートルとはとても信じられない。

ただ、窓から見える外の景色が、ここが地上ではないことを物語っていた。

苦しそうな声が聞こえて振り返ると、オーバーアクションで「空気がっ、薄い……っ」とか言って笑いを取っているクラスメイトの姿がある。

「何をやっているんだろうね」

「テンション上がってんだろ。一心宇宙に来たんだし」

呆れたように呟く智之に返し、ホームを見回す。

低軌道ステーションまではたまに行くけど、中軌道ステーションまで来ることは滅多にない。

と言うか、来た覚えが――

『うわー、あーちゃん！　ここ宇宙だぜ、宇宙！』

『そつだね～。ここがお空の上なんだ～』

「っ！」

いや、あるのか？ 俺は、ここに来たことが……？

十年前の七夕祭り。

雨莉と来たのは、地上じゃなくて……。

「夏彦、あれを見たまえよ」

「ん？」

智之の指した方を見ると、花瓶みたいなものに活けられた笹が置かれ、すでに色とりどりの短冊が結び付けられている。

笹の近くにはテーブルが置かれていて、そこで短冊に願い事を書くことができるようだ。

「七夕祭りのイベントだね」

「みたいだな。書いてくか？」

「いや、後にしよう。まだ移動の途中だからね」

「おっと、そうだった。じゃ、遅れないように行こうぜ」

「ああ」

まだ自由行動じゃない。

次に移動する場所は決まっている。

俺たちは、生徒たちの波に乗って歩き始めた。

中軌道ステーションは遥かな空の高み、高度一万キロメートルに位置する人工島だ。

大気圏などとつくに突き抜けてしまつて、周囲には宇宙空間が広がっている。

当然、生身で外に出られるはずもなく、ステーションの中心にあるペネトレイトピラーと様々な施設が入った複数のブロックがトンネルのような通路で繋がるという構成になっている。

俺たちはその通路の一つを通つて移動し、さらにもう一本通路を通つて、目的の場所に到着した。

宇宙科学博物館。

ミッドウエストライフ
慣性制御装置を作り上げたことで世界に名を轟かせた宇宙開発機構が主催する博物館で、アポロ計画の資料から静止軌道ステーションに存在する本拠地で研究中の最新技術まで、幅広く展示されている。

そらでそんな説明をしてくれる智之と一緒に中に入る。

タイムスケジュール的には昼までの二時間をここで過ごさないといけない。

それほど興味があるわけでもない展示物を見てそんなに時間を潰せるかどうか、微妙だ……。

……

そんな不安を抱えて中に入ったわけだが、博物館の展示物、思っていたよりもずっと興味深いものだった。

俺たちが生まれるよりもずっと前に、宇宙という場所を目指した人たちの軌跡。

挫折を味わったことを示す、壊れたパーツ。

遥か彼方の小惑星から持ち帰られた砂。

光を推力に変えて、外宇宙を目指す船の帆。

宇宙という場所には、人を惹きつけて止まない力があるのかもしれない。

「とは言え、そろそろ移動したいんだがね、智之さん」

「もう少しだけ……」

異星の砂を顕微鏡で見ている智之に声をかけるが、生返事が返って来るだけ。

俺なんかとは比べ物にならないくらい、宇宙の魅力に取り付けられている男がそこにいた。

よほど興味深いのか、さっきから少しも動こうとしない。

「仕方ないな……」

「仕方なくはないよ」

「お前が言っとなっ！ はあ、先に行ってるからな……」

「んー」

聞こえているのかいないのか……。

ま、返事したんだから、聞こえてるってことでいいだろ。

展示物に張り付いている智之をその場に残して、先へ進んだ。

「ん？」

何だ、これ。

俺は奇妙な展示品の前で足を止めた。

ケースの中に、小さな模型が入っている。

お皿の上に茶碗をひっくり返したみたいな形のUFOだ。

大きさは、下の部分が直径二十センチくらい。確か、アダムスキ
ー型とか言っただったと思う。

その小さな模型が、高層ビル街をモデルにしたジオラマの上に浮
いていた。

ケースの前には格闘ゲームにつかうスティックみたいなものがあ
って、説明書きがついている。

「自由に動かしてみてね、か」

スティックを握り、何となく右に倒してみる。

と、UFOの模型が右に動いた。

「おお……」

上、左と動かしてみた。

直角にカーブして、素早く動く。

こんな動きをするのは、あれだ、ミッドドライフ慣性制御装置。

使用には厳しい制限を伴うはずだが、さすがは開発元。

スティックを色々な方向に倒すと、全くタイムラグなしに鋭く方
向転換する。

こういう動きが可能なことは知っていたけど、実際に自分の手で
動かしてみるとその凄さと言うか、異常さがよくわかる。

「凄いぜ、これ——」

言いかけて、周りに誰もいないことに気づいた。

智之に付き合っている間にすっかり遅れてしまったらしく、顔見知りの姿すら見当たらない。

「……何だよ」

途端につまらなくなって、俺はスティックから手を離れた。

ケースの前を離れて、先に進む。

「雨莉……何してるかな」

無意識に呟きが零れる。

何をしていても、雨莉のことが気になってしまっていた。

せめて、尾羽と楽しんでくれたらいいんだけど……

「あれ、おーい、大鷲……大鷲！」

「おお？」

歩いていたら、誰かに肩を掴まれていた。

見てみれば、クラスメイトの男子生徒だ。

「その先行つても出口しかないぞ」

「え、マジで？」

順路の先をしてみる。

「うわ、ほんとだ」

ぼーっと考えている間に、展示物をすっ飛ばして来てしまったみたいだ。

「つーか、何でもみんなここで溜まってるんだよ」

「いや、今外に出てもしかたないだろ？ だから、あれ見て時間潰してるんだよ」

「あれ？」

「ああ。お、ちょうど次が始まるな」

その場集まっている学生たちが揃って見上げているのは、壁面にある巨大な液晶パネルだった。

ブラックアウトしていた液晶が明るくなり、夜空の映像が映る。

天の川を中心にした、夏の夜空。

キラキラと星のエフェクトが画面を走り、ナレーションが始まった。

「夏の夜空に一際輝く二つの星。琴座のベガと、鷲座のアルタイルです。」

この二つの星には、別の呼び名があることを知っていますか？」

この出だしって、もしかして……

「ベガは織姫とアルタイルは彦星と呼ばれています。」

それでは、この二つの星にまつわるお話を始めましょう」

「また七夕かよ！ 俺、昨日も見ただけど……」

「あー、そりゃ運が悪かったな。ま、ここにいるやつらも、もう三回くらい見たから。お前も付き合えよ」

「逆走して展示物見た方がいいんじゃないのか、それは」

呆れて言いながら、俺はパネルを見上げた。

そこでは、七夕伝説が説明されている。

プラネタリウムのとくと違って、紙芝居のようなつくりだ。

子供向けなのか、話の内容も少し易しい。

働き者の織姫と彦星。

墨絵調の男女が互いに手を取り合う。

そして、二人は結婚しました、とナレーション。

「こうして、二人は結婚しました」

あれ？ 何で、聞くより先にわかったんだ？

これは、記憶――？

『けっこんするのに、指輪はあげないんだね』

『指輪？』

『けっこんを申し込む男の人は、女の人に指輪をあげるんだゾ』

『ふーん。指輪じゃないとダメなのか？』

『うーん、気持ちがかもってたらいいんじゃないかな？』

雨莉……？

そうだ、あのとき、俺はここに来ていた。

少しずつ、思い出してきた。

雨莉と一緒に、ここで、この映像を見たんだ。

「しかし、結婚した二人は、仕事を怠けるようになってしまいました」
ナレーションは続く。

俺は、それに懐かしさを覚えながら、映像を見続けた。

.....

「夏彦」

それから、二度の上映が終わったとき、智之に声をかけられた。

「智之、来てたのか」

「ああ、さっきね。七夕伝説かい？」

「そうだよ」

パネルを見上げる智之に頷く。

「なあ、智之。俺、前にもこれを見たことあったんだ」

「知ってるよ。昨日も見ただろう？」

「そういう意味じゃないって。十年前だよ」

そう告げると、智之は一瞬驚いた顔になったが、すぐに状況を把握した。

「琴織さんと来たのかい？」

「そういつこと。そう言えばあいつ、あのときも同じこと言ってたなあ」

「同じと言つと?」

「『ちゃんとしないと』ってな」

「へえ。まあ、琴織さんはそういう性格なのかもしれないね。普段からよく言っているようだし」

「そうだな。で、『ちゃんとできてるね』と」

「はは、今の夏彦は『ちゃんとできてる』とは言いがたいけれどね」

「うつ……」

智之の言葉が胸に突き刺さる。

俺はがつくりと崩れ落ちた。

「うわ、すまない夏彦。そんなつもりじゃなかったんだ。ほら、元気を出したまえよ」

そうして、智之に慰められている間に、博物館見学は終わったのだった。

博物館の見学の後は昼食、そして、足元の地球と一緒に記念撮影をして、その日の宿であるホテルに入った。

時間はだいたい午後の三時。

部屋は二人部屋で、智之と同室だった。

荷物を部屋に入れたら後は自由行動だ。

外に出てもいいんだけど、俺と智之は部屋に残っていた。

「——展示物は興味深く、特に……」

備え付けの机で、何か呟きながら携帯を操作している智之の背中を、ベッドに寝転がった姿勢で見るともなしに眺める。

多分、修学旅行の後で提出するレポートのためのメモを書いているんだろう。

真面目なヤツだ。

旅行中からそんなことを考えてるやつが、他にいるだろうか、いやいいい。

反語だった。

「なんて、な……」

そんなしょうもないことを無理に考えていても、すぐに別の内容に取って変わられてしまう。

無論、雨莉のことだ。

この場に居もしないのに、気になってどうしようもない。

いや、居ないからこそかな……。

行く先々で少しずつ蘇る、雨莉との思い出。

もう、十年前に俺たちがここに来ていたことは間違いなかった。

「ま、まだ大半忘れてるんだけどな」

まだ小さかったとは言え、よくもまあ綺麗に忘れていたものだ。

多分、それ以来ここに来たことがなかったからだろう。

よく来ていたら、その度その度に思い出して忘れなかったんだろ
うと思う。

こうやって考えてみると、雨莉のことで忘れてること、まだまだ
ありそうだな……な？

「ああー……っ！」

「な、何だ、どうしたんだい？」

ベッドから起き上がる。

大声を上げた俺を、智之が振り返った。

「やっば、どうしようっ！」

「どうしたと言っんだい？　少し落ち着きたまえよ」

「そ、そうだな……って、これが落ち着いてられるかよ！」

「本当に慌てているね。何があっただんだい？」

「忘れてたんだよ！　今日のこと！」

「今日？　七夕かい？」

「違う！　雨莉の誕生日！」

俺がそう言つと、智之は口を「え」の形に開き、目を丸くした。

「本気で言っているのかい？」

「嘘や冗談でこんなに慌てるかよ」

「やれやれ、何をやってるんだい」

俺の言葉が本当だとわかると、智之は大げさな仕草で手を広げて肩を竦める。

割と本気で呆れられていた。

「だって、最近それどころじゃなかったんだよ」

「だからって、そんな大切なことを忘れるかい？　僕は今朝メールしておいたよ。おめでとうって」

「マジか……。いやでも、今日中に思い出せたんだからギリギリセーフか？」

「今まで忘れたことは？」

「……ここ数年は日付が変わる瞬間に祝ってました」

七月六日に限って、夜遅くに話しかけてくるからなあ。

自分からは言い出さないけど、凄くわかりやすかった。

「うわぁ、どうしよう……」

「まあ、今年はどっちにしてもそのタイミングでは祝えなかったんだし、今からお祝いを言っておいたらどうだい？」

「そうするしかないかぁ……」

「うーん、後はそうだね。プレゼントなんてどうだい？」

「どうも何も、渡せないだろ」

「写真でなら送れるだろう？ 心情的なものだけど、少しは祝っている感じが増すと思うよ」

「……いいかもしれないな」

プレゼントを買うことも忘れてたから、買いに行かなくちゃいけなかったし、一石二鳥だ。

「よし、そうする。ちょっと出てくるよ」

「ああ、行ってらっしゃい」

.....

「さて、どこに行けばいいのやら」

ホテルを出た俺は、取りあえず宿泊施設しかないブロックを出た。通路の端にある情報端末に携帯をかざして、案内図を読み込む。

「第四ブロックで七夕祭り特別出店中か」

調べるまでもなく七夕祭りを紹介するウィンドウが自己主張して
ポップアップ
くる。

プレゼントの目星はつけてある。

おぼろげな記憶からして、多分七夕祭りで出店していた出店で買ったはずだ。

俺は、携帯をポケットに突っ込んで、第四ブロックへと足を向けた。

.....

ホテルのあった第六ブロックから、第五ブロックを経由したここが、第四ブロック。

自然公園エリア。

地上からわざわざ本物の土を運んで来て、そこに木や草を植えた憩いの場らしい。

その広場に、たくさんのお店が並んでいる。

いかにも屋台然としたテントから、プレハブ小屋みたいな店まである。

威勢のいい呼び込みの声が飛び交い、ソースのいい匂いが満ちていた。

「あの店がまだあるといいんだけどな」

一人呟き、俺は、祭りの喧騒の中へと向かった。

人の波に乗りながら、出店を一軒一軒覗いていく。

たこ焼き。

綿菓子。

カキ氷。

射的。

ジュース。

輪投げ。

お祭りらしい店はあるけど、目当ての店は見当たらない。

段々と公園の端が近づいてきて、もうないんじゃないかという不安が胸を過ぎった。

そのとき、

「あ、あつた……」

テントを使った屋台。

暖簾^{のれん}には、星座屋の文字。

店の中にはでかい机が置いてあって、その上に仕切りのついた箱が置かれている。

その仕切りごとに、異なる星座のキーホルダーが入っていた。

仕切りには一つ一つ札がかかっていて、モデルにした星座の名前が書いてある。

星座の数は八十八あるが、並んでいるのは二十個くらいで、有名な星座を選んでいるようだった。

十二星座に、W字のカシオペア座、尻尾に北斗七星を持つおおぐま座、星が三つ並んだベルトが特徴的なオリオン座。

そして、七夕の主役をα星に持つ、琴座と鷲座。

プレゼントに何を選ぶか、少し迷ったが、すぐに決めた。

七夕生まれの雨莉に贈るんだから、やっぱり鷺座だろう。

安っぽいビニールに包まれた、鷺座のキーホルダーを手に取る。

なぜか、一つ袋二つ入りで五百円だった。

「五百円か……今になると、安物だな……」

でも、小遣いも貰っていなかった昔の俺にとっては、かなり思い切った買い物だったはずだ。

「他にも何か見繕——っ」

財布から五百円玉を取り出したとき、

俺は、そこに立っている自分が、急に十年前の自分に戻ったような気がした。

一緒に行くと言うあーちゃんを振り切って、一人で向かった屋台。

汗ばんだ手に握り締めた、一枚だけの五百円玉の固い感触。

見知らぬ店で買い物をするのだということと、その後に行うことへの緊張で、心臓が爆発しそうだった。

それでも、精一杯の勇気を出して、買ったのは——

「……思い、出した」

代金を払おうとしたところで急に固まった俺に、店のおっさんが訝しそうな目を向けるが、そんなことは気にならなかった。

どうして、忘れていたんだろう。

こんな——こんなに大切なことを。

何が、リボンの飾りのことは覚えているだ。

それだって、肝心のところを忘れてた。

あれは元々、誕生日のプレゼントじゃなかったんだ。

「プロポーズには指輪がいるんだ。なあ、雨莉？」

今ならわかる。

俺が雨莉のことを想うときの、この気持ちか、

子供の頃から変わらず、今も同じだと。

俺は、ずっと——雨莉のことが好きだったんだ。

夏彦が慌しく出て行ってからしばらく後、僕は第五ブロックを歩いていた。

目的地は第四ブロック。

そこで行われている七夕祭りを見に行くつもりだった。

今頃、彼の友人は無事にプレゼントを選んでいるだろうか。

最近、琴織さんとの関係について色々と相談に乗っているのだけれど、僕にはどうも、彼が余計なことを考えすぎているように思う。

傍目から見ると、あの二人はどう見ても相思相愛にしか見えない。

確かに、恋という一対一の関係において、僕は部外者に過ぎないけれど、岡目八目という言葉があるように第三者の目というのは馬鹿にできないものだ。

霧島さんも、あの二人の関係については僕とおおむね同意見だった。

だから、今みたいにギクシャクした関係は早めに修復してもらいたいんだけど……。

「おや？」

僕は、あるものに興味を惹かれて、足を止めた。

今居る場所は、第五ブロックの中央エントランス。

広いロビーのような場所の中心に、短冊の結び付けられた巨大な笹が置かれていた。

高い天井に届くほどに伸び、生い茂った緑の葉。

明らかに生木ではなく、作り物だ。

短冊も、笹に合わせた大きさに作られていて、一枚が教室の扉ほどある。

そして、その巨大な笹を囲むように、数台の情報端末が置かれていた。

近づいて行くと、画面が切り替わって自動的に説明が出てくる。

「……ふむ、なるほど」

この端末の中には、七夕祭りの期間中に笹に飾られた短冊のフォトデータが保存されているらしい。

祭りの期間が終わったあと、短冊の書式（願い事の欄と署名欄がある）を満たしている短冊を読み取って残しているのだそうだ。

そして、この端末を使って、過去に書いた短冊を検索することができる。

七夕祭りが始まってから今年まで、十数年分の短冊は、全て保存

されているとある。

「へえ、興味深いね」

僕は端末のパネルに表示されたキーボードに手を伸ばした。

十年前。大鷲夏彦。

情報を打ち込み、検索ボタンを押す。

進捗を示すバーが画面に一瞬だけ表示され、画面に一枚の短冊が表示される。

「これは……同姓同名だね」

子供が書いたにしては、達筆すぎるし、明らかに小学生レベルではない漢字が使われている。

おかしいな。

夏彦は、琴織さんとおこの七夕祭りに来たと言っていた。

それなら、短冊を書いていると思ったんだけど……。

あ、もしかして。

僕は、自分の閃きに従って、名前を書き換えた。

大わし夏彦。

画像として取り込んでいる以上、書かれた通りの字を認識しているはずだ。

もしかしたら、驚という難しい漢字をひらがなで書いているかもしれない。

検索結果が表示される。

「やっぱりダメか……」

さらに、漢字とひらがなのパターンを入れ替えて試してみたけど、一つもヒットしなかった。

ということは、夏彦は本当に書かなかったということかな？

そう僕が首を捻ったとき、背後から声をかけられた。

「智之？ 何してるんだ？」

<Side NATSUHIKO>

「智之？ 何してるんだ？」

ホテルに戻る途中、第五ブロックの馬鹿でかい笹の前で、智之を見つけた。

声をかけると、智之が何かの端末の前で振り返る。

「やあ、夏彦。プレゼントは無事に買えたようだね」

「何でわかる？」

「すっきりしたって顔をしてるからね」

「そうか」

プレゼントを買えたからだけってわけでもないんだけど。

多分、俺の心が整理できたからってのが大きいんだろう。

忘れていた気持ち。思い出した恋。

俺は今なら、胸を張って雨莉が好きだと言える。

ただ、それも全く問題なしってわけでもないんだよな。

「顔が曇ったね。今度は別の悩みができたのかい？」

「ま、そんなところだ」

俺が雨莉を好きだったことは思い出したし、今でも好きなんだと気持ちの整理はできた。

けれど、俺の記憶には、まだ思い出せていない部分がある。

雨莉に告白するつもりだった、十年前の俺。

そのために用意したプレゼント。

雨莉がそれを持っているんだから、俺がそれを渡したのは間違いない。

なのに、実際にそれをあげたときの――告白したときのことが、空白のままだった。

この記憶を思い出するためのトリガーも、このステーションのどこにあるんだろうか。

「後で歩き回ってみるか」

「うん？」

「何でもない。で、お前は何をしてたんだ？」

「僕かい？ 僕はちよつと短冊をね」

そう言つて、智之は端末の説明をしてくれた。

願い事の書かれた短冊を保存する機械か。

「それで、夏彦の短冊があるかと思って調べてみたんだけど」

「見たのか！？」

十年前の俺が書いた、あの恥ずかしい短冊を！？

「その反応ということは、書いたようだね」

「……そう言ってることは、見つからなかったのか？」

「」明察「

「そうかぁー」

ほっとして胸を撫で下ろす。

いやまあ、今更という気がしなくてもないけど、やっぱりあれは恥ずかしい。

子供だったら微笑ましいですむんだけど、今となってはもう痛い。

「随分ほっとしてるね。一体、何を書いたんだい？」

「それは秘密だ。それよか智之、一つ頼みたいんだけど」

「何だい？」

「それで、雨莉の短冊を探してくれ」

さっき、この端末の機能を聞いたときから気になっていた。

俺は、自分が書いた短冊の言葉は思い出せる。

それなのに、「雨莉が何を書いたのか、それは思い出せない。

そこに、俺が忘れていた何かがあるような気がした。

「ああ、いいとも」

そんな俺の切実な想いを知る由もない智之は、軽く頷き、名前を打ち込んだ。

検索。

検索結果、 0 件。

「あれ、ないのか？」

「どうかな……まだわからないよ」

智之は、琴織雨莉の琴を消して、ひらがなに書き換えた。

そして、再度検索するが、結果は同じ。

「夏彦。そのころ琴織さんが自分の名前をどう書いていたか覚えていないかい？」

「……どうだったかなあ」

イマイチ自信はなかったが、智之に代わって名前を打った。

ことおり雨莉。

検索結果、 一件。

赤い短冊が画面に表示される。

そこに書かれていた言葉は、

『なーくんがちゃんとしてくれますように　ことおり雨莉』

そうだ……これだ。

今度こそ、思い出した。全部を。

「なあ、智之。お前の予想は当たってたかもしれないな」

「僕の予想？　何の話だい？」

「告白して振られたことを忘れたかったって話だよ」

<Side　OBANE>

修学旅行は二日目。

今日の予定はもう消化し終わって、今は自由時間。

夜までに地上のホテルに戻らないといけないんだけど、あたした

ちはまだ海中ステーションにいる。

今日一日、雨莉はあんまり元気がなかったから。

「ま、理由なんて夏彦^{あいつ}に決まってるんだけど」

当の雨莉は、カーテンの向こうの試着室で着替え中。

七夕祭りの出し物の一つの、貸衣装。

七夕にちなんで、男性には彦星の、女性には織姫の衣装が貸して貰える。

今日一日、妙な格好の人とすれ違うと思ってたけど、そういう訳なのね。

一緒に着ないかって雨莉に誘われたけど、あたしは断った。

だって、

「羽ちゃん、お待たせ」

カーテンを開いて、雨莉が出てくる。

「うわぁ……」

あたしの口からそんな言葉が零れた。

帯っぱいリボンを腰に巻いた、淡い紫色^{ふじいろ}のワンピース。

純白の領巾^{ひん}を、首にかけ、肩から手に垂らしている。

水晶玉みたいな飾りは、ガラス玉かなんかよね、流石に……。

あたしの知る限り、織姫はこんなかつこはしてない。

百歩譲っても、織姫っぽい何か^{コスプレ}だった。

「何その反応っ？」

「いやまあ、似合ってるよ」

これは本当だ。

あたしは着たいとは思わないけど。

「ほんとぉ？」

「ほんとほんと。あたし嘘つかない」

「そっか、よかった」

片手を上げて宣誓してやると、雨莉はにつこりと笑った。

その目が、何かを探すように虚空を彷徨う。

無意識の行動っぽかった。

だって、そいつがここに居ないのはわかりきってる。

雨莉ははっと気がついて目を伏せた。

さっきまでの笑顔は、もう消えてしまっている。

ったく、夏彦のヤツ、面倒なことしてくれたもんね。

昨日の夜は自由時間も何かと理由つけて会おうとしなかったし、そのくせ、日付が変わる少し前くらいからずーっと携帯見てたし。

多分、夏彦からの連絡を待ってたんだって、乙女あたしの勘が告げてる。

何か複雑そうだから、あたしなりに気分転換させてやろうとしてたけど、どうもダメっぽい。

だいたい、あたしはこういう複雑な人間関係とか、そういうの苦手なのよ。

遠まわしに言うとか、こっそり気を回すとか、あたしのキャラじゃない！

そう思うと、何かイライラしてきたなー。

うん、やっぱりあたしらしく、直球で行きますか。

「ちょっと雨莉」

「え？ なぁに、羽ちゃん？」

「あんた、夏彦と何があったのよ」

「ふええっ？ な、ナニモナイヨ？」

「嘘つけ」

「ばれたっ！？」

ずばずば切り込んでいくこの感じ。

んゝそうそう、これがあたしのペースよ。

「バレバレな上に、あんたが暗いところまで気になんのよ。
あたしを一日やきもきさせた罰として、キリキリ吐きなさい」

「うう……ごめんなさい。」

じゃあ羽ちゃん、聞いてくれる？」

首をちょこんと傾けて上目遣い。

素でやってるんだから、この子はカワイイ。

夏彦が世話を焼きまくってるのはこのせい？

「話せて言ったのはあたしなんだから、当然聞くつて。で、何が
あつたわけ？」

「うん、あのね……。」

わたし、わからなくなっちゃった」

「わからなくなった？ って、何がよ？」

「なー君の気持ち、だよ。なー君、変わっちゃったのかな……？」

「ちょっと待った。変わったとか言われても、意味わかんないんだけど」

「あ、そっか。えっと、ちょっと待ってね」

雨莉はそう言うと、ポケットから財布を取り出した。

財布を開いて、お札を入れる部分から、一枚の紙を丁寧に取り出す。

長方形だけど、お金じゃない。

長い時間が経ったのか、色あせた青い紙。

どこから引きちぎったように、紙の上の部分が破れていた。

「なー君はね、わたしのことが好きだったんだよ」

差し出されたのは、古い短冊。

そこには、こんな言葉が書いてあった。

『あーちゃんとけっこんできますように　大わし夏ひこ』

第五ブロックのエントランスにあるベンチで、缶コーヒー片手に智之に昔話をしていた。

「結婚できますように?」

「ああ。あのとき俺は、そう書いた。

そのときにはもう、雨莉に告白しようって決めてたから」

結婚という言葉を使うくらい、俺は雨莉のことが好きだった。

この場合の結婚ってのは、将来のことを考えてたとかそういう意味じゃなくて、子供にとって、『好き』の最上級だった。

「記念撮影したところに笹があっただろ? あそこに雨莉を呼び出して、待つてる間に短冊を書いたんだ。

でも、そのときに雨莉の言葉を思い出してさ」

「それは?」

「結婚を申し込む男の人は指輪を用意するんだって。

時間もまだ少しあったから、雨莉に贈るためのものを探しに行つて、指輪じゃなかったけど、プレゼントを用意したんだ。

そして、戻ってきたら雨莉が来てて、それで……その短冊を飾ってた」

「『なーくんがちゃんとしてくれますように』か……。意味はまあ、

文面通りだろうね」

「だろうな。しかもそれ、俺の短冊と並べてあったんだ。普通に考えて、俺のそれを見た上でのリアクションだろ？」

「うーん……そう、だねえ……？」

齒切れ悪く答える智之。

告白を受けての返事だとすると、マイナスのイメージだから、気を使ってるのか。

「ま、それを見て、幼い俺は子供心に焦ったわけだ」

雨莉に頼りつ切っていた俺。

本当は、雨莉はそれを嫌がっていたんじゃないかって。

「だから、聞いたんだよ——」

『あーちゃんは、おれのこと迷惑だっと思うの？』

『そんなことないよ。なー君の面倒をみるのは、私の仕事だもん』

「迷惑だとは言われなかった。でも、あいつはそれが自分の仕事だっと言った。

仕事ってことは、義務だ。好意でも悪意でもない。

いや、それ以前に俺は、その短冊を見たときから告白する勇気を

失くしてしまってた」

「それじゃ、君は……」

「誕生日のプレゼントだって言って渡して、それで終わりにしたよ。まあ、ちょっと食い下がられて焦ったんだけどな」

『でもなー君、大事なお話があるんじゃないかなかったの？』

『それは……今は言わない！』

『えー、かくしことはよくないゾ』

『そのうち言うから。いつか——』

「ちゃんとしたら話すって、そう約束して終わらせたんだ。

それから俺は、雨莉に迷惑かけないように、自分が世話をするくらいになれるようになって色々頑張ったんだ。

でも、いつの間にか忘れてしまってたんだな」

「目的を忘れてしまって、手段が目的に成り代わってたようだね。いや、もしかしたら、変わること必死すぎたのかもしれない」

「そう、かもしれないな。

ま、何にせよ、俺の片思いだったって話だよ」

「ふむ……そうか……」

智之はそう眩くと、わずかに俯いて、それきり何かを考え込んでいるように見えた。

俺は、考えに沈んだ智之を横目に、缶の中身を飲み干した。

苦い……。

今は甘いものにしておけばよかったな。

「夏彦」

智之が顔を上げ、少し下がった眼鏡のフレームを整える。

「君は今も琴織さんが好きだ。そう思っているのかい？」

「かまわない」

俺は、はつきりと頷いた。

思い出すまでに時間がかかった分だけ、今の気持ちは強く固まっていた。たどりつく

「それじゃあ、もう一度告白するつもり、あるかい？」

「あるよ。あいつに謝るためには、それも言わなきゃならない。ま、また俺の片想いで終わるんだろうけどな……」

そこだけは憂鬱だった。

「そう、か。それなら結果的には……いや、しかし……」

何か小声で呟く智之。

「何だよ？ 思うところがあるなら言ってくれ」

「そうかい？ それなら言わせてもらっけど。夏彦、君は二つ、重大な勘違いをしている」

「勘違い？」

「そう、勘違い。まず二つ目は、君が片想いだってこと」

「片想いじゃないって……じゃあ何だよ」

「片想いじゃないなら両想いに決まってるだろう」

わかってるよ。

でもなんか、自分で言うのは恥ずかしかった。

「でも、そうかあ？」

俺にはどうもそう思えない。

「十年前の時だって、俺が両想いだと勘違いする程度には仲良かったんだぜ？」

「そこだよ、二つ目の勘違い」

「は？」

「いいかい夏彦。琴織さんは、君と同じように、十年前からずっと君のことが好きなんだよ」

「……いやいやいや」

ぶんぶんと首を振る。

危つくその気になって喜ぶところだった。

「おい智之、何だってそんなとんでもないこと言い出したんだよ」

「確かに推論だけど、そう突飛なことを言っただつもりはないよ。謎解きを聞ukai、ワトソン君？」

語調こそ悪戯っぽいものだったが、レンズ越しの瞳にはいつもの理知的な光がある。

そうだな。

こいつが、適当なことをいうはずない。

両想いと言うからには、言うだけの理由があるんだろう。

「……オーケー、頼むよホームズ」

「任せよう。ま、彼の名探偵の扱う事件とは比べるべくもない難易度だけだね」

智之はそう前置きして、話を始めた。

「問題はシンプルにたった一つ、琴織さんの短冊だよ。

『なーくんがちゃんとしてくれますように』。

これだけ見ると、君のように考えるのが妥当だと、僕も思う。

でも、その前後を考えると、必ずしもそうではないんじゃないかと思うんだ」

「前後？」

「そう、まずは『前』の方から行こうか。

十年前、君と琴織さんは、この中軌道ステーションにやってきて、博物館に行った。そうだね？」

「おう」

智之が何を言いたいのかわからないまま、頷きを返す。

「そして、そこで七夕伝説を見た。これもいいね？」

「ああ、間違いない」

「じゃあ話を続けよう。七夕伝説は、ハッピーエンドとは言い難い話だ。

理由は当然、織姫と彦星が引き裂かれてしまうから。

一年に一度しか逢えない状況は、決して幸せなものではないからね。

では、夏彦、問題だよ。七夕伝説をハッピーエンドで終わらせるには、どうすればいい？」

「それは――」

七夕伝説をハッピーエンドにする方法か。

要するに、別れさせられなければいいんだから、

「織姫と彦星が仕事サボらなかつたらいいんじゃないのか？」

「そうだね。簡単だったかい？」

「いくらなんでもな」

「子供でもわかる？」

「……わかるんじゃないか？」

一体智之は何が言いたいんだろうか。

さっぱり見えてこない。

「そうだね。僕もそう思う。

それじゃ、その結論、言い換えてみようか。
仕事をサボらないと言い換えると？」

「仕事をする？」

「そう、ちゃんと仕事をしないと、ね」

「ちゃんと、しないと……」

そうだ、雨莉は言っていた。

七夕の伝説を見た後で、『ちゃんとしないと』って。

「時系列から言って、ちゃんとする必要があるのは、結婚した後だ。これを踏まえて聞くよ、夏彦。」

プロポーズに対して『ちゃんとしなさいいけない』という返事が示すのは、イエスか、ノーか」

「……イエスってことになるのか？」

そう言って、まだ半信半疑だった。

確かに、智之の理論の組み立ては正しく思える。

でも、そんな都合のいいことがあるのか？

「僕はなと思う。多分、琴織さんは君の短冊を見て嬉しかったはずだ。」

けれど、そのとき、見たばかりの七夕伝説を思い出してしまった。君が『ちゃんとしていなかった』のは確かなようだから、琴織さんは、結婚するという前提の上でその短冊を書いたんだ。

確かに君は変わらなければならなかった。けれど本当は、告白した上で変わる道を選べたはずなんだ」

「それは……」

「それじゃ、前後の『後』に行くよ」

混乱している俺を他所に、智之は話を進める。

「僕は、琴織さんが『ちゃんとしないと』って言っているのをよく聞くんだ。

多分、君は僕よりも多く聞いていると思う」

「……そうだな」

荷造りとか、小テストとか、ことあるごとにあいつはその言葉を使う。

「それって、やっぱり俺がちゃんとできてないってことなのかな……」

「何を馬鹿なことを言っているんだい？」

琴織さんは、いつもセツトで言っているじゃないか。『ちゃんとできてるね』って」

「あ——」

雷に打たれたような衝撃が、俺を貫いた。

『えー、かくしことはよくないゾ』

『そのうち言うから。いつか、ちゃんとしたら、話すから！』

『ほんと？ やくそくだよ？』

『うん、やくそくする。だから、あーちゃん、おれがちゃんとできるよっになったら教えてよ』

『いいよ、そうなたら、教えてあげるね。
それまでは、じゃあ、待っててあげる。ずっと——ずっと待つ
てるから』

いまさら、智之の言葉を疑おうとは思わない。

あいつは、昔からずっと、心に決めていたんだ。

そして、ずっと待っていた。俺が、ちゃんとして、もう一度告白
するのを。

彼女はもう、俺に気持ちを伝えていたから、待ってたんだ。

長い間、俺に『もういいよ』と言い続けていた。

待たなきゃいけないから、『私のこと好きだもんね』と、精一杯
に言葉を振って。

それなのに俺は、それさえ忘れていて……。

あいつは、最近の俺の言葉を、どんな気持ちで聞いていたんだろ
う。

俺は、どれだけあいつを傷つけてしまったんだろう。

「馬鹿だよ、あいつ……何で、そんなに待てるんだよ」

俺は、好きだったことさえ忘れてしまっていた、大馬鹿野郎だっ
てのに。

「君が、今までの自分から、全く違う自分変わったことと同じなんじゃないかな。

待ち続けることも凄いことだけれど、そうやって変わることも並大抵じゃない。

僕は、恋をしたことがないからわからないけれど、多分それが、愛の力なんだよ」

気障ったらしいことを言っていると思ったのか、微妙に恥ずかしそうに智之が言う。

「それに、多少は救いもあるよ。

君は確かに恋していることを忘れてたけど、もっと正確に言つと、琴織さんが好きな状態が『普通』になつてたんだと思う」

「確かに、そうなんだろうな」

一度目の恋を失つて、けれど気持ちは捨てられなくて。

その想いを抱えたまま、変化と日常に埋没してその想いの名前を忘れてしまった。

ずっと恋したままだったから、同じ相手に新しく恋をすることはなかった。

「だから、君の琴織さんへの扱いは、ずっと恋している相手へのそれだったと思うよ。

ま、随分とプラトニックなものだったろうけどね。

その『普通』を乱してしまったのは、やっぱり、キスしてしまったことだろうね」

「そうだな……」

けれどあのキスに、少年時代に知りえなかった熱さを感じてしまった。

好きって気持ちの先にあるもの、あるいはこと。

どんなに仲がよくても、友達ではありえないふれあいを、

子供のときは知らなかったものを欲しいと思ったから。

それなのに恋してることを思い出さないものだから、俺は情欲にだけ支配されていると錯覚していた。

「夏彦。君は忘れてしまった恋に殉じて、彼女に誠実であろうとした。

それが悪いとは言わないし、君の葛藤もわかるつもりだ。けれど夏彦、君は罪を背負っている」

「ああ。俺は、恋を忘れて、微妙な距離のまま、雨莉を待たせ続けた。

雨莉が、その距離感で我慢し続けてくれることに甘えてたんだ」

雨莉が何を考えていたかが紐解かれた瞬間から、俺はこの気持ちが抑える方法がわからなかった。

恋を思い出したときよりもずっと、好きだと思っ気持ちが溢れてくる。

謝りたかった。待たせたことを。忘れてたことを。無神経な言葉をかけてしまったことを。

そして伝えたい。俺が雨莉が好きだということを。

待たせてしまった言葉を、雨莉に伝えたい。

雨莉に――。

「――逢いたい」

「それなら」

零れ落ちた言葉を拾って、智之は言った。

「逢いに行きたまえよ、彦星。幸い今日は、鵲が橋をかける日だ」

真っ直ぐに智之が指差した先には、天地を貫く柱があった。

人を彼方へ運ぶ、軌道エレベーターが。

「この缶は僕が捨てておくよ」

コーヒーの空き缶を、智之が俺の手から抜き取った。

「っ、行ってくる!」

俺は、ベンチから立ち上がって、走り出した。

「頑張りたまえよ」

缶一つで、後のことは任せてくれと言った友人の聲が送り出してくれる。

本当に、智之には感謝してもし足りないな。

.....

数分の待ち時間も惜しくて、最速の少人数用の垂直列車に飛び乗った。

地上までは一時間。

時計は遅々として進まず、あまりにもどかしい時間が流れる。

やがて、ピラーの外は宇宙の夜から夕方に変わり、遠い水平線に沈む太陽が黄昏色の光を投げかけていた。

壁に埋め込めれたパネルに表示された海拔高度がゼロに近づき、速度が一瞬にして激減した。

静かにエレベーターが止まる。

逸る気持ちをそのままに、足踏みした。

扉が開く。

瞬間、駆け出そうとして――

「あ!？」

「え!？」

声が重なる。

目の前に、あまり天女が立っていた。

なぜか、息を切らせて肩で息をしている。

狙い澄ましたかのようなタイミング。

見慣れない衣装以上に、それが気になった。

ふと、雨莉の背後に目を移すと、尾羽が携帯片手にひらひらと手を振っていた。

(しっかりやんなさいよ)

口の動きがそう告げられた。

目の前の雨莉が、横に動き始める。

発進位置へ動いていた。

「雨莉っ」

「わやっ」

扉から一步踏み出し、驚きに固まっている雨莉の手を取って引き込んだ。

雨莉の後ろで扉が閉まり、上昇が始まる。

夕焼けに染まった大地が、ぐんぐんと離れていく。

「なー君、その、ちょっと痛いよ」

「え、ああ、悪い」

雨莉の手を強く握っていたことに気がついて、すぐに手を離れた。

「すまん、大丈夫か？」

「うん……大丈夫」

俺の視線を避けるように目を伏せ、消え入りそうな小声で、雨莉が答える。

その姿は、小さく弱弱しく見えた。

もう、彼女にそんな顔をさせたくはない。

俺は、慌てて口を開いた。

「雨莉！俺、お前に話があって、ここに来たんだ」

「え？」

「大事な話なんだ。聞いてくれ！」

「う、うん……」

俺の勢いに、雨莉が驚いた顔を上げる。

「雨莉！」

「はいっ!？」

「えっと、そのあれだ。ごめん！　じゃなくって、いやそれでもない、たかつただけ、本題は別で。」

だから、えーっと……」

色々口にするけど、焦ってまとまらない

雨莉があっけにとられたように見つめている

どうやって伝えられるんだ、この気持ちを。

上手く言葉にできないまま、口を開いたり閉じたりして、

「なー君——」

雨莉が、指を伸ばして俺の唇を押さえていた。

「そんなに焦らなくていいよ。わたしは逃げないし、ちゃんと聞いてあげるから」

「雨莉……」

雨莉が指を離して、ふわりと微笑んだ。

「ふふ、ほんとにもう、仕方ないなあ、なー君は」

その瞬間、俺たちは、過去の中にいた。

『なー君』と『あーちゃん』の関係。

いつも、『仕方ないなあ』と呟いて、俺を助けてくれた『あーちゃん』。

もしかしたら、俺たちの関係はあのころから変わっていないのかもしれない。

俺は必死に変わろうとして、確かに、見た目の上では変わったけど。

でも、本当のところ、俺はずっと、守られていたのかもしれない。

雨莉の一言で、自分でもびっくりするくらい気持ちが楽になって。

本当に伝えたい、一番大事なことが、わかった。

「俺、あーちゃんのが好きだ」

「……うん。やっと、言ってくれたんだね」

俺の告白に、雨莉は静かに頷いた。

涙が浮かび上がり、頬を流れ落ちる。

それを見て、俺は、どれだけ雨莉を待たせていたかを痛感した。

胸の中に、申し訳なさと、そして愛おしさが湧き上がる。

「わたしも、なー君のことが好き——大好きだよ」

俺の顔を真っ直ぐに見上げて、雨莉は応えてくれた。

瞳に浮かんだ雫が、夕陽を受けて星のように煌く。

その星の引力に引き付けられるように、俺は一步雨莉へと近づいた。

「なー君……」

俺の顔を見上げたまま、雨莉が目を閉じる。

俺は、雨莉の身体をそっと抱き寄せて、

間違いじゃない、初めてのキスをした。

<Side OBANE>

雨莉と夏彦の乗ったエレベーターが上昇していく。

それを見ながら、あたしは携帯の向こうにいる智之に話しかけた。

「行っ たわよ」

「ありがとう、霧島さん。面倒をかけたね」

「全くよ。タイミングを合わせるの大変だったんだから」

「ああ、助かったよ」

「一つ貸しだかんね」

「それはあの二人から取り立ててくれたまえよ」

「ん？ まあ、そーね。」

で、これで本当に上手くいくんでしょうね？」

「大丈夫だよ、きっとね」

携帯から聞こえる智之の声は、確信に満ちていた。

ま、その気持ちはわかる。

あの二人が上手くないはずはない。

あたしだって、そう思うから。

ピラーの外はいつの間にか、一面の星空になっている。

俺と雨莉は肩を寄せあつて座席に座り、夜空を見上げながら話をしていた。

「でも、なー君がそんな風に思ってるなんて思わなかったよ」

「いや、普通はそう思うだろ」

「そうかなあ？」

雨莉が首を捻る。

俺たちは、俺の長い勘違いの原因になった台詞についての話をしていた。

『なー君の面倒をみるのは、私の仕事だもん』というあれだ。

「じゃああれ、どういう意味だったんだ？」

「ええとね、独占欲、かなあ」

「独占欲だあ？」

「うん。それをしてもいいのはわたしだけ、みたいな。わたしだけのなー君って意味だったんだよ。」

今は、わたしがなー君のものになっちゃったけど。えへへ」

「そ、そうか」

何と言うか、照れる。

赤くなった頬を押さえて照れ笑いする雨莉は、凶悪に可愛かった。

「あ、そうだ」

俺は、あることを思い出してポケットを探った。

ポケットの中から、出店で買ってきたキーホルダーを取り出す。

「雨莉、誕生日おめでとう」

「わあ、なー君、ありがとう」

そう言っただけで、雨莉は一瞬びくりした顔をして、それから嬉しそうに笑った。

ビニール袋を開いて、中身を取り出す。

しげしげとそれを眺め、自分のリボンの端っこを摘まんだ。

「もしかして、わたしのこれとお揃い？」

「お揃いってのは微妙に違うけど、まあ、そんなもんだな。驚座だよ」

「驚座……って、あの辺りだったかなあ？」

雨莉は、鷺座のキーホルダーを夜空にかざした。

遠い空を横切る天の川のほとりに、銀色の翼が重なる。

「多分、その辺だな」

青白く輝くあれが、アルタイルだろう。

「そう言えば、智之に聞いたんだけどさ。

天の川って言うのは、一つの銀河を見たもので、俺たちの太陽系もそこに含まれてるんだって」

「そうなの？　じゃあ、ここも天の川の中なんだ」

「天の川の、中……そう言われてみると、そうかもしれないな」

「そっかあ。ふふ、わたしたち、織姫と彦星みたい」

「確かになあ……」

天の川を渡って、逢いに行ったのか。

そう言えば、智之が鵲って言ってたっけ。

とん、と肩に重みがかかる。

見ると、雨莉が体を寄せて来ていた。

「でも、織姫と彦星みたいになっちゃ嫌だよ」

「わかってるよ。ちゃんとする、さ」

「んーん、なー君はもう、十分ちゃんとしてるよ。えいつ」

雨莉に頭を引き寄せられ、ほんの一瞬だけ、唇が触れて行った。

「えへへ、ご褒美だよ」

「ご、ご褒美か……。なら、雨莉にも、あげないとな」

「ふえ！？ わたしも！？」

「あつはは、何てな、冗談だよ」

仕返し成功と笑っていると、雨莉がじっと見つめてきた。

「冗談、なの？」

「え？」

「ほ、欲しいな……ご褒美……」

それだけ言うと、雨莉はぎゅっと目を閉じてしまう。

「う……」

俺は、誰も居るわけないのにきよろきよろと周りを見回し、雨莉の頬に手を添えた。

雨莉のまぶたが震え、薄っすらと開いた唇が熱い息を零す。

「なー君……して……」

「ああ……」

顔を近づけ、唇に触れた。

数秒間、触れるだけのキスをして、唇を離れた。

ゆっくりと体を離していると、雨莉が目を開き、

「もっと……」

「え——」

聞き返す間もなく、雨莉の手が俺の頭に回る。

そのまま引き寄せられて、唇を重ねられる。

体ごと全部押し付けて来るような強い口づけ。

疑問を発しようとしたままの唇に、熱いものが触れた。

雨莉の、舌か！？

頭の中はパニック状態だったが、雨莉は構わず口内に舌を差し込んできた。

何だ、これ——

ほとんど体内に異物を入れられているようなもののに、全く嫌悪感はない。

むしろ、より深く触れ合うことへの歓喜が湧き起こった。

俺からも舌を動かして雨莉に触れ、ぎこちなく絡め合う。

胸に置かれた雨莉の手を取って、汗ばんだ手の平を握り合わせていた。

「ぷはっ」

二人とも息が続かなくなって、一度離れる。

だが、雨莉の行動はまだ終わらなかった。

ろくに息も整えないで、また、キスをしてきた。

「ん、はぁ……ちゅ、ちゅ……」

熱に浮かされたようなぼんやりとした瞳で、小鳥が啄むようなキスを繰り返す。

「あ、雨莉？」

「……んう？ ふわわわっ！」

キスの隙間を縫って名前を呼ぶと、雨莉ははっと我に返り、大慌てで顔を離れた。

「う、ごめんね、なー君」

「いや、いいんだけど……積極的だな」

「わーっ、言わないでよ」

「おっと」

雨莉が俺に抱きついてきて、顔を隠してしまう。

けれど、耳まで赤くなっているのが見えた。

「だ、だって、わたしはずっとなー君が好きだったのに、いつまで経っても告白してくれないから。」

恋人になったらやりたいことがいっぱい溜まっちゃったんだもん。なー君のせいだよ。ばかあ」

全然力の入っていない拳で俺の胸を叩きながら、拗ねた口調でそう言った。

そうか、雨莉は、俺のことを好きなまま、ずっと待ってたんだもん。な。

変な言い方だけど、仲良くなる覚悟を、俺なんかよりもずっと強く決めてたんだ。

「ごめんな。ずっと待たせて」

「ううん、いいの」

雨莉は、俺の胸に顔を埋めたまま、首を左右に振る。

「わたしは、なー君と一緒にいるだけで幸せだったから。でも、これからはもっと幸せにしてくれるんだよね？」

「もちろんだ。俺は、お前のことが好きだからな」

耳元で囁くと、雨莉がゆっくりと顔を上げた。

「わたしも、なー君のことが好きだよ」

そして、俺たちはもう一度、唇を重ねる。

何年も昔の誤解のせいで、天と地に隔てられて。

でも、俺たちは再び逢えた。

この、一七夕《STAR FESTIVAL》の星の下で。

<七月十日（水）>

ゆつくりと、意識が浮上していく。

小さく体を揺すられているのを感じた。

「……くん。……起き……。……きないと……」

ぼんやりしている頭に、誰かの声が染み渡る。

その声の主は、すぐに思い描くことができた。

俺にとって、特別になった女の子。

雨莉――。

「って雨莉!？」

一気に意識が覚醒して、目を開く。

「あ、起きちゃった……」

目と鼻の先で、残念そうな声。

俺から引き剥がしたタオルケットを手に、雨莉が俺の顔を覗きこんでいた。

「うん、でも、いいよね。うん」

「は？ 何を――」

一人で勝手に頷くと、雨莉はさらに顔を近づけて、

「ちゅ。おはよふのキスだよ、えへ」

照れ笑いながら、くるっと身を翻してベッドから離れる。

「準備できてるから、早く下りてきてねー」

そのまま部屋を出て行ってしまった。

「な、何だったんだ……？」

後には、ベッドの上で茫然とする俺が取り残される。

ジリリリリリリリ！

そして、今頃目覚ましが鳴り始める。

目覚ましを止めて時間を確認すると、俺がいつも起きる時間だった。

振り替え休日げんじつ、一修学旅行についてのレポート作り《かようび》という変則の時間割が終わって、今日から通常授業。

つまり、この時間に起きるので何もおかしくはない。

やっぱり、雨莉がいたのがおかしいんだ。

「…………寝ぼけてたかな…………夢？」

俺は、首を捻りながら、取りあえず着替えを始めた。

……………

「あ、おはよう、なー君」

「…………おはよ」

一階にあるダイニングに入ると、キッチンにいた雨莉が出迎えてくれた。

さっきのは夢でも幻でもなかったみたいだ。

「ご飯持って行くから、座って待っててね」

「お、おう、わかった」

混乱したまま、促されるままにテーブルについた。

すぐに、キッチンからピンク色の可愛らしいエプロンをつけた雨莉が出てきて、テーブルの上に料理を並べる。

卵焼きときゅうりの漬物、それに味噌汁。

純和風だった。

「なー君、ご飯はどれくらい？　いつぱい？　普通？　ちよっぴり？」

「……じゃあ、普通で」

「はい」

いい返事をした雨莉が、炊飯器からご飯をよそってテーブルに置いた。

エプロンを外して椅子の背にかけ、俺の対面の席に座る。

一体どこからつつこめば良いんだろうか、この状況。

いつそこの状況自体が夢みたいな気がしてきた。

「どうぞ、召し上げれ」

「はあ、頂きます」

にこにこ促されて、取りあえず味噌汁のお碗を手にとった。

油揚げとねぎの入った味噌汁を一口。

「どうかな？」

「どつって、普通に美味いけど」

「そっかあ、よかったあ」

ほっと息をつく雨莉。

味噌汁は、いつもとは味が違った。

それに、この反応ってことは、

「お前が作ったのか？」

「うん、そっだよ」

「お袋は？」

「お義母さんなら、わたしの家に行ったよ。

今日ね、お母さんに起こされたからどうしたのかと思ったんだけど、そしたらお義母さんがいて、なー君のことよろしくって頼まれちゃった」

「また勝手なことを……。悪いな、迷惑かけて」

「うっん、なー君のお世話してあげるの久しぶりだったし、むしろ嬉しかったよ。

なー君が美味しく食べてくれたらもっと嬉しいかな」

「はいはい、わかったよ」

雨莉が喜んでくれるのなら、この妙な状況も悪くない。

俺は止めていた箸を動かして、朝食を食べ始めた。

.....

洗い物をしたいからと言う雨莉に追い出されて、家を出てきた。

先に行つててと言われたけど、学園に遅刻するわけでもないし、待っていることにした。

しばらく待っていると、雨莉が玄関から出てくる。

「雨莉、鍵」

「うわわっ」

声をかけて、鍵を投げる。

雨莉は危なっかしく鍵を受け止めて、手の中の鍵をじつと見つめた。

「合鍵、くれるの？」

「え？ いやいや、お袋いないから鍵閉めないと」

「あ、そっか、そうだね。それじゃあ、閉めちゃうね」

カチリと音をさせて鍵をかけ、小走りで俺の隣まで来る。

雨莉から鍵を受け取って、ポケットの中につっこんだ。

「なー君、先に行つてて良かったのに」

「それは却下」

ばっさり否定すると、雨莉は不思議そうな顔をした。

「すぐそこにいるのに、バラバラに行くことはないだろ。」

今までだって一緒に行ってたし、今は恋人同士なんだからさ」

そう言つと、雨莉は嬉しそうに破顔した。

「うんっ。わたしも、なー君と一緒にがいい」

手を差し出すと、何の躊躇いもなく手を握って、身を寄せてくる。

「なー君、行こっ」

今日もまた、きっといつもと変わらない一日が始まる。

けれど、俺は知ったんだ。

当たり前のように、雨莉と一緒に居られるということの幸せを。

「よし、行こっぜ!」

雨莉と手を取り合って歩き出す。

視界の隅を、雨莉のリボンが流れていく。

琴座と鷺座。

寄り添うように並んだ二つの飾りが、キーンと、澄んだ音を高い空に響かせた。

FIN

<おまけ>

「おはようございます」

「おはようさん」

二人で教室に入ると、教室にいたクラスメイトたちが揃ってこっちを見た。

なぜか、教室のあちこちから、溜息が聞こえてくる。

「なー君なー君、なんだか教室の雰囲気を変な感じだね」

「そうだな。どうしたんだろ？」

「どうしたもこうしたも、あんたらのせいに決まってんでしようが
！」

長い尻尾を振り回して、尾羽が近づいてくる。

「わたしたち？」

「俺らが何かしたか？」

取りあえず席に向かいながら聞くと、尾羽は盛大に溜息を吐いた。

「したって言うか、現在進行形でしてんのよ」

「二人とも自覚がないんだから、困ったものだね」

自分の席にいた智之にまで、呆れた顔をされる。

「何の話なんだ？」

「はあー……。心底不思議そうに言う前に、その腕を離したら」

「……おお」

今気づいたけど、雨莉と腕を組みっぱなしだった。

「雨莉、もう教室だから離してくれ」

「えー、もうちょっとくっついてようよ」

ぎゅっと腕にしがみつきながら、上目遣いでおねだりされる。

ああもう、雨莉は可愛いなあ……。

「つたく、仕方ないな」

「そんなことないよう。」

わたし、なー君と恋人になったらやりたいこといっぱいあるって
言ったでしょ？

なー君が好きだから、いっぱいくっついていたいんだよ。だから、
仕方ないんだもん」

「……確かにそれは仕方ないよな。俺も雨莉のことが好きだぞ」

「なー君……嬉しいっ」

「だあっ、うっとうしいわー！ー！」

突然、尾羽が大声で吼える。

「いやはや、これほどとはねえ……」

その隣で、智之が困ったように笑っていた。

放課後。

俺は、一人で家へと帰っていた。

雨莉と帰りたかったんだけど、尾羽と智之に、修学旅行のときの借りを返すためにメイプルでケーキを奢らされたのだ。

雨莉も一緒に来たが、二人揃って気が休まらないと追いつ返されてしまった。

今度二人で一緒に行ってみるか。

後で雨莉に相談してみよう。

そんなことを考えながら、家に入る。

「ただいまー」

「あ、なー君だ」

玄関から声をかけると、リビングから雨莉の声が聞こえた。

そして、朝と同じく、制服の上にエプロンをかけた雨莉がぱたぱたと駆け寄ってくる。

「お帰りなさい、なー君。お疲れ様でした」

それから、「えーと」と何か考えるポーズ。

「あ、そうだった」

何を思い出したのか、一つ頷き。

「わたしにする？　わたしにする？　それともわたし？」

「全部一緒じゃねえか！！」

思わず突っ込みを入れる。

いや待て、確かにそこもおかしいが、それ以上におかしいポイントがあるだろう。

そんな台詞、新婚ネタでも言わない。

「何をおかしなことを言ってるんだお前は……」

「おかしい……？　あ、ごめんね、ちょっと間違ってたよ」

「正しくは何だったんだ？」

「えーと、わたしとご飯にする？　わたしとお風呂に入る？　それともわたしと……って、なー君のエッチ！」

「理不尽！？」

突っ込みどころの数では何も変わらなかった。

そもそも、何でこいつはここに居るんだろうか。

靴を脱いで上がりながらそう聞くと、

「あのね、うちのお母さんとお父さんと、なー君のご両親とでご飯食べに行くつて。

だから、わたしがなー君のことを任されたの」

ひょいっと俺の手から通学鞆を奪い、一歩後ろをついて歩きながらそう説明してくれた。

「何で俺たちは置き去りにされたんだ？」

「若い者は若い者同士の方がいいだろうつてお義父さんが」

「おじさん……!!」

「違うよ、なー君のお父さんの方」

「親父かよ!!　つーか、何で雨莉までお父さん？」

「うんとね、そう呼んで欲しいって言われたから。お義母さんには朝言われたんだよ」

「そう言えばそんなのがあったな……」

聞き流してたよ。

何だろうなあ、この外堀からどんどん埋まっていく感じ。

「まあいい、いや、良くはないけどそれは置いて、とにかく、それでお前が家にいたのか」

「うん、そういうこと。」

それで、なー君。ご飯にする？ お風呂にする？ それともわたし？」

「結局そこに戻るのか……。こだわりすぎだろ」

「うーん、なー君が喜んでくれるかと思ったんだけど……。裸エプロンとかした方がよかったかな？」

「過激すぎる！？」

「でも、男の人の夢なんですよ？ 週刊誌に書いてたよ？ わたし、なー君が喜んでくれるならなんだってっ」

両拳を胸の前で握り締めて宣言する雨莉。

その姿は可愛いのだが、言ってることは可愛いではすまない。

「半分がゴシップでできてる本（偏見）の言うことを鵜呑みにすんなよ」

「えーそんなあ。色んなこと練習したのに……」

不満そうな声を上げる雨莉。

「練習？」

「うん。男エッチなことの人の悦ぶこと、とか……」

「うぐ……」

恥ずかしそうに小声になっていたが、俺の耳にはばっちり聞こえていた。

それは一体どんなことなんだろう……とか、嫌でも妄想が広がる。

じゃあ、それをしてくれとか言ったら、やってくれるのか――

いやいやいや！

俺は首をぶんぶんと振って怪しげな妄想をかき消す。

それは――いや、まだどんなことかはわからないんだが――まだ早すぎる。

気がつけば、背中が嫌な汗で濡れていた。

「……取りあえずシャワーでも浴びるわ」

水でもかぶれば少しは落ち着――

ぎゅ。

「うん？」

洗面所に向かいかけた俺の制服の裾を、雨莉が握っていた。

雨莉は、真っ赤になりながら、

「わ、わたしと？」

……………さて、どうしよう。

恋人になったらやりたいことがいっぱい溜まってるとは聞いていたが、（色んな意味で）溜めすぎだろう。

俺は、この積極的過ぎる恋人をどうやって宥めるか、頭を悩ませるのだった。

<おしまい>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3072m/>

STAR FESTIVAL

2011年10月9日19時12分発行